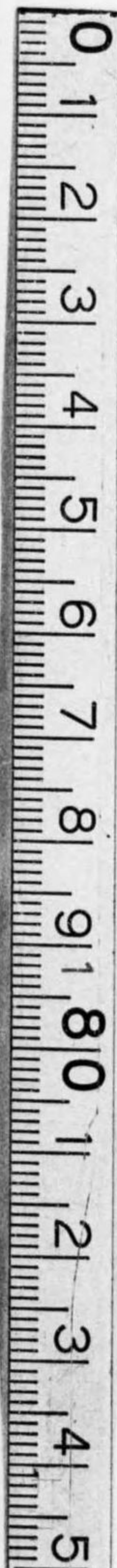


081.7
B 662



始





石の鳥

はな

花の鳥

Handwritten seal or signature in a rectangular frame.



081.7
B662

紀念
第六百年

房總叢書第一卷

緣起及
古文書



紀元二千六百年 念房總叢書刊行の辭

わが房總その沿革極めて久しく、本邦史上に重要な位置を占め、文献古籍の豊富なことは欣賞に堪へぬ所である。然るに、往時出版技術の幼稚なりしたため、あたら珍書の原本又は寫本のまゝ、僅に宮内省圖書寮・内閣文庫・東京帝國大學史料編纂所・帝國圖書館等の收容、もしくは一部篤志家の愛惜に依つて保存され、一般世人に知られてゐないものが多い。大正元年、長生郡鶴枝村の高橋鳴鶴氏ために「房總叢書」刊行を企てたが、二卷にして中止されたので、千葉市多田屋書店主能勢鼎三氏の出資を得て房總史談會（これが續行を圖り、高野松次郎氏（當時縣立千葉高等女學校長）専ら資料蒐集に任じた。高野氏歿し、稻葉隣作氏が引繼いで二十餘年、その間、能勢氏また逝き、史談會は解散し、世に出る機會を失つてゐた。皇紀二千六百年記念のため縣立圖書館長廿日出逸曉氏等が改めて刊行を發起されたのは、此の事業が意義深い文化的美學として、文教に、行政に、永く効果と興味とを寄與するのみならず、併せて、郷土故賢の潛光を顯揚し得られるためで、恰も支那事變下の非常時に、多大の困難を豫期しつゝ、決行された所以である。

かくて本會の基礎を強固ならしむる爲、會長として千葉縣知事立田清辰氏を推し、副會長に學務部長里見富次・千葉市長永井準一郎・前千葉醫科大學々長松本高三郎の三氏を煩し、以下、理事・評議員・幹事には何れも縣政



或は縣教育界に於て樞要な地位を占められる方々をお願ひした。而して、これが頒布方法については會員組織を採り、廣く贊助後援せられる人々全體の力に依つて此の事業が完成されんことを期した次第である。又、これが編輯については、萬全を期するため、縣内或は縣外より夫々の權威を囑託し、これにより數回の會議を開催し、或は委員各自その得意とする書目を選んで解説を執筆された。残る書目の解説を初め、すべて原稿の整理・印刷の校正等編輯に關する一切の事務は、専任として稻葉委員が獨力擔當することとなつた。かくの如くして計畫された本叢書が、永遠に續く房總史の上に貴重な一頁を残さんことを希つて、刊行の辭とする。

皇紀二千六百年十二月

紀元二千六百年 念 房總叢書刊行會

日蓮上人と伊能忠敬翁

○日蓮上人

日蓮上人の傳記については數百種の既刊書があり、上人自身の著述及び門下檀徒に與へた消息(御遺文)も三百八十餘篇現存し、最早加へるところないといはれる。承久四年(一一八二)二月十六日、長狹郡東條郷の小湊に生れた。家系は明確でなく、自ら稱して「海人が子なり」・「民の子にて候」とあるが、或は貫名重忠の第三子とも傳へられる。十二歳で清澄山に入り、十六歳の頃出家得度して蓮長と呼んだ。御遺文中に、「三十二歳に至るまで二十餘年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の國々寺々、あらゆる習ひ回り候ひし」とある通り、過半生を準備期として、修業し續けられたのである。上人が熱烈な國家主義の上に立ち、「立正安國論」・「守護國家論」の書名を以て示す如く、信仰に依り祖國を護らうとした精神には、時と人との別なく頭を下げずに居られぬであらう。當時、佛徒の多くが極樂淨土に憧れて、日本を棄散邊土の下國と思惟した謬見に對し、上人が神州日本の思想を抱き、自國尊重の念を堅持したことは、建治元年五十四歳で書いた「神國王御書」に、「此の日本國は外道一人もなし。其の上、神は又第一天照大神、第二八幡大菩薩、第三山王等の三千餘社、晝夜我が國を守り、朝夕に國家を視し給ふ。云々」と述べ、「我が日本國は一閻浮提の内、月氏漢土にも勝れ、八萬の國にも超えたる國ぞかし」と斷じた點に明白である。彼の承久變は眞に皇國の大恨事で、叡山東寺を初め諸寺諸院の北條調伏も

甲斐なかつたは何故か。これを究め知らうとしたのが上人勉學二天動機の一とされる。他の一は即ち釋尊出世の本懐に就いて、遂に一派を開宗し、建長五年四月二十八日清澄山頂の一角から旭日に向つて宣開し、日蓮と改められたといふ。これがため東條の地頭に郷里を追はれ、松葉ヶ谷の焼打・廻岩の危急・伊豆配流・小松原流血等の法難相次ぎ、文永五年蒙古來牒につき執權時宗以下有司高僧十一名に宛てた所謂「十一通御書」の警告から、延いて同八年の龍の口御難となつたことは、上手づから「外には遠流と聞えしかども、内々は頸を切るべし」として、鎌倉龍の口と申す所に、九月十三日の丑の時に、頸の座に引き据ゑられて候ひき」と書き残されてある。しかも、泰然たる上人に刃の下しやうなく、佐渡へ流された。上人の佐渡に於ける生活は、「法蓮抄」に、「柵には尾花薊萱おひしげれる野中の三昧原に、落ち破れたる草堂の、上は雨もり、壁は風もたまらぬ傍なり。晝夜耳に聞くものは枕に冴ゆる風の音、朝に眼を遮るものは遠近の路を埋むる雪なり。云々」とあり、「開目抄」にも、「日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑の時に頸刎ねられぬ。これは、魂魄佐渡の國に到りて、返る年の二月、雪の中にしるす。云々」とある。「開目抄」は、開卷まづ主師親の三徳を教へ、忠孝一本の道を説き、「われ日本の柱とならん。われ日本の眼目とならん。われ日本の大船とならん」の大誓願に及んでゐる。曾て鎌倉の殿中で「日蓮、王土に生れたれば、身は従ひ奉るとも、心は従ひ奉るべからず」と叫んだ如く、「日本六十六箇國島二つに、日蓮が五尺の身を置く所なし」の苦境に在つて、如何なる壓迫にも屈せず、敢然所信に邁進した覺悟と態度とは、古今東西、多く其の比を見ないであらう。鎌倉から赦免された後は、身延山に幽棲し、門弟の育成に努力しながら、「撰時鈔」・「報恩鈔」・「法華取要抄」・「立正觀抄」・「四信五品抄」・「諫曉八幡抄」・「三大秘法抄」等の

代表的著述に専心せられ、弘安五年十月十三日池上で入寂された。年六十一。

次に掲げてある上人像は、池上本門寺所藏の高さ二尺八寸三分の寄木造で、昭和三年八月國寶に指定された。胎内胸部及び膝裏の墨書銘に據つて、正應元年六月八日に、法弟日持・日淨の兩人が大願主となり、日行・日妙これを助けて造立されたことが知られ、又、「新編武藏風土記稿」には、上人の法弟日法が、上人の目前で彫刻し、上人自ら之を開眼されたものと記載してある。次に、上人の眞筆は中山法華經寺所藏の「觀心本尊鈔副狀」で、文永十年（上人五十二歳）四月佐渡國一谷に於て「觀心本尊鈔」を著し、之を中山の富木常忍に贈つた時に副へたもの、其の全文は、
 帷一、墨三長、筆五官給候了。

觀心法門少々注之、寄太田殿・教信御房等。此事日蓮當身大事也。秘之、見無二志、可被開拓之歟。此書難多答少。未聞之事、人耳目可驚動之歟。設及他見、三人四人並座勿讀之。

佛滅後二千二百二十餘年、未レ有レ此書之心。不レ願國難、期五々百歳、演說之。

乞願曆一見末輩、師弟共詣靈山淨土、拜見三佛顏兒。恐々謹言。

文永十年太才癸酉卯月廿六日

富木殿 御返事

とある。口繪は其の中の一部を示した。

日 蓮（花押）

○伊能忠敬翁

伊能忠敬翁は神保貞恒の第三子で、延享二年（一四〇五）正月十一日に生れた。幼名を三治郎と稱し、七歳で母を喪ひ、十一歳で武射郡小堤村（今は山武郡大總村小堤）の神保家へ引取られるまで、父の養家山邊郡小關村（今は山武郡片貝町小關）五郎左衛門の許に在つて早くも試煉の苦しみを嘗めた。佐原村伊能氏の養嗣子となり、大學頭林鳳岡の命名書を得て名を忠敬と改めたのは、寶曆十二年十八歳の時である。伊能家もとより素封を以て知られたが、當時衰運に屬したので、忠敬これが回復を期し、儉素勤勉、よく資産を倍加せしめた。しかも、慈仁の心厚く、天明三年・同六年の關東大凶作に際しては、家財を散じて窮民多數を救恤した。村吏としての治績また著しく、地頭津田山城守の信賴一方ならぬものおつたが、夙に志す所あつて、家事を其の子景敬に譲り、寛政七年、五十一歳で江戸に出で、高橋東岡から曆術を學んだ。多年の獨修を基礎として胆勉撓まず。東岡また心を傾けて指導し、測量推歩の術に於て上達第一の稱あるに至つた。寛政十二年、蝦夷地沿海の實測を請うて許され、經費の大部を自辨して測量を終へ、「江戸より蝦夷地、この度参り候西別と申す所まで凡そ四百二十里これあり候。この間を少しも残らず足敷を記し申候……よくも仕おほせ候儀に御座候」と、師の東岡をさへ驚嘆せしめた。かくて、享和三年再び官命を以て伊豆・相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・奥州の沿海を實測し、續いて出羽・三越・佐渡・能登・駿河・遠江・參河・尾張の諸州に及び、一大圖を成して復命の功を全うしたので、幕府賞して小普請組に擧げ、文化二年には西南兩海道の測量を命じ、諸藩をして其の勞を助けしめた。仍て直に東海道の測量を始め、南海に出で、畿内に入り、東山道を歴て山陰道を巡り、山陽道から西海に轉じ、足跡を六

十餘州の地に印した。文化十二年、伊豆七島及び箱根蘆湖の實測も終り、同十四年四月には江戸府内圖また作製され、翌文政元年四月十三日を以て永眠した。享年七十四。淺草源空寺の東岡墓側に葬られたのは、死後なほ師恩を忘れざるの遺命に因るのである。後に佐藤一齋その墓碑文を撰して曰く、「君爲人真率、不修邊幅。精力絶人。毎測量命下、輒喜見顔色、不日而發。乃躬歷險阻、凌海濤、奔走數百里。風雨寒暑未嘗少沮喪。何其氣之邁而事之勤也哉。云々」と。其の製圖の精細確實なるは早く西歐専門家に激賞せられ、又、明治政府の帝國新地圖編輯に際し、忠敬翁の圖その骨子となり、特に陸海軍への貢獻は甚大であつた。著すところ「輿地實測錄」十四卷、「測量野帳」數百卷、「山島方位圖」六十七卷、「北極高度測量記」數十卷、「測量日記」二十八卷、その他現存せるもの少くない。明治十六年二月二十七日特旨を以て正四位を贈られた。同四十二年東京帝國大學卒業式に 明治天皇臨幸の際、畏くも翁の遺物に對し天覽の榮を賜はられ、大正二年十一月八日 今上陛下未だ東宮殿下にてましませし時、縣立佐原中學校に於て翁の遺物を台覽あらせられた。東京芝公園圓山の「忠敬翁測量遺功表」は明治二十二年地學協會の建設であり、佐原町諏訪公園の銅像は町民が景仰の發露である。

次に掲げた翁の肖像（伊能家所藏）は、絹本着色で、畫工の落款はないが、翁の嫡孫忠晦の日記文政四年三月十五日の條に、「青木勝次郎來ル。祖父ノ畫像ヲ持參」とあり、同二十日の條に、「予、三宅へ祖父ノ畫像ノ表具ヲ頼ニ行ク」とあるを見ると、翁の歿後約三年頃に、青木勝次郎または勝次郎の知人が描いたものらしい。（勝次郎は繪畫を能くし、翁に従つて測量に努力した）幅の上部には、翁の親友久保木清淵の賛がある。なほ、翁の手蹟は「測量日記」（表題「啓行策略」）の一節で、叢書第八卷四二三頁に全文を掲げてある。（稻葉隣作）



(像人上蓮日)



(像肖翁敬忠能伊)

例言

- 一、コノ叢書ハ第一卷カラ第十卷マデノ外ニ別卷ヲ添付シタ。
- 一、編輯方針ハ各卷ノ卷頭言全部ヲ以テ表明シタガ、収録書ハ、房總ノ事物ヲ記述シタ故人ノ著作ニ限ルコト。
未刊ノ古書ヲ主トシ、明治二十年後ニ印行サレタモノヲ見合セルコト。(抄録ハトシテ二百三十種目(内七十七種目ハ解説ノミ)ヲ選定シタ。
- 一、一般閲讀者ノ便ヲ考ヘテ書目ノ解説并ニ頭註ヲ附シ、句讀點ヲ加ヘ、反讀文ニハ反點及ビ必要ナ送假名ヲ入レタ。
- 一、誤脱ハ一括シテ別卷ノ正誤欄ニ掲ゲタ。更ニ後人ノ是正ヲ切願スル。
- 一、各卷ノ扉ノ文字ハ立田會長、篆刻ハ香取秀眞氏ヲ煩シタ。見返シハ永野草風氏ノ作デ「ちばのかづねをみれば知婆能加豆怒袁美禮婆」(叢書第八卷四五三頁第十卷一九〇頁參照)カラ着想サレタ。

以上

叢書莫問編摩才。 辛苦半生殘稿堆。
忙裏鈔成身似蠹。 病餘覈去體如駝。
鉤玄溫古前賢在。 索秘徵今後繼來。
珍重總房舊容止。 風雲隆替分明開。

素郷 稻葉隣 作

第一卷(緣起・古文書)について

第一卷には、房總の二大偉人日蓮上人・伊能忠敬翁の肖像及び眞筆を掲げ、緣起と古文書とを収録した。嘗て北總の宿儒清宮秀堅その名著「下總國舊事考」の例言で、「此編以_三神祇置_三開卷。蓋表_三崇本敬神之國風也」といはれたが、本叢書また収録書目の第一に「下總國舊事考」の第一・二卷たる「下總式社考」を選び、次いで邨岡良弼の「上總國神社志料」及び「安房國神社志料」を並載した。元來、緣起といふ語は「法華經方便品」の「佛種從_レ緣起」から出たもので、「廣益俗說辨」に「神社の由來を書きたるを緣起といふは非なり。云々」とあるを初め、「益軒神祇訓」には「或問、諸社の由來を書きたるを緣起といふ。如何。答へて曰く、社記と云ふべし。云々」と見え、「松屋筆記」にも「神社の緣起は、ふるくよりいひし名なれど、おなじくは祠記といはまほし。云々」と説かれてゐる。しかし、「諺草」に「神社佛寺の故實を記せるを俗に緣起といふ。緣つて起れる事を記せる故にや」とある如く、例へば「北野緣起」・「賀茂大明神緣起」・「八幡宮緣起」・「住吉明神緣起」・「春日神社緣起」等、一般には、寺院及び神社の建立された由來または其の靈驗記を併せて緣起と呼んでゐる。本卷所收の緣起は其の意味で、しかも殆ど神社のみに限られた觀さへあるが、實は成田山新勝寺・法華經寺・總寧寺・東漸寺・神野寺・清澄寺・石堂寺・妙本寺・誕生寺・安房國分寺・藻原寺・笠森寺・龍角寺等の緣起を掲げる豫定で

あつた。しかし、新勝寺縁起は「成田山史」に、法華經寺・總寧寺・東漸寺のは「東葛飾郡誌」に、神野寺のは「君津郡誌」に、清澄寺・石堂寺・妙本寺・誕生寺・安房國分寺のは「安房郡誌」に、藻原寺・笠森寺のは「長生郡郷土誌」に、龍角寺のは「印旛郡誌」に據つて明白であるから、全部見合せることにした。

古文書は、一半を東京帝國大學史料編纂所の厚意で同所々藏の影寫本から筆寫し、(このためには奥山・土屋兩委員を煩した) 一半を「大日本古文書」・「金澤文庫古文書」等から抄録した。すべて古文書は其の原本に接してこそ尙古好奇の情を發し、又、精確な科學的審査も望まれるので、精巧な寫真版にでもすべきであるが、一般研究者のため、所謂今文讀として、原本の字形書體の如何を問はず之を正楷の眞書に改め、普通の活字に印刷するものも、無意味でない。勿論、原本と對比すれば其の眞相を失ひ、體裁の相違するは當然のこと、それゆゑ、せめて「大日本古文書」の様式に従ひ、活字も十二ポイントを使用したかつたが、其の結果は豫定資料の三分の一を收載し得られるに過ぎない。九ポイント二段組は好んでしたのでなく、事情止むを得ないからである。たゞ、出來得る限り字形筆意や排行に注意し、蟲喰ひ摺切れも文理を審按して讀めるだけ讀み定め、すべて句讀點を打ち、反點を施した。これにより普通の需要が滿され、當時の事實が考究され得るならば本望である。

なほ、「法華經寺文書」・「弘法寺文書」が「常總遺文」にも、「金澤文庫古文書」が「房總古文書雜纂」にもなど同一文書の重複は後掲のを省略した。「香取文書」の割愛については「香取文書纂」解説を御覽ありたい。

(稻葉隣作)

「紀元二千六百年念」房總叢書」第一卷(緣起)古文書」目次

△緣起

- 下總式社考……………一
- 上總國神社志料……………四
- 安房國神社志料……………七
- 香取私記抄……………一七
- 神名帳考證抄。本朝諸社一覽抄。小御門神社御由來記。坂東觀音靈場記抄……………二三
- 上總寺社緣起……………三三

△古文書

- 正倉院文書抄……………三五
- 中山法華經寺文書……………一三三

真間山弘法寺文書……………二七

總寧寺文書……………一八

觀福寺文書……………二〇

下總大慈恩寺文書……………二七

安房 妙本寺文書……………二七

大巖寺・本土寺・東漸寺文書……………二八

神崎神社文書……………二九

大須賀文書……………二九

大戸神社文書……………二九

船橋大神宮文書……………三〇

築田文書……………三〇

金澤文庫古文書抄……………三三

上杉家文書抄……………三八

毛利家文書抄……………三五

常總遺文……………三九

房總古文書雜纂……………四三

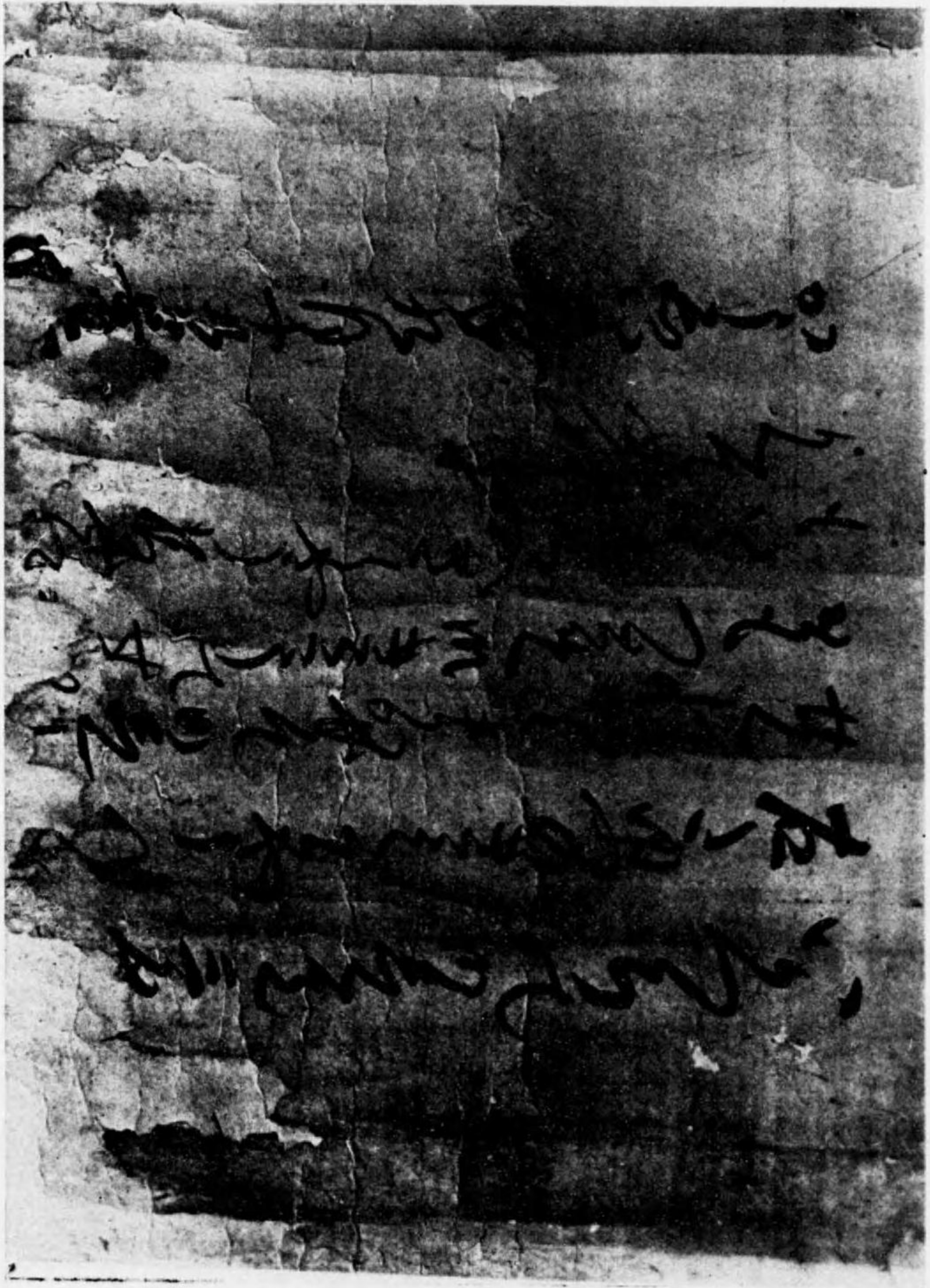
香取文書纂。清宮秀堅遺稿下總文書。大久保文書……………四七

目次(終)

香取文書(四七八頁參照)

年進 函王子神祇
 左 草部谷里者
 神祇神司寄進 自其謝之
 身要父兄弟近親者屬所降之半馬之
 身要身奉為合保給永代神由奉寄以
 神仍降寄文收以
 長治三年四月九日香取大禰宜家
 重德

(香取神宮大禰宜家所藏)



觀福寺文書（二〇二頁參照）

（佐原町觀福寺所藏）

舟橋子願
 信陽
 為西庄
 為東行
 如伴
 二月
 神
 嘉

船橋大神宮文書(三〇一頁參照)

(千葉縣圖書館所藏)

遠詔聞天橋行不絕國馬

野川西取橋事所殺

你付也早促之則中致

沙路、公務探那達如律

元事業行共音個傳者及

續續矣已

續續矣已

下總式社考

【解説】本書は、清宮秀堅著「下總國舊事考」の卷一・二で、「延喜式神名帳」所載の下總國十一座、即ち香取神宮・寒川神社・蘇賀比咩神社・老尾神社・麻賀多神社・高橋神社・健田神社・桑原神社・茂侶神社・意富比神社・蛟蛸神社を初め、「神名帳」所載以外の子松社・惣社・六所社・八幡社につき考證せるもの。其の主旨は伊能穎則の序文にも見え、廣蒐旁羅、參質折衷して至當に歸すと稱せられる。「下總國舊事考」の解説は叢書第四卷五三五頁に掲載。秀堅は佐原の人、通稱利右衛門、棠陰と號し、史學に深い。文化六年十月朔生れ、明治十二年十二月二十日七十一歳で歿した。(稻葉)

下總式社考序

延喜の式の神名帳に載せられ給ひて、朝廷の幣帛奉らるゝ神の社は、其の所々に緣由の在しまして、古への天皇の、蒼生の爲にとて齋ひ初め給ひける神たちに在しませば、今も其の御社を齋き祭り奉りてこそ、其の所々も穩しく、住民どもも安らかにあるべけれ。世の中やう／＼古へに遠く、人の心さかしらになりけるより、何がしの佛は、しか／＼の願事聞かせ給ふ。くれがしの神は、此の事彼の事祈るに驗ありなど、はかなきあいなどのみにかゝりつゝ、新しき寺社は日に月に榮え行くめるを、式内の御社などの面立たしき瑞籬は年を経て荒れのみもて行き、或は其の所だに何所と定かに知られず成りぬるもあるは、いと／＼悲しき事なりけり。そも／＼、大皇國は神の御國にして、今の人即ち神の末裔なれば、唐土の教に従ふ人も、佛の道を行ふ輩も、先づ此の古へ

に重く祭らせ給ひし皇神たちに疎かならず仕へ奉りて後にこそ、おのれ／＼が私の願事をも申すべけれ。内外の辨へなく、本末の理知らずして、おのがむき／＼ならん事は、いみじく悪しきことぞ、昔の人も言ひ置かれにける。此の頃、あだし國の夷どもしば／＼來りて、人の心穩しからず。もし彼の輩、下に穢き心を挟みて、民心を取らん爲に其の國の教を説き勸むる事あらんに、内外の別をも知らず、己が私をのみ營む人は、心軽く移ろひ行きなんもあるべしとて、かねて公に、彼が教をば嚴に禁じ給ふことはあれども、なほ佛の教を藉りて物し給ふなるは、虎を防ぐに狼をもてる類とやいふべからむ。そも／＼、大皇國は神の御國にして、吾ら賤しき民までも、皆、神の末裔なれば、おのれ／＼が爲にも祖にます神たちを齋ひ祭り奉りて、世をも祈り、自らの幸をも祈らんやうにこそ教へ導かまほしきわざなりけれ。さてなん國の御光も今一際立ちまさりて、かしこき御稜威も至らぬ限なくなりなかし。さるは、おの／＼内を尊み、外を卑しめ、本に厚く、末に移らぬ大和魂に立歸りて、天の下の人、一つ心に成りぬべければなり。あはれ、人の上に立ちて世の中を政治ち給はん人、神の社の御衰へを持直して、人の惑ひを解く道に力入れ給ふも在しませかし。あはれ、神の宮人といはるゝ人々、わが仕へ奉る御社の、千木高く、瑞籬きよらに仕へ奉りて、神の御勢ひをも増し奉らんと勤み務むるもありねかし。こゝに、清宮秀堅ぬし、わが下總の國の舊き所々、由ある跡を、年頃尋ね廻りて、今のある形を昔の書に正しく考へつゝ書きつめたる物の中より、帳に載れる神社の葎を押し別け、繁き蓬を刈り拂ひて、式社考と名づけられたる一卷を抜きいでて、此の度、清書して人にも見すべくものせられしは、彼の内外の辨へに暗き人、又、神社の御衰へをよそに見て私をのみ營む禰宜祝たちも思ひ起して、朝廷の御稜威を増し、國の御光を輝さんことも是ぞ本

なるべき由を、司人たちにも心づくがあらんとての下心にぞあるべき。かくて、千木高く、瑞垣美しうして御社に仕へまつるは、禰宜祝の務にして、古へを考へ、今を明らかにし、内外の區別を論し、人を正しきに導くことは、物學びする友の勤しむべき業なるを、さる事とも思ひ辿らで、由なき博士の昔あなぐりよなど謂ひ思はん人もあらば、そは、國の御爲をも朝廷の御爲をも思はざる忠實ならぬ人にこそ。安政の二年といふ年の陸月七日の日、折しも夷舟伊豆の下田に寄せたる聞えあり。

友人 伊能穎則 撰

經津主命・武甕槌命二神、以草味元勳、廟食萬世。神祇式所載、伊勢・賀茂之外、二祠獨以神宮稱、至同宗廟。每二十年、一改造廟祠。則、朝廷崇奉亦至矣。經津主命、遂古以來、奉祀本州香取之地。祭典所由、史籍往々可考焉。其餘、式條所載、國史所錄、凡十二社。而年代愈遠、文獻不足。至或不可知其所祭之神・奉祀之地。可勝嘆哉。蓋、此諸神威靈庇世、能爲民主。是皇朝之盛、所以付田食地、不廢祭祀也。今、神祇式所載爲首、附以贈位名祠及顯祠。如其名稱、歷世之久、間與古異其文字稱呼。而墮晦不明者、今、博徵舊記、參以地名及古老之言、彼此考證、使今古歸一。庶幾不失其實。皇國古制、祭政一致。故冠以神祇、作神祇志。

本州官社、至延喜之時、定爲十一。其他、贈位顯祠一二、齋部廣成雖有所陳、蓋、一人之私憤而不必爲公議。則不足深病當時。爾後、所在如朱印地、隨移隨祀。則讓各所社傳、亦不費多言。但、如各所式內神社祭事、雖瑣末叢勝者、登錄、使覽者因之考其所由、得詳觀當時。則庶幾不負敬神之微意。

可不勝の
不ば除く
べきか

香取神宮名神大 香取郡香取郷ニアリ。社領千石。天正十九年辛卯十一月、賜靈書。

香取鹿島 祭神同體 異名説は 叢書第九 卷一頁 頁參照

本宮ノ神系ハ、日本紀・古語拾遺等ノ書ニ詳ナレバ、更ニ煩シク引キ出サズ。惟、同體異名ノ辨ヲ載セテ、武甕槌命トハ必ず別神ナルコトヲ詳ニス。同體異名ノ辨モ、言長ケレバ、其ノ要ヲ舉グルノミ。鹿島ノ相殿ハ、右 經津主命、左 天津兒屋根命、中 武甕槌命ナリ。元ヨリ同體異名ナランニハ何ゾ經津主命ヲ祭ランヤ。又、延喜式卷第十神祇十、陸奥國牡鹿郡十座ノ内ニ、香取伊豆御子神社アリ。鹿島御子神社モアリ。行方郡八座ノ内ニ、鹿島御子神社、栗原郡七座ノ内ニ香取御子神社アリ。是等モ同體異名ナランニハ、其ノ御子ヲ別ニ擧ゲンヤ。此ノ二事ヲ以テモ、同體異名ナラザル確證トスルニ足レリ。サレド、神階モ鹿島ニオクレ、敷地ナドモ鹿島ノ三分ノ一ナレバ、日本紀ノ此ハ正、彼ハ副ト云フハ、彼此相違ノ傳ヘナリ。サテ、鹿島ハ藤原氏ノ祖神ナリト云ヘバ、朝廷ニテモワケテ敬ヒ給ヒ、隨ツテハ、世ノトリハヤシモ異リシト思ハル。自然、同體異名ト云フ論モ起レル所以ナリ。

香取・鹿島、ソノ外トモ、記・紀ハ勿論、古語拾遺・常陸風土記・出雲國造神賀詞等ニモ、正史ニ漏レタル逸事ハ取ラザルコトヲ得ズ。且、右等ノ古書ノ外ニテモ、其ノ地方一社ノ私説ノ内ニモ歴然ト證スベキハ亦取ラザルヲ得ズ。本宮ノ如キハ、前ニモ云フ如ク、經・武二神ノ別神タルコト、已ニ擧ゲタルニ證ニテ瞭然タリ。猶、逸事ト覺ユルハ、總・常兩國ノ津々浦々ニ海夫ト云フモノアリテ本宮ニ統屬セリ。其ノ古書、貞治・應安ノ頃マデ數通存スレド、誰モ何ノワケナルコトヲ知ルモノナシ。意ヲ以テ推考スルニ、上古二神ハ海門ノ鎖鑰

ニ備ヘラレタリト見エテ、利根江ノ兩岸ニ其ノ祠屹然ト嚴存シ、海夫ト云フモ、其ノ海軍兵丁ナドノ名殘リナリ。又、舟師等ノ子孫ニテ、大將軍タル本宮ニ統屬セシコト、今モ各所津々ノ村名ニ船子ナド云フ村モアルニテ、其ノ事迹推スベシ。又、大戸社ト云フハ、天鳥船命ノ荒魂ナルベシ。大戸社傳フル所ノ祭神ト睽違スレド、其ノ社ノ傳ヘノ手力男命ナリト云フハ、大戸ト云フニツキテ岩屋戸ノ古事ニモトヅケタル推當ノ陋説ナリ。所謂ル大戸ハ大津ニテ、地勢川尻村ニ堤ナキ以前ヲ推考スレバ、舟船輻湊ノ地ト見ユ。自然、鳥船ノ祠ノ所以ナリ。此ノ祠ハ香取ノ攝社ナレド、祠員三十餘名アリテ、他ノ祠ト異リ。已ニ本宮第一ノ末社タル側高ノ社ニテモ祠員ハ一人ナリ。鹿島ノ攝社ノ第一タル息栖社ニテモ祠員ハ二人ノミ。然ルテ、香取ニ次ギ、三十餘員ノ祠人アリテ殊異ノ祭典ノアルハ、コレ神賀詞ニ載スル「天夷鳥命 爾布都怒志命 乎副 天降遣」トアル、此夷鳥命、即チ鳥船命ニテ、大戸社ハ必ず其ノ荒魂ナルベシ。此ノ鳥船ヲ各書ニ天日照・夷鳥・船鳥等ニ作リテ、鳥船ニ作レルハ稀ナレバ、皆、夷照命ナリト思ヘド、然ラズ。必ず鳥船ノ命ナルベシ。鳥船トハ、船足ノ早キニ取レルニテ、後世、輕野ナドモ足ノ早キニ取レルナルベシ。此ノ神、經・武二神ト共ニ、當時大節ノ御使ヲカマフリ、大名持命ヲ媚ヒ和ゲテ、天下ヲ平定シタルハ、二神ニツゲル大功ナルベシ。故ニ、二神ノ祠アル所ニ必ず其ノ祠ナケレバナラヌハツナレド、其ノ祠ノフツニ見エザルハ不審ナリ。故ニ、今、斷シテ鳥船命荒魂トス。ナホ考フベケレド、先ヅ驚シ置クナリ。

大戸川村ニ、御休ト云フ川岸アリ。大戸社ノ旅所ニテ、大戸明神ノ濱オリノ地ナリト云フ。大戸川村ヨリ川尻マデ、森戸・岩ヶ崎等モ大戸ノ分郷セルニテ、元、磯田ノ郷ニテアリシナルベシ。神崎社モ、元ハ物部雄君連

ノ庄園ニテ、健部ヲ置レタル地ト見エテ、今、武田ト云フモ、健部田ノ略ナルベシ。健田ハ和名抄ノ郷ナリ。日本紀ニ、「天武天皇五年六月、物部雄君連、壬申之年、從車駕入東國。以有大功、降恩賜內大紫位。因賜氏上。」トアリ。思フベシ。同社文書ニ、「白鳳二年癸酉二月一日、六所社影向」トアルモ、此ノ年被置タル庄園ニヤ。大戸社ハ鳥船ノ命ノ荒魂ニテ、大戸川ノ東岸ニアリ。神崎社ハ和魂ニテ、大戸川ノ西方岸ニアリ。亦思フベシ。

東庄王子社モ香取ノ御子ニテ、祠員十名アリ。祭祀モ香取ニツギ、別テ二十一年目ニハ御濱オリトテ銚子外川ヘ神幸シ、其ノ地ヲ香取臺ト云フ。ソコニ宮三ト云フモノアリテ、神輿ヲオロスヲ例トス。此ノ家、山口氏ノ人ナリ。且、傍近ニ和名鈔海上郡ノ神代郷アリ。今ハ上代ト書キテ、十箇村ホドニ分レタリ。コレ古ヘノ神領ノ地ナルベシ。又、船木郷アリ。今モナホ船木臺村・小舟木村ナド云フ村アルハ、其ノ名殘リナリ。亦、二神海門鎖鑰ノ一證ト云フ内ニ、上古神領モ、船木ノ地・海夫トモニ香取ニツキテ有リシコト思フベシ。

匠瑳老尾社モ、香取社御子朝彥命ナリト云フ。葛飾地方モ多ク香取ヲ祭り、本州、處トシテ香取・鹿島ノ影祀アラザルハナシ。往古ノサマ思フベシ。

人形送ハ、正月中、日ヲ撰ミ、家々藁ニテ偶人ヲコシラヘ、竹ニテ刀ヲ造リ、紙ニテ指物ヲコシラヘ、香取・鹿島ト云フ文字ヲ題シ、野外ニ送ルヲ例トス。萬葉集卷二十ニ、「阿良禮布理、可志麻乃可美乎、伊能利都々、須米良美久佐爾、和例波伎爾之乎」トアリ。肥前風土記ニ、來目皇子ヲ將軍トシテ新羅ヲ伐チ給フ時、經津主神ヲ鎮メ祭ルトアリ。其ノ古ヘヨリナルコト證スベシ。

王子社、登戸ニアリ。王子三十餘座ト云フ。神宮ノ御子孫三十餘代ノ間、此處ニ祭レリトゾ。山ノ半腹平カナル所ノ土中、比々ト大石連接ス。此ハ墳墓ノ跡ニシテ、石櫛ナルベシト云フ。

延喜式、遷却崇神祝詞云、「天津神能御言以、更量給比、經津主命・健雷命二柱神等乎、天降給比、荒振神等乎、神攘攘給比、神和和給比、語問、磐根樹立草之片葉、語止、皇孫之尊、天降所寄奉支。云々」

職原抄云、「本朝將帥之任、起於神代也。其初、天照大神欲降天孫於豐葦原中國之時、遣經津主神・健雷神、令平諸不順者。云々」此ハ本朝將帥ヲ任ズルノ原始ニシテ、親房ノ記ノ如ク、武神ノ棟梁タルコト仰ギ崇ムベシ。栗田寛云、「香取大官司家所藏、康永三年五月文書ニ、當社大明神者、日本開關靈應、異國征伐軍神也ト云フ事見エタリ」ト。

香取武名記長保二年、大官司從五位上左馬頭大中臣武名所記。云、「自神代鎮座。文武天皇三年、詔犬養小佐見造營之。」ト。犬養小佐見ハ何人ナルヤ詳ナラズ。天武ノ頃、犬養五十君アリ。其ノ氏族ノ人ナルベシ。

正和五年ノ大禰宣實長注進狀云、「神武天皇十八年戊寅歲、始建宮柱。」鎮座ノ形メハ國史ニ見エズ。唯一社ノ傳ノミニテ、其ノ詳ナルコト知ルベカラズ。サレド、書紀ノ本文ニモ坐處ヲ記セルニ、後世ノ詞ナリセバ、「坐下總國香取。」ナドアルベキヲ、サハナクテ、「東國楫取之地」ト記シタルハ、古キ傳ノマ、ノ辭ト見ユレバ、最尙シク鎮座セシナルベシ。香取・鹿島ノ如キハ太古ヨリノコトナレバ、神代鎮座トモイヘルナルベシ。サレバ、本宮ノ舊傳ニ神武天皇ノ時ト云ヘルモ、サルコトニコソ。ソレヨリ許多ノ星霜ヲ經テ、宮所ノ沿革モナク此ノ地ニ鎮座セルコト、仰ギ敬フベシ。文武ノ朝ニ造營セシト云ヘル

コト詳ナラズ。コハ、中古興葺ノ規ヲイヒシナルベシ。或ハ大同二年ノ創立ナド云フ説アレド、是亦修理ノ規
ヲイヘルナルベシ。

神記云、「正神殿四座、經津主命一座、相殿三座、姫大神・武甕槌命・天兒屋命」ト。嘉吉四年文書、并ニ新福寺
古額ニ、香取四所明神トアリ。

御造營用途雜記云、「男體料々女體料々王子三十八所々」ト。神寶記云、「以廣予爲鎮座」ト。古額ニ、香取四所明神トアリ。

内陣ノ事ハ一社相傳ノ祕説ナレバ、只ソノ著レタル名ノミヲ記シ、三神ノ相殿ニ鎮座スル事ハ、一社ノミノ崇
祀ニテ、朝廷ノ幣ハ經津主命一座ナルベシ。故ニ、延喜式ニ、「下總國香取郡一座、香取神宮」ト記セリ。伊勢

兩宮ノ相殿ノ如キ、「大神宮三座、天照大神一座、相殿二座、豐受宮四座、豐受大神一座、相殿三座」トアルハ、
相殿トモニ官幣ニ預ルナリ。自餘ノ祠ノ相殿ハ、多クハ一社ノ相傳ニヨル事ナルベシ。今、武甕槌命・天兒屋

命ハ、神代ヨリ幽契マシマス尊神ナレバ、姫大神ト共ニ相殿ニ奉齋ナリ。常陸風土記ニ、「天之大神社・坂戸
社・沼尾社、合三所、總稱ニ香島天之大神」ト見エタリ。鹿島ノ傳ヘニ、「天之大神社ハ大宮武甕槌命、坂戸社

ハ天兒屋命、沼尾ノ社ハ經津主命ナリ」トシ、又、大宮内陣ニモ、姫大神ト共ニ三神相殿鎮座スルコト香取ノ
傳ト相同ジ。然レバ、三神合體ノ事ハ、往古ヨリ幽契マシマス事ニテ、相殿ニ鎮座スルコト、春日遷座ニ創ルニ

ハアラザルベシ。式ニ所載三千百三十二座、唯、伊勢内宮ヲ大神宮ト稱シ、外宮ヲ豐受宮ト稱シ、諸國ニハ筑
前國宮崎宮・豐前國宇佐宮ナド、宮ト稱スルモノ僅ニ數フル迄ナリ。自餘ハ、賀茂・熱田・出雲・杵築ノ社ノ

如キモ、共ニ神社ト稱セリ。ソレガ中ニ、香取・鹿島バカリ神宮ト奉稱テ、萬ノ事最嚴奉齋ハ、天津日嗣ヲ
弼成シ給ヘル元勳ノ故ナルベシ。大祓祠後釋附錄、比賣神ハ枚岡四座ノ内也。
兒屋根命ノ后神ナドニヤオハスラント云フ。續紀云、「寶龜八年秋七月乙丑、内大

臣從二位藤原朝臣良繼病。叙其氏神鹿島神正三位、香取神正四位上」ト。
續後紀云、「承和三年夏四月丁未、奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正三位、常陸國鹿島郡從二位勳一等建

御賀豆智命正二位。同六年冬十月丁丑、奉授下總國香取郡正二位伊波比主命、座常陸國鹿島郡正二位
勳一等建御賀豆智命、並從一位」ト。文德實錄云、「嘉祥三年九月、遣參議藤原朝臣助向春日大神社。策命

曰、建御賀豆智命・伊波比主命、二柱乃大神乎波正一位爾、天兒屋根命乎波從一位爾、比賣神乎波正四位上乃御
冠爾上奉利云々」ト。是、當時昇階ノ次第也。

式時云、「下總國香取神社、正殿廿年一度改造。其料便用神稅。如無神稅、即充正稅」
三代實錄云、「元慶六年十二月九日丁未、勅以下總國神稅稻五千八百五十五把充造正一位勳一等香取神社雜

舍料。隔二十年一作。例也」ト。
神殿ハ二十年ヲ隔テ、造替アルヲ、伊勢ニテハ、式年遷宮トモ、式年造營トモ云フナリ。若シ其ノ間ニ破損ノ

事アリテ造營スルヲ、臨時ノ遷宮トイフ。往古、名神ノ社ハ、都テ式年造營セシトハ云ヘド、オシナベテ悉ク
カ、ル事ニハアラジ。ソレガ中ニ、ワキテ尊キ社ノミヲ式ニアラハシテ造營アリ。同書ニ、「凡諸國神社隨破

修理。但攝津國住吉・下總國香取・常陸國鹿島等神社、正殿廿年一度改造」ト。此ノ事何レノ時ヨリ定マリシ
事ニヤ。式年ノ造替ハ正殿バカリト見エタリ。是ハ、嵯峨天皇ノ時、弘仁三年六月ノ宣ニ、「其ノ費多キガ爲

ニ正殿バカリテ改造シ、其ノ餘ハ破ル、ニ隨ヒテ修補スベキ」由、日本紀略ニ見エタリ。サレド、香取・鹿島ノ
如キハ、其ノ後モ悉ク改造セシニヤ。三代實錄ニハ、「充造雜舍料」トイヒ、又、「貞觀八年正月、鹿島大

神宮、總六箇院、二十年間、一加修造。ナド見エタレバ、諸社マデモ改造セラレシナルベシ。特ニ改造ノ時ハ造宮使ヲ命ゼラレシト見エテ、大中臣本系帳ニ、「清鷹五代ノ孫從八位下數並、造香取宮使」ト記セリ。譜中代ヲ推考スルニ、延喜・天曆ノ頃ナルベシ。其ノ頃ハ、式年ノ沙汰モ正シカリシニヤ。

栗田寛云、「延喜四時祭式、春日祭ノ條ニ、其封物者、割ニ下總・常陸兩國、香取・鹿島ニ神封、調布ニ云々。送ニ神祇官ニ云々トアルハ、延曆二十年ヨリノ制ト聞エタリ」ト。其ハ新抄格勅符ニモ、「太政官符ニ神祇官。一應割ニ神封物、充春日祭料上事。調布五百端、下總國香取神封二百端。常陸國鹿島神封三百端。庸布三百端、商布六百端、麻六百斤、紙六百帳、神封右件神封物割充如レ前。仍須毎年納ニ送祭所。自餘雜物、一同如レ前。符官宜ニ承知依レ件施行。延曆二十年九月二十二日」トアリ。此ノ事、春日ノ事ニテ此ニ要ナキガ如クナレド、封物ヲ割充ルコトノ原始ナリ。往時、本宮ノ造營ハ、國中郡郷ノ課役ニシテ、官米ヲ輸シテ造進セシト見エタリ。寛元・文永等ノ造營雜記ニ載スル所、左ノ如シ。

印西條は
印西庄か

- 正神殿 作料官米千五十斛。
- 内院中門 北條役。
- 不開殿 小見郷役。
- 勢至殿 神保郷役。
- 寶殿 猿俣郷役。
- 東廊 風早郷役。
- 渡殿 小見郷役。
- 外院門 印西條役。
- 佐渡殿 匝瑳北條役。
- 嬪殿 大戸神崎役。
- 東西腋門 平塚郷役。
- 西廊 矢木郷役。

- 祭殿 百二十斛。結城郡役。
- 酒殿 河栗・遠山方役。
- 大炊殿 國司ノ沙汰。
- 玉垣 國司ノ沙汰。
- 一ノ鳥居 印東庄役。
- 三ノ鳥居 大方郷役。
- 中殿 五十斛。植生西條役。
- 廳屋 大須賀郷役。
- 薦殿 國司ノ沙汰。
- 樓門 植生印西役。
- 二ノ鳥居 葛西郡役。

其ノ注進ノ次第ハ、鎌倉ヨリ京師ヘ執奏シ、官符及ビ勘文等ヲ申下シ、奉行人ニ命ジ、國司ト共ニ造營ノ功ヲ可レ被レ遂旨ノ御教書ヲ賜ハリシト見エタリ。其ノ頃ノ國司ノ沙汰、千葉家ト雙方ノ所務ナリ。往時ノ造營、今ハ大半廢參籠所・樓門・東西廊・三所ノ鳥居ナリ。其ノ拜殿ハ、古時ノ祭殿・中殿ノ類ナルベシ。御供所ハ大炊殿、參籠所ハ廳屋ナルベシ。勢至殿ノ名ハ形バカリ殘リテ末社ニ列レリ。式省云、「下總國香取郡爲ニ神郡。」

栗田寛云、「左經記ニ、長元七年八月廿五日壬午早旦、中宮御使詣ニ賀茂。云々。已刻許歸レ家、令ニ大外記頼隆眞人草ニ鹿島・香取御祈祭文二枚、憲實書狀ニ々。此事如ニ意思。爾令ニ相叶ニ給ハ、其養金銀御幣、神寶大般若經一部、奉ニ爲法樂莊嚴。書寫供養ツラム。又、御封十五戸奉ニ分寄。云々。鹿島十戸。又、瑠璃壺入白玉、此度被レ奉ニ鹿島。密々詣ニ兩社、可ニ祈申之由、書ニ副消息、送ニ大進甲斐守頼經朝臣許。是近曾見ニ故九條御日記ニ之次、安子后被レ祈ニ男童子之間、依ニ眞信公御教、九條大臣被レ祈ニ鹿島。其後不レ經ニ幾年。頼男皇子誕生。仍所ニ申行ニ也」ト。神郡ハ、後世ノ神領トイヘルモノトハ異レリ。式神宮式ニ、「神領神戶、調庸田租者、依ニ國司所レ移之調文租帳

等、官司勘納。其勘納之狀、附國司、移送主計・主税二寮。又、神郡校班、損不堪レ個。及、計帳疫死等政、官司與國宰共行レ之。又、神郡神社溝池堰驛家官舎、若致破損、及、桑漆等不催植者、拘官司解由。ナドアレバ、一郡悉ク本官ノ所務ニ屬ストイヘド、後世ノ神領ト云ヘル如ク其ノ地ヲ祠氏ノ人ニ賜ハリ、己ガ有トスルトハ異リ。唯、郡中ノ政、大小都テ官司國宰ニ對シテ執リ行ヒ、租賦ハ相共ニ檢校シテ所司ニ輸納シ、時ニ臨ミテ造宮及ビ祭祀ノ用ニ充テシナリ。サレバ、大社ノ在ル所、オシナベテ神郡トイフニハアラジ。式ノ文ニ、「伊勢國飯野・度會・多氣、安房國安房、下總國香取、常陸國鹿島、出雲國意宇、紀伊國名艸、筑前國宗形等郡爲神郡。」トアレバ、特ニ勳功ノ神ノ坐ス所ヲ神郡ト定メタルナルベシ。コハ、何ノ時ヨリ定メタル事ニカ。常陸風土記ニ、孝德帝ノ時、鹿島神郡ヲ置レシ由、記シタレバ、古クヨリ定メタル事ト見ユ。香取ニ神郡地ヲ置レシ事、其ノ創詳ナラズトイヘド、多クハ鹿島ト同ジコトナルベシ。

古語拾遺ニ、「崇神天皇六年、日本紀ニハ七年ニ記セリ。定天社・國社、及、神地・神戶。」ト見エタルハ、置神地ノ始ナルベシ。香取郡ノ神郡タルコト式ニ見エタレバ、神地アル事モ最古キ事ナルベシ。

天正十八年五月、淺野彈正小弼・木村常陸介ガ神領制札ニ曰ク、「香取十二箇村、大戸六箇村。」ト。十二ヶ村、六ヶ村、今何レノ村里ナルカハ詳ナラズ。サレド、中古以來カ、ル事ト見エテ、或云、國分胤信ガ文書ニ、十寛元元年九月、北條武藏守時ガ神領沙汰書ニ、當社領十二郷ト見エタリ。サレド、何レノ郷村ニテ十二ヶ村ナルコトカ詳ナラズ。嘉元二年ノ和與狀ニ、「下總國香取社領、葛原牧・小野・織幡・加符・相根・二俣・大畠・佐原・津宮・返田・丁子・追野・小見・木内・福田以下村々租穀」ナド云フコトアリ。以上村數十五アリ。又、

貞治七年三月、沙彌誓阿等ガ連署ノ文書ニ、「長房所領、小野・織幡・葛原、次十二ヶ村散在村々」トアレバ、右ノ十五ヶ村ノ内、葛原・小野・織幡ヲ除キテ、残り十二ヶ村ニテモアリヤ。小野・織幡ハ別テ名所ヲ稱セシモノ數々アリテ、承久二年十月、北條陸奥守義時ガ文書ニ、「香取大禰宜實員所領、下總國小野・織幡兩村、三七代之間、于今無濫妨。」ト見エ、又、應保・仁安ノ頃ノ文書ニ、「葛原牧内、小野・織幡、大禰宜相傳所領也」ナド云ヘル事アレバ、コレヲ除キテ十二ヶ村トモ云ヒシナルベシ。ナホ以下村々トアレバ、十五ヶ村ノ外ニモ所々アリト見エテ、長寛二年政所下文ニ、「大禰宜眞房知行大戸・神崎、并、小野・織幡村事」トアリ。又、至德二年ノ文書ニ、「香取社、神崎庄内、小松・南城・上方・高・大和田・小野・神生、神祭物事」ト見エ、嘉元二年ノ文書ニ、「大戸・神崎・村田・櫻田以下神祭物事」ト見ユ。又、建永二年政所下文ニ、「神宮寺・柴崎兩浦者、有レ限神領也。云々」至德二年ノ文書ニ、多部・蟲畑アリ。處々散在ノ神領ト見ユ。サレド、一村不殘神領ニモアラザルベキカ。寛元元年北條武藏守ガ文書ノ中ニ、「當社領十二郷、其内九箇郷者、千葉介之領也」トアレバ、村里ノ大小ニヨリ、千葉領ト相交リシナルベシ。武名記ニ、「神領御敷地、方七里」ト記セルハ、神郡ヲ直ニ神領ト記セルナルベシ。今、地勢ヲ考フルニ、香取郡ハ、北常陸ノ界ヨリ、南上總ノ界ニ至ルマデ凡七里。東海上郡界ヨリ、西埴生郡ノ界ニ至リテ、十里ニ及ベリ。唯、和名抄ニ據ルニ、大倉・麻績今、ト云。編玉ト云フ。今ハ香取郡ナルガ、海上郡ニ屬シ、又、應保二年ノ文書ニ海上郡木内ト記セシ所モアレバ、大抵、東西モ七里程ナリ。統テ七里四方ト記セルナルベシ。俗説ニ、「香取神領、古ハ十二萬石アリテ、葛飾郡行徳ニ一ノ鳥居ヲ建テタリ」トイヘルハ、據所モナキ妄説ナリ。是ハ社領十二郷トイヘルヲ言ヒ謬リシカ。或

ハ、今、香取郡十二萬石ノ郡高ナレバ、神郡ヲ神領トシ、後世ノ持高ノヤウ言ヒナシテ神領十二萬石ト云ヒシナルベシ。行徳ノ一ノ鳥居ニ至リテハ安ノ甚シキナリ。但、古ヘ大禰宜家ニテ行徳ノ關ヲ管領セシ事アルニヨリテ、是等ノ事言ヒ出セルナルベシ。

楫取ノ義、詳ナラズ。大船ノ香取萬葉集・浪アラキ香取光後ナドアルハ、楫取トイヘル義ニヤ。香取ノ地ヨリ鹿島ノ渡リ迄ハ、古ヘハ一面ノ大江ニテ東海ノ潮ヲ通ジ、逆流沸騰シテ水路險惡ノ地ナレバ、浪逆ノ海トモ、楫取ノ海トモ云ヘルナルベシ。又ハ夏衣香取定家・袖窄香取資雅トイヘル冠辭モアレバ、往古、絹布部ノ人ノ住ミ所ナリトテ、カトリトモイヘルニヤ。古語拾遺ノ國ノ名モ麻ニヨレリ。殊ニ、宮地近キ里ニ小見織麻ナド云

ヘル地アルモ、絹ニ縁アルヤウニ覺ユ。攝社ニ健甕槌神ノ鎮座モ、倭文ヲ織リ初メ給ヒシ神ナレバ、其ノ名ヲ高房ト稱ヘシモ、此ノ神ノ業ヲ稱セシナルベシ。彼此考フレバ、絹布部ノ住ミシ地ニモアリヤ。

延喜式内藏云、「香取社。官司・禰宜、各一人。物忌一人」又、大藏云、「香取社。物忌二人、官司・禰宜・祝、各一人」ト。

本宮ノ祠氏、八十餘員。官司・禰宜・祝・物忌ハ式ノ定員ニシテ、其ノ他、權禰宜・副祝・物申祝・宮之介・國行事ナド、一社司掌ノ舊職アリテ、各ソノ舊業ヲ守リ、年中ノ祭祀ニ供奉シ、古ヘヨリ白河・吉田ノ所務ニ屬セズ。別ニ執奏ヲ賜ヘリ。當時、一條家ヨリ執奏ス。按ズルニ續後紀ニ鹿島大神宮權官司ノ稱アリ。本宮ニモ其ノ職アリシナルベシ。古ヘハ吉田家ノ執奏ナリ。鹿島モ同シ。其ノ後、鹿島ハ鷹司家ニテ執奏シ、香取ハ一條家トナリシトイフ。

玉藥云、「寛喜元年五月、二條中納言來申。香取神主助道、父祖三代相續。此職、康治以降他流相續二十餘年也。

實廣申云、香取神主本流中臣也。助道者、大中臣也。鹿島神主餘流也。而康治之比、中臣氏互相交補也。就中、助道三度補ニ此職。其治纔六箇年也。社家稱不吉。加之、長者之始、近例多改ニ補之。尤可ニ改仰ニ歟。當流之習、以ニ嫡子ニ補ニ大禰宜、以ニ二男補ニ神主。仍ニ二男無ニ其仁之時、助道之流、間拜任歟。余仰云、長者之始、法性寺以往、御心不レ被ニ改任。而保元以後、長者無ニ讓之儀、被ニ下ニ宣旨。遷替事出來後、多被ニ改任ニ歟。所謂保元・治承・文治・建仁・建永等也。保元・永萬・承久等不レ被ニ改。可レ謂不ニ快然ニ者。實廣可レ爲ニ神主之由、可レ給ニ政所下文ニ者」ト。或ハ云ク、助道ハ中臣氏ニテ、鹿島系ニアリ。香取ハ大中臣ナルコト後ニ見ユ。玉藥ハ彼此ヲ取リ違ヘタル説ナリ。

大官司、永職トナリシハ其ノ年代詳ナラズ。家系ハ清麻呂ノ流裔ニシテ、宣年ヲ以テ家祖トセリ。思フニ、宣年ノ子孫、神郡土著ノ編戶トナリシナルベシ。サレド、官司ノ職ハ素ヨリ限任アレバ、氏族補任ノ外ニ、京師ヨリ遷代補任シ、又ハ、鹿島官司ヨリモ交補セルノ類ニテ、或ハ世襲セシ事モアリ。土著ノ舊族、知房・周房ナド、却テ職事ニモ及バザリシカバ、愁訴セシナルベシ。文永・弘安ノ頃、「大中臣氏龜若女、可レ進ニ退社領」ト云ヘルハ、例幣ノ勅使ト、勅任ノ職トヲ、相混ジテ謬リ傳ヘシナルベシ。古ヘ例幣ノ勅使、事ニ

家興行之沙汰、可レ被ニ全ニ神事。トアルハ、是等永職トナリシ始ニヤ。貞治五年ハ觀應元年ノ後十七年、實顯神主ニ、如レ元管領不レ可有ニ相違。ナド見エタルハ、襲職ノ補任ナルベシ。其ノ後モ續イテ襲職補任ノ宣旨數十通家藏セリ。土俗ノ説ニ、「大官司ハ勅使ノ家ナリ」ト云ヘルハ、例幣ノ勅使ト、勅任ノ職トヲ、相混ジテ謬リ傳ヘシナルベシ。古ヘ例幣ノ勅使、事ニ

下總式社考

一五

觸レテ參向ナキ時ハ、此ノ家ニテ勅使代ヲ勤メシナルベシ。今モ伊勢兩宮、九月神衣祭ニ、勅使參向ナキ時ハ大禰宮司勅使代ヲ勤ムト云フ。本宮モ其ノ類ナルベシ。大禰宜ハ、延喜式定員ノ家ニテ、承和中、「香取禰宜可レ令レ把レ笏」ト云ヘルモ此ノ家ナルベシ。往古ヨリ奉任ノ舊職ニテ、遠祖秋雄トイヘルハ最上代ノ人ナル由、家系ニ見エタリ。中頃、氏ヲ命ゼラレ、年曆詳ナラズ本宮ノ中臣部トシテ大中臣ト稱シ、永續ノ家也。保元元年政所下文ニ大中臣惟房ト書セリ。其ノ外ノ任符、往々ニ大中臣某トアリ。建久七年十二月、關白政所任符下文ニ、「大禰宜職者、嫡々相承、敢無レ有ニ異儀。」ト。又、寛喜元年四月ノ下文ニ、「大禰宜職者、自ニ元秋雄之時、至于實澄ニ三十九代、敢無ニ異論ニ所レ補也。」ナド見エ、其ノ外、世々ノ任符・長者宣ナド家藏セリ。ナホ神事ノ外ニ、關所ノ管務アリテ、風早庄内大境、下河邊内彦名關・鶴曾根關・猿俣關務ノ事ナド、古文ニ見エタリ。又、常陸・下總海夫事トイヘル文書アリテ、行方郡・鹿島郡ノ西浦・北浦津々郷村ヲ記セシモノナド藏セリ。猿俣關務ハ、大宮司ニモ管領ノ文書アリ。浦々ノコトヲ管領セシニヤ。

祝ハ物申祝ナルベシ。此ノ家、大中臣ヲ氏トシ、職掌モ賤シカラズ。司召ノ神事ノ時、此ノ職掌ノ人、惣神官ヲ呼ビ立ツルヲ例トス。

物忌ハ、内陣出納ノ職ニテ、古ヘ奉幣ノ時ハ、宮司・禰宜・祝ト俱ニ物賜ハリシコト式ニ見エタリ。文和元年十月ノ長者宣ニ、「當社御物忌社司等」ト見エタルハ、官ニテモ卑シカラズ執リ成セシト見ユ。東鑑ニ、鹿島ノ事ノ中ニ、御物忌ト記セリ。今ハ衰廢シテ、中臣氏ノ女、ソノ職ヲ襲グノミナリ。鹿島ハ、今モ目出度ク其ノ職ヲ傳ヘタリ。齋宮モ、物モノイミナリ。然ルチ、文字ヲ替ヘテ尊卑ヲ別ツハ、邦俗ノ常ナリ。

占部ハ、祭事龜トノ事ヲ掌ル。古ヘハ諸社ニ占部ヲ置キシニヤ。延喜大神宮式ニ、「置ニ大神宮司卜部一人。令

トニ年中雜事。」ト。又、續紀天平十八年ニ、「鹿島郡卜部五烟、賜ニ中臣連姓。」ナド見エタリ。當宮ニモ、應保ノ頃ノ古文書ニ、判官代占部延清ナドイヘル名ハ、其ノ職ノ人ナルベシ。後世、ソノ職廢レテ、唯、ソノ形バカリヲ傳ヘ、外ノ祠氏ノ家ニテ兼ネ行ヘリ。正月三日ノ夜、御占燒神事、七日夜御田鋤入ノ日ヲトスルナド、素ハ占部ノ預レル事ナルベシ。里俗ニ筒粥ト云フ事アリ。正月神社ノ廣庭ニテ粥ヲ煎、沸クヲ見テ、五穀ノ熟否・風雨ノ多少ヲ卜定ス。何明神ノ筒粥ナド云フ事アリ。コレヲ社ニ屬セシ占部ノカタノ殘レルニモアルベシ。

印播郡ニ浦邊村アリ。古ヘ占部ノ舊地ナルベシ。海上郡ニ神宮寺村アルモ、神宮寺ニ屬セシ地ナラン。香取郡櫻井邊ヲ神代ト云フハ、古ヘ神領ノ名殘リニヤ。

物申祝讀レ之其文ニ曰ク、

敬白。惟當來歲次年號正月元日、撰ニ定吉日良辰、掛忝令ニ御座被レ崇賜、本朝鎮守棟梁正一位勳一等香取大神宮、并王子三十餘ヶ所、左右八龍神等、於ニ宇豆廣前、依ニ恒例次第、社官等姓名、令ニ召進ニ之狀。

- 一、大宮司位階 大中臣朝臣實名 召 右大禰宜位階 大中臣朝臣實名 召
- 左宮之介代 召 右權禰宜位階 大中臣朝臣實名 召
- 左物申祝位階 大中臣朝臣 召 左國行事 召
- 右大祝楫取中臣 召 左副祝中臣 召
- 右惣檢校中臣 召 左權之介源 召
- 右行事禰宜藤井 召 左錄司代中臣 召
- 右田所藤井 召 左案主中臣 召

下總式社考

右正檢非違使中臣	召	左權檢非違使中臣	召
右押領使藤原	召	左六郎祝藤原	召
右禰宜祝中臣	召	左三郎祝文屋	召
右權中臣	召	左瑞祝中臣	召
右源太祝中臣	召	左擬祝中臣	召
右五郎祝藤原	召	左酒司藤原	召
右修理檢校中臣	召	左幣所祝中臣	召
右鄉長中臣	召	右高倉目代藤原	召
右文三郎祝中臣	召	左小長手中臣	召
右中祝中臣	召	左油井兼仗藤原	召
右迫田兼仗磯守	召	左大細工文屋	召
右鍛冶兼仗中臣	召	左分飯司鑰取	召
右權次郎祝文屋	召	左脇鷹祝藤原	召
右吉原兼仗文屋	召	左土器判官代藤原	召
右佐原禰宜中臣	召	左正判官代藤原	召
右權判官代	召	左秀野長中臣	召

右判官代中臣	召	左角案主文屋	召
右田冷中臣	召	左木守判官代	召
右權檢校中臣	召	左四郎祝中臣	召
一、內院座			
左大神主中臣	召	右四郎神主中臣	召
左內院神主中臣	召	右內院神主中臣	召
左內院神主中臣	召	右內院神主中臣	召
左內院神主中臣	召	右內院神主中臣	召
一、神夫座			
左薦長神夫	召	右新藤神夫	召
左一ノ神夫	召	右二ノ神夫	召
左宿直惣使	召	右定使	召
一、大床 <small>并</small> 神子座			
左物忌中臣氏女	召	右八乙女中臣氏女	召
左大命婦	召	右天道命婦	召
左坂中命婦	召	右松山命婦	召
下總式社考			

左堀川命婦	召	右和田命婦	召
左神子別當	召	右鏡命婦	召
左四郎大夫	召	右孫大夫	召
左近藤大夫	召	右三郎大夫	召
左民部大夫	召	右兵衛大夫	召
左民部大夫	召	右笛大夫	召
一、御讀經所座			
寺別當	召	左定額代	召
右又見	召	左不斷所	召
右圓壽院	召	左神主供僧	召
右讀師	召		

右依恒例次第、社官等之姓名、命召進之狀如件。

以上司召、各職名召當テ進一揖ス。亦中昔迄、姓氏之下實名記唱呼。今略之。願再興。爲事畢而各大庭進着席。

神宮寺ハ、言家ノ社僧、神前ノ法樂ヲ奉レル寺ナリ。建永二年、關白政所ノ下文ニ、「當社大神宮寺佛聖燈油修理料田等、自大明神御垂跡之始、被安置神宮寺之後、所被宛置。修正佛聖燈油修理料田等也」ト見エ、又、

永久四年ノ頃ヨリ被宛置由見エタリ。古鐘一口アリ。識ニ云ク、「下總州香取大神宮寺大鐘一口、大檀那周防守宗廣、炳焉ナリ。續紀ノ伊勢大神宮寺ナド考ヘ知ルベシ。寺ヲ褒美スル大ニハアラジ。修正トイヘルハ觀音ノ修正會ニテ、今ニ怠慢ナク行ハレ、正月八日ヨリ十日マデ七日ノ修法アリ。滿會ノ夜ハ追儼ノ儀アリ。僧侶ハ壇ニ登リテ法供ヲ修シ、祠員ハ庭上ニ列位シ、祭事畢レバ、集會ノ祠員ヨリ初メ群參ノ人、共ニ堂ノ椽板ヲ撃チ鐘ヲ撞キ、邪氣ヲ驅除ストナリ。但、追儼ハ年中ノ疫氣ヲ驅除スル祭ニテ、十二月晦日ノ夜、陰陽寮ヨリ勤レ之ヨシ延喜式・江家次第ナドニ詳ナリ。正月修正會ノ後コレヲ行フ。別ニ僧家ノ傳アル事ナルベシ。大和長谷寺ニモ、正月十六日ノ夜、本宮年中ノ祭事、元三・相撲・大饗、及ビ軍陣祭・新嘗・啓戸等ヲ初メトシテ、凡九十四度。年中祭事九十餘度、建永二年、其ノ他、末社ノ祭祀ニ至リテハ枚擧ニ違アラズ。其ノ中、元三・相撲・大饗、是ヲ三祭當トイフ。八十餘員ノ祠氏ヲ三ニ分チ、一祭ヅツ是ヲ掌リ、番中ノ祠氏、順次ニ一年ヅツ祭事ノ當日アリテ神饌ヲ廣前ニ奉レ備、祭祀奠儀アリ。

大戸社。本宮ノ西二里バカリ、大戸村ニアリ。所祭神力雄命。此ノ神ハ、天照大神磐戶ニ籠ラセ給ヒシ時、御手ヲトチ防護シ、國家ニ有功ノ神ナレド、本宮ノ攝社ニ奉齋コト詳ナラズ。サレド、大戸社ハ、元、郡中ノ一社ニシテ、末社深キ緣由アレバニヤ、春日ノ社ニテモ此ノ神ヲ内院ニ祠ヲ立テ、崇メ祀レリ。大戸社ハ、元、郡中ノ一社ニシテ、末社ニハアラザリシヲ、近キ頃、香取附屬ノ社トナレリト。應保二年、大禰宜職讓狀ニ、「末社大戸宮社主、并社領知行同讓與」ト見エ、又、仁安二年大禰宜直房ガ讓狀ニモ、「末社大戸宮社領壹所事。並件社家進上事」ナド記シタレバ、元ヨリ附屬ノ社ナリト見エタリ。サレド、外ノ末社トハ事カハレリト見エテ、往古ヨリ、神領モ、香取・大戸ト其ノ目ヲ分チ、當今モ、別ニ神主・大禰宜、ソノ外、祠員アリテ、祭事等ハ彼所ニテ執リ行ヒ、香取ノ所務ニ屬スルノミナリ。大戸社ハ、別ニ祠員ヲ備フル事ト見エテ、神主社家ナドイヘルコト上ニ云ヘルガ如ク、又、大戸大禰宜ノ稱モ天文ノ頃ノ古文書ニ見エタリ。今ハ惣祠官三十六人アリト云フ。

側高社。郡中金江津村・三倉村・岩部村・千葉郡千葉村・常陸行方郡小高村。本宮第一ノ攝社ニテ、本宮ノ東北一里ばかり、大倉村ニアリ。祭神ハ神祕ナリ。本宮ノ祠員、大祭事ニ與レバ、初一百箇日コノ社ヲ拜スルコトヲ故實トス。其ノ後モ朔望ノ參拜怠ルコトナシ。起請スル事アレバ、必ズ此ノ神ニ質ス。本宮祠員ノ内ニ、此ノ社領ノ祠氏一人アリテ、社ノ側ニ家シ、毎日ノ祝辭ヲ奉リ、正月十日・二月初酉ノ日ヲ祭日トシ、十一月七日ニハ本宮ノ祠員不レ殘參向シテ祭事アリ。

高房社。應保二年ノ記ニ本宮南十町ばかり、山田村ニアリ。建葉槌命ヲ祭ル。經武ニ神葦原ノ中ツ國平定ノ時、佐命有功ノ神ナル故ニ、攝社ニ祀レリ。鹿島ノ攝社ニモ亦高房社アリ。

又見社。本宮ノ西十町ばかり、又見村ニアリ。祭ル所三座、天苗加命^{武甕槌}命ノ子・武沼井命^{天兒}命ノ子・天押雲命^{天兒}命ノ子。或ハ、天稚彦・下照姫ヲ配祭シテ五座ナリトモイヘド、思フニ、三神ノ御子鎮座ノ故ニ、天ノ若御子ノ社トイヘルヲ訛リテ天稚彦ト云ヘルナルベシ。

萱田社。本宮ノ西南一里ばかり、返田村ニアリ。又、惡王子社トモ云フ。所レ祭軻遇突智神ナリト云フ。末社コホ多ケレド、今ハ其ノ顯レタルモノノミヲ擧ゲ。

姓氏錄^{未定雜姓}河内國矢作ノ連。布都努志命之後者不レ見。香取郡・猿島郡、共ニ矢作村アリ。因アルコトナルベシ。栗田寛曰、「東大寺正倉院文書ニ、石山院奉寫大般若所解申請ニ仕丁等日養物ノ事。合仕丁肆人、廝、並自正月迄五月、并五箇月料、久須波良廣島。下總國相馬郡邑株郷、同郡大井郷、矢作戸主久須波良音戸口。矢作眞足廣萬呂戸口直丁。云々トアル矢作氏モ、大神ノ御裔ナル氏人ニハアラジ歟。我が郷近キ勝倉村ノ鎮守ハ、香取明神ニシテ、村ニ矢萩氏アリ。其ノ氏人ノ先祖、下總ヨリ

氏神ヲ負ヒ來リテ、此ニ祭レル社也ト云ヒ傳ヘタリ。是モ由縁アルコトナルベシ。又、甲斐國都留郡ニ矢作部連姓アルコト、三代實錄二十一卷ニ見エタリ云々ト。

(一)ニ「香取氏神系」あるが、叢書第九卷の「香取系圖其二」と同じもの故、省略した。なほ、以上までが「下總國舊事考」卷一で、以下は同卷二である)

寒川神社小

千葉郡三山村ニアル三山明神ナルベシ。三山ハ和名抄ノ山家郷ノ内ト見ユ。社領拾石。天正十九年辛卯十一月、社ノ傳ヘ

ハ素盞鳴尊・奇稻田姫命ヲ祭レリト云フ。毎年八月十三日、湯立ノ神樂アリ。此ノ日、祭日ヲトヒ定メ、九月ノ内ノ良日ヲ撰ミ神事ヲ行ヒ、丑未ノ年ノ七箇年目ニハ取分ケテ大祭事アリト云フ。祠官三山氏。外ニ社家二十別當

ヲ神宮寺ト云フ。新義眞言宗、吉橋村常福寺ニ屬ス。氏子ハ千葉郡ノ内二十一ヶ村ナリ。

神名帳考證土代^{伴信}友著云、「寒川神社ハ、千葉郡寒川新田ト云フ所ニ古社アリ。今ハ神明ト稱スレドモ、式内寒川

神社ナリ。村人ノ中ニテ、鑑取ト云フ役ヲ撰ビ定メテ神事ニ預ラシム。神體ハ所レ謂御幣ニテ、祭日ニ新ニ調ヘ、舊物ハ海ノ沖ヘ持チ出デ流ストナリ。寒川ノ本邑ニモ神明ノ社アレド、ソハ新田ナルヲ、後ニ勸請シテ祭レルナリトゾト。土人云、「寒川村ハ、天正以前マデハ結城ト稱セシ地ニテ、此ノ地方ノ野ヲ今モ結城野ト

稱シ、結城山萬藏寺ト云フ寺モアリ。新田ハ、今、向寒川ト云フ所ナリ。此ノ地ニ結城明神ト稱スル社アリト。千葉妙見祭ニ、造り舟ヲ出セリ。千葉ヨリ出スチ千葉舟ト稱シ、寒川ヨリ出スチ結城舟ト呼ベリ。結城明神ヲ合祭ノ神事ニヤ。

信友ノ寒川神社トイヘルハ此ノ事ナルベシ。香取私記・佐倉風土記等ニモ、「寒川神社ハ寒川村ニアリト云ヘ

トハ定ムベカラズ。郷村ハ種々ニ分合セシコトナレバ、一概ニ論ジ難シ。既ニ本州子松神社ハ、小松村ニ在ラズシテ神崎村ニアリ。古ハ神崎ハ小松郷ノ地ニテ、神社アル出崎ユエ神崎ト稱セシナリ。寒川神社モ此ノ類ナルベシ。

神名帳ニ、相摸國高座郡寒川神社アリ。儀式帳ニ、「寒川比古命・寒川比女命佐無加波」一宮記ニ、「相摸國一宮ニ寒川神社アリ」東鑑ニ「一宮佐河大明神」トモ見エタリ。或バ云ク、「相摸ノ國府西方ナル神揃山ト云フ所ニ集ヘリ。云々」三山村ニモ神揃山ト云フ字ノ地アリ。和名抄ニ高座郡寒川郷アリ。訓ニ佐無加波。今、三浦郡ノ邊海ヲ三ヶ浦ト稱セルハ、寒川浦ノ義ナルベシ。寒川社ハ相摸ニモアリ。相摸一ノ宮ニテ、宮山ニ祀レリ。宮山ハ十五日村・朝日村・三郎右衛門村。祭神素盞鳴命・大己貴命、祭日ハ九月十九日。元ハ十一月ナリ。是ハ、貞觀十年十一月十九日、進階ノ日ナリトゾ。流鏑馬ノ神事アリ。五月五日、一宮・二宮・三宮・四宮・八幡社・六所神社、本郷村ニ會シテ祭レリ。又、六月十五日ノ神事アリ。神主金子伊豫。社人二十人アリ別當神宮寺、外、社僧四ヶ寺アリトゾ。サテ、宮山モ三山モ同ジ義ニテ三山ハ宮山ノ省ナリ。祭神モ共ニ素盞鳴尊、彼此合セ考フレバ、三山明神ノ寒川神社ナルコト、推シテ知ラル、ナリ。社號ヲ二宮ト稱スルハ、神名帳ノ位次ニテ、香取ヲ一宮トシ、寒川ヲ二宮トセシナルベシ。或ハ云ク、富比ニテ、一ノ宮ナリ。此ノ社ハ、茂侶ニテ二ノ宮ナリト。サレド延喜式ノ位次ハ、茂侶神社ハ先ニアリテ、意富比神社ハ後ナルヲヤ。社傳ニ茂侶神社ナリト云フハ、本州ノ茂侶ノ神社ノ分明ナラザルヨリ附會セシナルベシ。古キ棟札ニ、茂侶ノ神社一字成就所。又、茂侶ノ神社一字成就謹言トアリトハ、二ノ宮明神ノ儀ハ茂侶ノ神社ト申ス。往古ヨリ鎮座云々ト書ケリトゾ。

或人ノ説ニ、此ノ地、元、葛飾郡ナリシヲ、元祿中、千葉郡ニ改マリシナリト。サレド、元祿中マデ葛飾郡ニ

ハ屬シタレド、千葉庄ト稱シテ、元ヨリ千葉郡ノ地ナルヲヤ。昔ヨリ葛飾郡ニハアラズ。ナホ、埴生郡ヲ埴生庄ト稱セシト同ジ類ナルベシ。

蘇我比咩神社

我印本賀ニ作

同郡蘇我野村ニアリ。今、春日明神ト稱ス。社領拾石。天正十九年辛卯十一月社ノ傳ヘハ春日明神

ヲ祀レリト云フ。九月十九日、神事アリ。祠官中村氏。今ハ家絶エタリ。別當ヲ春光院ト云フ。新義眞言宗。千葉寺村千葉寺ニ屬ス。氏子。

社ノサマ、今ハ聊カ形ノミ殘レド、敷地ハイト大キヤカニテ、古キ木立モムラノニ殘リ、尋常ナラヌヤウニ見ユレバ、必ズ式社ナルベシ。サテ、官社ハ多ク郷司ノアル地ナレバ、蘇我野ハ池田郷ノ内ニテ、蘇我比咩神社アルヨリ負セタル名ナルベシ。

伊能穎則云、「宗我川原ヲ出雲ナリトイフ説ハ、出雲ニ素我トイフ所アルヨリ、フト誤レレニテ、吐懷編ニ論ジテ大和ナリト定メラレタルハヨシ。一説ニ下野トアル野ハ總ノ誤ニテ、即チ、コ、ノ蘇我川原ナルベシ。但、蘇我ハ海邊ニテ、川原トハ云ヒガタキヤウナレドモ、海磯ヲ川原トイヘル例、外ニモアリ。續古今集旅、二條院讚岐、千鳥なくそがの河風身にしみて眞菅片敷きあかす夜半かな。續古今集冬、後京極良經公、こよひたれますげかたしきあかすらんそがの川原に千鳥なくなり。コレラノ歌ハ、皆、萬葉集ノ歌ヲ據トシテ京人ノ座上ニテ詠ミタルナレバ、證トハシガタケレド、千鳥ヲ詠ミ合セタルハ、廣キ川原ナラデハカナハズ。大和ニテモ佐保川・吉野川ナドハ大河ナレバ、千鳥ヲ詠メル歌多クレド、立田川・初瀬川、ソノ外ノ川ニ千鳥ヲ詠メルハナシ。コレニ據リテ按フニ、蘇我川原ヲ下總ナリト言ヒ傳ヘタルモ古キコトニテ、後ニ下野ト誤リ、又、出雲

ノ素我ハスガト讀ムベキヲソガト讀ミテ、出雲ナリト云フ説モ出テ來シニヤアラント。

老尾神社小 匠瑳郡生尾村ニアリ。老ハオイ、生ハオヒニテ、假字ノ異アリ。サレド、土人老ト云フ字ヲ嫌ヒテ生ト書ケルニヤ。匠瑳郡ハ此ノ地ナルベシ。米倉西光寺文書ニ匠瑳郷トアリ。且、八日市場ノ口碑ニ、老尾ヲ匠瑳臺トモ云フ。椿村モ匠瑳郷ノ内ニテ、湖水ヲ椿海ト號シ、椿ト云。今、匠瑳明神ト稱ス。社ノ傳ヘハ、フ名モ顯レタレバ、必ズ舊郷ノ地ト思ハル。且、椿村ノ元地ハ生尾ノ内ナリトゾ。國常立尊・經津主神ノ御子朝彥命又、苗加命合殿ナリト云フ。八月中ノ酉ノ日・九月中ノ酉ノ日ノ神事アリ。神官香取氏。今ハ匠瑳ヲ稱スレド、八日市場村福善寺ノ寶永中鑄ル處ノ鐘ノ識ニ別當ハ見德寺村ニアリ。光福寺ニアリト兩寺アリ。香取和泉守トアリテ香取古記ト符合スレバ、香取氏ヲ正シトスベシ。別當ハ見德寺村ニアリ。光福寺ニアリト兩寺アリ。見德寺ナレバ、其ノ因ミニテ別當ヲ勤ムルナルベシ。本地ノ藥師堂モ、今ハ廢シテ光明院ニテ其ノ像ヲ守護セリトゾ。生尾村ノ光福寺ト兩寺別當ヲ勤ムルナルベシ。氏子、匠瑳郡村々ナリ。

今ハ社領モナク、舊記等モ絶エテ、定カニハ知レザレド、既ニ郡名ヲ以テ神名トシ、殊ニ、一郡ハ皆コノ社ノ氏子ナル由ナレバ、老尾神社ナルコト疑ナシ。今ハオヒヲト云ヘド、延喜式考異ニ云ク、「諸本於以乎。按、訓當ニ於布乎。兵部式驛名有ニ於賦。國帳有ニ於乎明神。」ト見ユレバ、オフト訓ズルヲ正シトス。元ハ老ノ一字ヲ當テタルヲ、總テノ地名ニ二字ト云フ定メノ立チケル折、老尾トハ書キ改メシナルベシ。

香取私記ニ、香取雜事記ヲ引キテ云ク、「香取連五百島ハ、經津主神ノ神裔ニテ、父ヲバ八百島、祖ヲ三島、曾祖ヲ足島、高祖ヲ伊久島ト云フ。五百島、職ヲ辭シテ匠瑳ニ老焉」ト。五百島ハ、「神龜元年二月壬子天皇外從七位上香取連五百島、獻私穀陸奥國鎮守、授外從五位下。」ト續紀ニ見ユ。又、香取神宮ノ末社ニ匠瑳殿アリ。所祭警筒男神・警筒女神。古老傳云、「香取連五百島住匠瑳郡。此社修造係匠瑳郡役。故名匠瑳殿。」ト。文永造營日記ニ、「佐渡殿一字、一間葦葺、匠瑳北條役」ト記セルハ是ナルベシ。元亨三年大官司實記ニモ

續紀の五
百島と物
部小事の
は叢書第
十卷六國
史抄參照

亦佐渡殿ニ作ル。永享五年ノ記ニ、「正神殿西匠瑳殿」ト見ユ。續紀ニ、「承和二年三月辛酉、下總國人陸奥鎮守外從五位下勳六等物部匠瑳連熊猪、改連賜宿禰。」ト云フ條ニ、「昔、物部小事大連、錫節天朝、出征三坂東、凱歌歸報。藉此功勳、令得於下總國、始建匠瑳郡。仍以爲氏。是則、熊猪等祖也」トアレバ、此ノ社ハ物部小事大連ヲ祀レルニハアラザルカ。小事大連ハ此ノ地ニ有功ノ人ナレバ、一郡ノ祖神ト崇メラレシナラン。サレド、社ノ傳ヘト異レバ、後ノ考ヲ待ツ。

麻賀多神社小

印播郡公津臺方村ニアリ。兩所ニ祭レリ。一ハ稷山ニアリ。元ハ粟山ナルベシ。地名ニ稷ナド云フニ改メシナルベシ。公津ハ神津ナリ。承應三年ヨリ、臺方・下方・飯辨須・大袋・飯仲ト五ヶ村ニ分レ、後、公津新田ト云フ村出來テ、今ハ六ヶ村トナレリ。公津ハ神津ト云フ義ニシテ、元ハ印播郡ノ神津ナルベシ。サキニ、印播ハ稻葉ナランカト思ヒシガ、サニテハナク、全ク公津ノ地ナルベシ。郷司ノア麻賀多明神ト稱シ、一ハ船方村手黒ト云フ地ニアリ。瀧津宮ト云フ。手黒マタ手座。社ノ傳ヘハ、應神天皇ノ御世、印波國造伊都許利命ノ時、稚産靈神ヲ稷山ニ祭り、稚日女尊ヲ瀧津社ニ祀レリトゾ。一説ニハ、伊弉諾尊・伊弉册尊・天照大神・稚産靈神、合殿ナリトイフ。稷山ノ社ニ攝社五座アリ。印波國造ノ社・幸靈ノ社・馬來田郎女社・猿田ノ社・天日津久ノ社也。瀧津社ニ攝社三座アリ。賀志波比賣社・阿須波社・八代稻荷社ノ社ハ、オキツキナルベシ。是ハ伊都許利命ノ柳アレバ、ソレヲ云フナラン。此ノ社ハ大カタ伊都許利命ヲ祭レルナルベシ。社傳ハ信ケガタキコト多シ。八代稻荷ナド云フモ、八代郷司ノ先祖ヲ合セ祭レルナルベシ。二月七日・八月十六日ノ神事アリ。祠官ヲ太田出雲トイフ。昔ハ祭田七區アリテ、七家ノ祠官ニテ分領セリ。七區トハ油免・薦布免・穗掛免・團子免・神酒免・御齋免・巫免ナリ。此ノ地、天慶中、將門ノ一亂ニ收公セラレ、承應三年、氏子村。神名帳考證土代云、「麻賀多神社ハ、姓氏錄ニ、豊城入彦命六世ノ孫下毛野君奈良弟眞若君アリ。麻賀多者、眞

若田ナルカ。云々ト。

舊事紀ノ國造本紀ニ、「印波國造、輕島豐明朝御代、神八井耳命八世孫伊都許利命、定賜國造。」龍角寺村ニ石塚三ノト見ユ。此ノ村ニ井戸八アリト云フナドナ考ヘ合スレバ、往古、國造ノ居地ニヤ。

姓氏錄左京神「眞神田曾禰連、神鏡速日命六世孫、伊香我色乎命男、氣津別命之後也」大和國「眞神田首、伊香我色乎命後也」此モ麻賀多ノ事ニ由アリタナリ。

栗田寛云、「舊事紀ノ天孫本紀ニ、伊香我色雄命四世ノ孫ニ物部印葉連公ト云フアリテ眞神田氏ト同祖ナレバ、麻賀多神ノ印播郡ニ坐スニ由縁アル歟。匝瑳連ノ祖ナル小事ノ連モ伊香我色雄五世ノ孫ニテ、匝瑳郡ヲ建テシハ、下總ハ、元、物部氏ニ由縁アル國ナレバナルベシト。

船方村ニ藥師寺ト云フ寺アリ。此ノ寺、元ハ麻賀多神社ノ別當ニテ、「回國雜記」ノ稻穂ノ別當モ是ナルベシ。

今モ船方・北須賀ニケ村ノ祈願寺ニテ、二百年前ノ船方文書ニモ、別當トアリトゾ。此ノ地方ハ「和名類聚抄」ニ載セタル八代郷ト見ユ。神アル所ユエ神津ト名ヅケシモノナラン。藥師寺ニ古鐘アリ。敬白下總州印東庄八代郷船願主僧良圓敬白。大工沙彌善性ト識セリ。或ハ云ク、常陸河内ノ八代村モ、古クハ屋方藥師寺云々。應長元年(大歲辛多)十一月日、ト書ケリ。古ヘノ稻敷郷ニテ、風土記ニ飯名神アルヨリノ名ナリトゾ。コ、モ、然ルカ。

高椅神社 今、下野國都賀郡高椅村ニアリ。高椅ハ結城郷内ニテ、結城ハ高椅明神ト稱ス。社領三拾石。慶安元年十七日、結城郡高椅郷内トアリ。社傳ハ、國常立尊・天鏡命・天萬命ヲ合セ祀ルト。九月九日ノ祭事アリ。祠官ヲ持田美濃・同市正ト云フ。鳥居ノ正面ニ御生沼ト云フ地アリ。早年ニ雨ヲ祈ルニ、必ズ應アリト。長元ノ昔、亢陽ニテ此ノ地干渴トナリ、イト大ナル鯉魚ヲ得タリシヲ、京師ニ獻セシニ、奇異ノ事アリケレバ、コレヨリ土人鯉魚ヲ食スルコトヲ禁セリト云フ。別當ナシ。氏子村高椅上中下三ヶ村、高三千石許モアリ。

神代紀ニ、「國常立尊生天鏡尊。天鏡尊生天萬尊。天萬尊生沫蕩尊。沫蕩尊生伊弉諾尊。」ト見エタレド、カ、ル神等ヲ祀レル例ハ曾テ有ルコト無シト云フ。又、「荒樫神社」ノ下ニ、神名帳ニ、國之常立神ヲ祀レル社ハアルコトナシ。凡テ此ノ神ヲ祀リ給フコトハ古書ニ見エズト、本居宣長モ云ハレタリ。

古事記傳二十、「橋階」などに皆椅の字を書けり。萬葉集七に倉椅、神名式阿波國に天椅立神社、和名抄武藏郷名に良椅與之波之など、此の外もなほ多かり云々玉勝間ノ椅字ノ釋ニモ、「凡て古へは漢國の字義によらずして世にあまねく用ひ習へる例多し。倉に掠字、隈に前字を書きたぐひ也」式考異ニ、「椅字、林家本・卜部家本椅に作り、貞享本椅に作り、京刻二本椅に作り、前三本よりと訓ずれど、椅に作るかたは是にて、訓はしなるべし。云々」

姓氏錄左京皇別上ニ、「高橋朝臣、阿倍朝臣同祖。大稻與命之後也。景行天皇巡狩東國一日、供獻大蛤。于時天皇喜其奇美、賜姓膳臣。天淳中原瀛真人天皇諡天武十二年、改膳臣、賜高橋朝臣。」ト見エタリ。高橋朝臣ノコト、日本紀景行天皇ノ條ニモ見ユ。

黒川眞頼云、「高橋氏文ニ、六雁命ノ御魂ヲ大膳職ニイハヒ奉リテ、永世ノ神財ト仕ヘ奉ラシメムト。コレヲヲ思ヘバ、此ノ高橋ノ神社モ、若シクハ六雁命ノ御魂ニハアラジカレト。ナホヨク考フベシ。山城國愛宕郡・大和國添上郡ニ高橋神社アリ。伊豆國田方郡ニ高椅神社アリ。結城西宮町光福寺城中ニモ高椅神社ト云フアレド、元、日高明神トイヘル神ニテ、別神ナリ。

高橋村ハ、元、結城郡ニ屬セシガ、小山朝政ガ領セシ時ニ小山庄ト唱ヘ、下野國都賀郡ニ屬シタリ。小山家退

轉ノ後ハ結城家領トナリ、結城郡ニ復セリ。元祿中、高橋・福良・築・中島・中河原、今ノ如クナリシトイフ。高橋ハ結城郡ノ郷ナルコト、和名抄ニ載セテ著明ナリ。

健田神社小

結城本郷小崎ト云フ地ニアリ。

舊址ハ東ノ方田圃ノ中ニアリ。五七間四方ノ地ヲ存ス。一片ノ石ヲ建テ、

ト云

フ。九月十六日ノ神事アリ。此ノ日ハ精齋ヲ止メ、鮮ヲ撃チ、父老ヲ會シ、神事ノ燕飲アリト云フ。別當乘國寺。

寺領六十一石餘。禪宗曹洞派。國府臺村總寧寺ニ屬ス。此ノ健田神社ニモ神宮寺ト云フ別當寺アリシ筈ナレド、今ハナシトゾ。却テ住吉神社ニアリト云フ。ナホ能ク尋メベシ。

姓氏錄

左京皇 臣一 竹田臣、朝臣。阿部朝臣同祖。大彥命男武淳川別命之後也。ト。同郡ニ同祖ノ神ヲ祭レルハ因アルコトナルベシ。又、

大和國十市郡ニ竹田神社アリ。

本州式社十一座ノ内、健田神社ホド衰ヘタルハナシ。社領ハ勿論、祠官モナク、敷地サヘ今ハ僅ニ形ノミ存シテ、寺地ヘ小祠ヲ建テ、名ノミ存セリ。鈴屋翁和泉志ノコト思ヒ出テラル。此ノ地方ハ嘉吉以來ノ兵亂ニテ、何事モ廢レ果テタルコトト見ユ。

桑原神社小

岡田郡國生村ニアリ。

國生ハ、元、飯沼郷ノ内ニテ、飯沼ハ、今、香取明神ト稱ス。實曆ノ頃、羽生村ニ

ナリト云ヒ觸レシ者アリ。其ノ祠ハ大輪村一顯寺ノ職掌ノ社ナリケレバ、其ノ旨チ公邊ヘ訴ヘ出テシニ、名指シニテ國生村ニ召シ出サレ、桑原神社ハ國生村ニアル旨仰セラレシニヨリ、立歸リ、鎮守香取社ノ棟札ヲ改メシニ、日本國關東桑原神社、又、寛永二年日本國關東下總國生桑原大明神造立一字依トアリケレバ、イヨク桑原神社ハ國生村ノ香取明神ト御定メニ相成リ、以來、一郡ノ總社ト仰グベキ旨、仰セ下サレシトゾ。社ノ傳ヘハ、天熊人ヲ祀ルト。十一月朔日ノ神事アリ。元ハ、十五日。別當ヲ不動院ト云フ。是ハ萬治ノ頃、新ニ建テタルニテ、古キヨリ職掌ノ僧祝ナク、横關氏トイフ農家ニテ祭薦ノ事ヲ勤ム。

或云、桑原神社ハ大生郷ノ天神ノコトナルベシ。此ノ社、桑原神社ニテ、桑原天神ト唱ヘシヨリ、菅公ノ莊園

ニ桑原ト云フ地越前ニ桑原庄アリモアレバ、ソレヨリ誤レルナルベシ。元ノ社地ハ鬼怒川ニ臨ミテアリシヲ、延寶六年ニ今ノ地ヘ引キシト云フ。舊址、今ハ島トナリ猿島郡ニ神田山・幸田ルベシナド云フ村アリ。昔、コノ社ノ神領ナリシニヤ。

姓氏錄

左京皇 臣、桑原臣、上毛野同氏。豊城入彦命五世孫、多奇波世君之後也。又、車持公、上毛野朝臣同祖。

豊城入彦命八世孫、射狹君之後也。雄略天皇御世、供進乘輿。仍賜姓車持公。此ノ社ニ因アルコトナラシ。

國生ハ國廳ノ訛ニテ、古ヘ國廳ノアリシ地ナルベシ。「將門記」ノ亭南モ此ノ地ノ南ノ方ナレバ、シカ稱セシト見ユ。

茂侶神社小

葛飾郡三輪山村

三輪山ハ度毛郷ノ内ニテ、度毛ハ今上本郷ノ名殘ナルベシ。ニアル三輪明神ナルベシ。社領二十五石。天正十九年

社ノ傳ハ詳ナラズ。正月八日糴米八升ノ備餅ヲ社内ニ捧ゲ、村人打寄リ手ニテコマカニワケルヲ例トス。九月八日ノ神事アリ。別當神宮寺ト云フ。眞言宗。桐谷西圓社頭ニ老杉二株アリ。相隔ル三間バカリ。氏子三輪山・大畔二村ナリ。風早庄元祠官アリ。今、廢ス。寺末ナリ。

古事記傳十二、「御諸山は即三輪山のことなり。御諸は御室にて、凡て神の社を云ふ。下卷朝倉宮天皇大御歌に、美母呂能、伊都加斯賀母登云々。萬葉三六丁に、吾屋戸爾、御諸乎立而。さて三輪山を御諸山と云へるは此を始にて、中卷水垣宮段、書紀同御代卷などに見え、萬葉二四丁に、三諸之、神之神須疑。七丁味酒、三室山など詠める、此の山なり。御諸とは右に云へる如く、何處にまれ神社のことなるに、御山にしも其の名を負

へるは、取分けて此の大神を尊び崇むるからなり。今、京にて祭りと云へば賀茂祭、此の御社に鎮座御名を大物主大神と申すなり。白檮原の宮殿に美和之大神名帳に、大和國城上郡大神大物主神社。名神、大、月次、相嘗、云々ト。此ノ説ニ依テ考フルニ、茂侶ハ御諸ノ發語ミノ省ニテ、此ノ三輪明神ノ事ナルベシ。凡テ古來ノ大社ハ神宮寺アリテ別當ヲ勤メ、敷地木立モ何トナク典型ノ存スルモノニテ、別テ朱印アルナド、府内ハ格別、在村ハ由緒アル地ナルコト疑ナシ。元ハモロト云ヒケンナ、モロハミヨ、神名帳ニ、上野國山田郡美和神社、下野國都賀郡大神社、那須郡ニモ三和神社アリ。義公、栗ヶ澤ノ社ヲ問ハセ給ヒシ折、森尙謙ヨリノ書狀ヲ、日暮玄蕃ノ家ニ藏セシガ、其ノ文ニ、

「延喜式神名帳曰、下總國葛飾郡二座、茂侶社・意富比社。右之通りニ御座候間、栗ヶ澤社モ此ノ二社ノ内ニテ御座候。萬々大慶之御事ニ御座候。葛飾郡ノ内ニテ、外ニモモロト申ス何ゾ明神ノ名御座候ハ、御聞出可レ被ニ仰上ニ候由、具ニ御意被レ成候。私方ヨリ貴様へ可ニ申進之由、被ニ仰付ニ候。御報相待申候。以上。」ト。

小金遺事水戸石川清秋著云、「栗ヶ澤村ニ香取大明神ト稱スル祠アリ。寛文四年、義公放鷹ノ時、訪ヒ給ヒ、又、森尙謙ヲシテ尋ネサセ給フニ、延喜式神名帳ニ載セタル茂侶神社ナルベキ事ヲ知り給ヒ、同年五月、公、費用ヲ下サレ、造營仰セ付ケラレタレドモ、顯據ナケレバ、祠號ハ改メ給ハズ。其ノマ、香取ト呼バセ給フ。公ノ微意在焉。ソレヨリ數十年ヲ經テ、神主某トイフモノ茂侶神社ト改メ號ス。惡ムベキコトナリ。云々」ト。一説ニ、葛飾郡ニ侶社ト云ヘルアリ。公ノ御時ニ研究行キ届カザルナルベシト。予、二合半領ヲ尋ヌルニ曾テ茂侶トイフ村ナシ。妄説ナリ。○二合半領ノ茂侶社ト云フハ、長島村ニ茂侶ト稱スル社アリ。此ノ社ノコトナルベシ。長島モ北條分限帳ナドニ見エタル舊地ナルド、茂侶神社ハ疑シキモノナリ。按ズルニ、此ノ社ヲ茂侶ト稱スルハ義公ニ權輿スレドモ、御疑ヒマデナリシヲ、後、神官ノ

臆斷ニテ茂侶ト稱スル事トナリシト見ユ。サレド土人ノ傳ヘニモ、「此ノ社ノ邊ニ神樂場ト字セル地アリ」ナド云フヲ以テ推セバ、イカニモ大社ニテアリシナルベシ。或書ニ、五日市場村ニ茂侶神社アリ。今、淺間ト稱ス。祭神ナラン。○茂侶郷ハ結城郡ナリ。今モ茂侶村アリ。千葉郡ニモ茂侶村アリ。

三代實錄ニ、「貞觀十三年十一月癸未、授下總國從五位下茂侶神從五位上。」文德實錄ニ、仁壽元年正月庚子、詔天下諸神、不論有無位、叙正六位上。ト見ユ。コレニヨレバ、都テ無位ノ神ヲ正六位上トスル例ナレバ、此ノ前ニ從五位下ヲ授ケラレシコトアリシナルベシ。元慶三年九月廿五日壬子、授下總國正五位下茂侶神正五位上。」從五位上ヨリ正五位下ヲ授ケラレタルコトアリシナルベシ。但、コノ前ト載セタリ。本國ニ式内ノ神社ト一座アル内、香取宮ヲ除キテハ、此ノ社ト意富比神社ノミ位階ヲ授ケラレシハ、イカナル故ニカト考フルニ、是ハ葛飾郡ニ國府アリテ國守ノ信モ厚ク、時ニ執奏アリテ賜ヒシ位階ナルベシ。又、式社ノ外ニテモ子松神社ニ授位アリ。子松神ハ、今、香取郡神崎村神崎明神ノコトニテ、神崎ノ地ハ當時攝關ノ莊園ナレバ、其ノツデニテ贈位アリシナラン。東鑑文治二年條ニ、大戸神崎殿下御領ト載セタル、其ノ以前ヨリノ舊莊園ナルベシ。古ヘモ今モ人情ニ變リナク、顯著ノ執奏ナケレバ朝廷ノ信モ薄ク、又、知ル由モナキナラン。古ヘテ尋ネン人、心ツクベキコトナリ。齋部廣成カ憤モ、此等ノ黑河春村云、「茂侶ノ神社ハ早クヨリ有位ノ神ニテ在シケルヲ、帝王編年記ニ、仁壽元年正月官符曰、五畿内七道諸國大小神祇、有位更增ニ一階、無位新叙ニ六位。ト見エタル時、從五位下ニ叙セラレ給ヒ、貞觀十三年ニ從五位上ナリ。又、大倭社註進狀ニ、新國史曰、寛平九年冬十二月壬寅朔甲辰、奉授五畿七道諸神三百四十社各位一階。トアリシ時ニ正五位下、元慶三年ニ正五位上ト次第ニ昇階シ給ヒシナルベシ。其ノ後、又、天曆六年、永保元年、或ハ治承四年、元曆元年、建治元年等ニモ、天下諸神増位ノ事、舊記トモニ見ユレバ、今ニテ

ハ從三位ニヤ在シマスラント。又云ク、「文德實錄・類聚三代格等ニ、嘉祥四年正月、天下諸神増ニ一階ノコト見ユレバ、此ノ時、從三位ニ進ミ給ヘルナラン。又、日本紀略ニ、寛平九年十二月、天下諸神増階ノコト見ユレバ、此ノ時ハ從一位ニ進ミ給ヘルナルベシト。

書紀ニ、「景行天皇五十五年春二月壬辰、以彥狹島王、拜東山道十五國都督。又、五十六年秋八月、詔御諸別王曰、汝父彥狹島王不_レ得_レ任所_ニ而早薨。故、汝專領東國。云々ト。茂侶神社モ御諸別ト因アルコトニヤ。神名帳ニ、「山城國紀伊郡御諸神社ト。和名抄ニ、「上總國畔蒜郡三衆呂_モ美毛_トト。和訓栞ニ、「室浦ハ播磨也。室明神マシマス。上賀茂同體ノ神也」ト云ヘリ。

職原抄_下從三位條ニ、「文武四年、中納言大神高市丸叙_レ之」ト。駒木村ニ高市ト云フ舊家アリ。駒木モ三輪山地方ニテ因アルコトニヤ。日本紀ニ、大神朝臣高市麻呂アリ。天武天皇ノ功臣ナリ。

茂侶神社ハ千葉郡三山明神ナリトモ、葛飾郡意富比神社ノ末祠ニアリトモ、又、栗澤ニモ茂侶ト稱スル社アリ。此ノ三輪山トヲ合セテ四所アリトモイフ。其ノ内ニ、三山ハ必ズ寒川神社ニテ、意富比ノ末社ト、長島トハ、疑シキニ決セリ。栗澤ト三輪山ノ二所ノ内、三輪山ゾ茂侶神社ナルベキ。栗ケ澤ハ義公ノ御尋ネアリシマデハ、森尙謙ノ書狀ニテ知ラル。長島村香取明神ハ、寛政二年ニ茂侶神社ノ額ヲ懸ケト云フ。別當自性院、九月廿九日ノ神事アリ。氏子長島村東西ニ分ツ。東方ニテ吉田家へ願ヒテ茂侶神社ノ額ヲ懸ケタレド、西方ニテハ茂侶ト云フ社號用ヒザル由ナリ。此ノコト種々ノ説アリテ長ケレバ、モラシマ。

意富比神社小

葛飾郡五日市場村ニアリ。五日市場村・九日市場村ヲ船橋ト稱ス。船橋ハ、元、栗原郷ノ内ニテ、栗原郷ハ、今、栗原本郷ソノ餘波ナルベシ。今、神明ト稱ス。

承久元年
は應永六年
の誤か

社領五十石。天正十九年社ノ傳ヘハ、天照大神・豐受大神・八幡大神・春日明神ヲ合殿ニ祀レリト云フ。正月十六日ノ神事・二月卯日ノ五穀祭・四月十七日ノ初負背ノ神事・九月十九日ノ角力神事アリ。此ノ月二十日ハ大祭事ニテ其ノ式甚ダ古雅ナリ。ナホ小祭數多シ。祠官ヲ富氏ト云フ。被官ノ社家四氏アリ。所謂石永祿・文龜・元龜等ノ文書ヲ藏ス。承久元年四月十六日、千葉介平滿胤ノ神領六郷寄附狀ニ、「東限ニ覆宮塚、南限_レ海、西限ニ洗川并沓懸、北限ニ石拔路」トアリ。昔ノサマ見ルベシ。別當覺王寺。今ハ職掌ナシ氏子六郷ナリト云フ。

神鳳抄事日食米所々注文。ニ、「二所大神宮御領、諸國神戶・御厨・御園・神田・名田等、合、下總國相馬御厨。内宮上分布五十段。口入百段。雜用布百段。外宮 夏見御厨。段。一名船橋二百丁。遠山形御厨・葛西猿又御厨。十丁。上分四丈布五十段。御幣紙三百六十帖。千丁。大和田村ニ神明アリ。此ノ社、元ハ萱田町ニテアリ。今、ソノ新御厨 萱田・神保御厨。合五所トアリ。ノ塔ヲ古屋敷ト云フ。猿又神保ニモ必ズ神明ノ社アラン。夏見御厨ハ今ノ有_レ之。夏見村ノ地ナリ。東西二村アリ。古ヘ伊勢ノ神領ニテアリシ所緣ニテ、夏見村大神宮ヲ影祭シ、或ハ云ク、今ノ夏見村ノ地ナリ。今、御代川氏ノ宅地ノ傍 神明ト號セシナラン。社記ニ、其ノ後夏見ヨリ今ノ地ニ移シタリトアリ。所藏文書ニ神明アリ。元地ナリトゾ。神明ト號セシナラン。社記ニ、其ノ後夏見ヨリ今ノ地ニ移シタリトアリ。所藏文書ニモ天照大神ト記シアレバ、意富比神社トモ定メ難ケレド、或書ニ、伊勢ヲ朝日宮トシ、本宮ヲ夕日宮ト稱スト云フ訓アリ。コレニスガリテ附會セシニテ、意チイト。是ハ見行本三代實錄・延喜式等ニイフヒト傍スルハ誤ナリ。意ハオノ音ナリ。イトハ云ハズ。若シ果シテ意富比神社ノ祭神、古ヘヨリ天照大神ナランニハ、式ニ天照意富比神社ト載スル例ナリ。思フニ、神明ヲ夏見ヨリ意富比神社ニ合セ祭リシナルベシ。サレド、御厨ノコトニツキ、社領ハ神明ニツキ居レバ、神明トノミ心得シナラン。

三代實錄ニ、「貞觀五年五月廿六日戊子、授下總國從五位下意富比神正五位下。此ノ前ニ從五位下ヲ授ケラレシ茂侶神社ノ條ニ見ユ。意富比ノ神社ハ此ノ時代既ニ茂侶神社ヨリ顯レタルコト、見エ、位階ヲ授ケラレシモ早ク、又、茂侶ハ正五位上、意富比ハ從四位下マデニ進メリ。十三年四月三日己卯、授下總國正



五位下意富比神正五位上。十六年三月十四日癸酉、授下總意富比神從四位下。ト載セタリ。
 社傳ノ船橋六郷トハ、高根村・米崎村・七熊村・下飯山村・上波佐間村・金曾木村・夏見村等也。當時顯社ノ社
 二郷、小社ハ六郷ト見ユ。本國香取神宮神領十二郷、サレド、應長元年ノ文書ニ據ルニ、西船橋三郷、湊・夏見・金
 神崎社六郷、餘モサレ例ナリヤ。ナホ考フベシ。サレド、應長元年ノ文書ニ據ルニ、西船橋三郷、湊・夏見・金
 曾木。湊ハ今ノ海神村、金。東船橋三郷、宮本・高根・米崎。宮本ハ今ノトアリ。七熊・下波佐間見エズ。此ノ二村
 ハ高根・米崎ノ分郷ナラン。

色川三申曰、「類聚三代格卷十六、道橋事條ニ、應造浮橋、建布施屋、并置渡船事。略下總國太日河四隻
 元二隻今トアル太日モ、大日ノ轉ナラムト。天武紀ニ迹太川、萬葉十三ニ爾。眞間弘法寺文書ニ、及川ト云フ姓見
 加二隻。トアル太日モ、大日ノ轉ナラムト。大造十九ニ爾大要ナドアリ。眞間弘法寺文書ニ、及川ト云フ姓見
 ユ。サテ、太日モ大日モオホヒナルヲ、東鑑ニ太井川トアルハ、島田ノ大井川ト同名ヲ避ケシニヤ。固ヨリ訓
 ノアヤマリナルカ。ヒタイト訛ルハ中古ヨリノコトナルベシ。

駿河國安倍郡ニ上田村アリ。ハタト云フ。ウハタノ略ナリ。此ノ村ニ大井神社アリ。其ノ外、大井川通り、此
 ノ村ヲ初メトシテ、志太郡・益津郡ノ村々、大井神社ヲ祭ラザルハナシ。大井川ノ名モ此ノ社ニヨルニヤ。祭
 神罔象女命・姫大神・埴安姫命ナリト云フ。駿河新風土。益津郡郡村ニ大井神社アリ。祠官大楠若。祭神詳ナラズ。
 社傳ニ罔象女命ヲ祭ルト云フ。此ノ社舊ハ田中城地ニアリテ、大楠神社ト云フ。慶長中、今ノ地ニ移セリトゾ。
 志太郡島田宿・安倍郡井川村ニモアリ。サレド、古風土記ニハ見エズ。神階帳ニ、志太郡大井三島御子天神ト
 アレド、何レノ郷ニアリシヤ詳ナラズ。

山崎知雄云、「文書ノ覆宮塚ハ、即チ、意富比宮塚ノ借字ナルベシト。此ニヨリテモ、意富比神社ハ神明社ノ

外ナルコト知ラル、ナリ。

蛟螭神社

相馬郡立木村ニアリ。文間明神ト稱ス。社領五十石。天正十九年。辛卯十一月。奥ノ宮・角ノ宮ト二社ナリ。社ノ

傳ヘハ、奥ノ宮ハ罔象女、角ノ宮ハ埴山姫ヲ祀ルトイヘリ。相殿、匂句題馳命。軻。六月十五日田植ノ神事、九月十
 五日稻刈ノ神事アリ。稻刈ノ神事ノ時、コノ地ノ舊領主山城守松平侯。ヨリ、焼絹トテ絹若干、ソノ他品々ノ備物、
 今ニ廢スル事ナシト云フ。祠官友野氏・海老原氏。アリト云フ。別當ヲ宮臺山神宮寺ト云フ。又、無量院ト。氏子村
 常陸國ニ亙リテ二十七ヶ村アリト云フ。此ノ社、祭事ニ筑波山羅歌會ニ似タル。コトアリシガ、今ハ絶エタリトゾ。

罔象女・埴山姫ヲ祀ルトイフハ、蛟螭ノ訓、水土ト通フニヨリ附會セシモノナラン。社傳ニ神體ハ蛇形ナリト
 イヘバ、文字ノ如ク蛟螭ノ神ナルベシ。村名ヲ立木ト云フ。(立・龍ト通フナリ)傍ニ立崎ト云フ村モアレバ、因アレ
 訓セ。書紀ニ、「劍頭垂レ血、激越爲レ神。號曰ニ閻羅。音力丁反。次閻山祇、次閻罔象」龍ハ巨神ニテ即チ蛇ナリ。
 常陸河内郡龍ヶ崎邊ニ岡見村アリ。此モ巨神ナル由、常陸志料ニ見ユ。此彼因アルコトナランカ。凡テ稱呼ハ地名ニ殘レルモノ多ケレバ、蛟螭ノ元ノ
 訓ハ龍神トモ云ヒシニヤ。

式外

子松神 香取郡神崎村ニアリ。神崎、元ハ宮和田ト云フ由、社藏文書ニ見ユ。神崎ハ。社領二十石。天正十九年辛卯十一
 村ニテ四十町九反アリ。六ヶ村トハ、惣領・宮和田。社ノ傳ヘハ、面足尊・惶根尊ヲ祀ルトイフ。文書ニ白鳳二年六所鎮守
 小松・上畠・多賀・青山等ナリ。文書ニ見ユ。

下總式社考

皇御即位ノ月ナリ。壬申。三代實錄ニ、「元慶三年四月五日甲子、授下總國正六位上子松神、從五位下。」トアルハ、ノコトニ因ミアルニヤ。此ノ神ノコトナルベシ。正月四日御扇開、四月中午日御舟流、四月六日御田植、五月五日流鎬馬、八月新嘗等ノ神事アリ。神官ヲ神崎氏ト云フ。正元二年文書ニ、大中臣神主トアリ。外、社人一人アリ。別當ヲ神宮寺ト云フ。並木村ニアリ。神領配當ノ外、別社人・社僧數人アリシト見ユ。氏子村四十八ヶ村アリ。元、神崎莊ノ地ナルベシ。神木ノ老樟、人口ニ膾炙セリ。

神名帳ニハ、陸奥國新田郡・土佐國香美郡、共ニ子松神社アリ。遠江國佐野郡小松郷、古萬都。或ハ云ク、今ノ小松村ニモ小祠アレド、篠崎松村明神ト稱シ、後ノモノナリ。ト神崎ト並木トハ、元、一ヶ郷ニテアリシヲ、何時トナク神ノアル地ヲ神崎ト呼ビナレ、後ニ分レテニヶ村トナリシナラント。子ヲ小ト書キ改メシハ後ノコトナラン。

香取私記云、「長寛二年ノ太政官符ニ、大禰宜眞房知行、大戸・神崎・並小野・織服ト見エ、又、應保ノ讓狀ニ、於ニ次男知房者、申ニ補神崎社官司、可レ知行彼社領之由、書ニ讓狀ニ同與畢トモ見エ、享祿三年大禰宜實之讓狀ニ、大戸神崎租石檢田米、限ニ永代ニ讓與。又、至徳二年ノ古文書ニ、香取社之神崎庄内御祭物等トアリ。又、嘉元二年ノ文書ニ、大戸・神崎・村田・櫻田以下神祭物等トアリテ、料米ノ事ナド記セリ。建久四年四月六日辨官符ニ、爲ニ當社造營、被レ停止庄號。大戸神崎兩庄事トアリテ、任ニ先例、被レ停止庄號。被レ付ニ行事。ナド見エタレバ、古ヘ香取造營ノ時、又ハ祭ニ臨ミテ、課役アリシト見エタリト。郡郷小松郷。正元二年。惣領分四ヶ所。三月五日神馬。宮和田分。社人屋敷十ヶ所。小松分。社人屋敷七ヶ所。上畠分。社人屋敷六ヶ所。多賀分。青山分。社人屋敷六ヶ所。以上ハ當時ノ社領ノ内ノ地ト見ユ。總領分ハ今ノ並木村ニヤ。宮和田ハ神崎ナリ。上畠ハ植房村ナリトゾ。

伊能類則云、「大戸神崎ハ、東鑑ニ見エシ如ク殿下御領ニテ、香取大禰宜ソノ地頭タリシニヤ。應保ノ文書ニ、於ニ次男知房、云々。トアルモ、地頭タリシ故ナルベシ。又、建久官符ニヨレバ、殿下ノ莊ハ此ノ時止メラレシニヤト。

西坂村ニ西坂明神ト云フ社アリ。面足尊ヲ祭レルナリト。社傳ニ、神崎ハ惶根尊ナリト。神主神崎氏。別當谷中村自性院。氏子西坂・鴨崎・寺内・和田・谷中田ト以上七ヶ村ヲ時崎郷ト稱ス。ナリ。

惣社明神社

葛飾郡栗原本郷村ニアリ。社ノ傳ヘハ詳ナラズ。別當ヲ神司院萬善寺ト云フ。新義眞言宗。小作村妙應院末ナリ。九月十五日ノ神事アリ。社ノ東方ニ稻荷ノ祠アリ。此ノ祠ノ傍ニ葛ノ井ト云フアリ。土人ハ葛飾ノ惣社ナリト云ヘド、サニテハナカルベシ。下總ノ總社ナルベシ。

或云、惣社ハ、昔、國守ソノ國ノ官社ヲ府中ノ邊ヘ合セ祭ラレテ、拜詣ノ便ニセラレシモノナリ。武藏・常陸・上野・上總等、皆、府中ノ邊ニ惣社アリ。其ノ外モナホアルベシ。今昔物語ニ、「前陸奥守平維叙、陸奥ニ著任ノ初、神拜行ハントテ、國內ノ神社ヲ拜シメグルニ、或所ノ路ノ傍ニ一ノ叢祠アリ。云々。維叙、具シタル國人ヲ招キテ神名ヲ問ヒケレバ、古老ノ應官答ヘケルハ、元ハサルベキ神社ナリシヲ、田村將軍國守タリシ時、云々。維叙コレヲ憂ヘ、頓テ其ノ邦ニ課セテ、舊例ニ準ジ修造セシメ、神名帳ニ加ヘ、悉ク舊ニ復シテ如在ノ禮ヲ致セリトゾト。

東鑑六卷、文治二年五月廿九日條ニ、「神社佛寺興行事。一品日來思食立。且、所レ被レ申ニ京都也。且、於ニ

東海道者、仰ニ守護人等、被レ注ニ其國。總社并國分寺破壊、及、尼寺顛倒事等、云々ト。同書廿六卷、貞應三年二月廿二日條ニ、「當國總社并富士新宮等燒失。云々」ト。同書十二卷、建久三年八月九日條ニ、「總社柳田。云々」ト見エタリ。

河内志ノ志紀郡條ニ、「總社、在ニ國府村。古昔、國府必建社。有事ニ于國內官社、則國司率ニ僚屬、先修ニ典禮於此。其儀猶ニ京師神祇官然」ト。

總社傳記考證ニ、「國府ノ總社ハ、朝廷ノ神祇官ニ擬シタル一國ノ神祇官ナリト云フ」ト。

六所明神社

葛飾郡須和田村ニアリ。此ノ邊ハ小金領。風早庄トイフ。社領十石。天正十九年辛卯十一月。有徳公マテハ印播郡須和田村トアリトゾ。延享十四年八月十二日ヨリ葛飾郡ト

改マ。社ノ傳ヘハ、正殿大己貴命。合殿伊弉册尊・素盞鳴尊・大宮寶尊・布留之御魂・彥火瓊々杵尊。景行天皇四十年五月五日ノ鎮座ナリトイフ。九月十九日・廿日兩日ノ神事アリ。神官ヲ桑原和泉ト云フ。此ノ六所ト云フ

社モ、國府ニ附キタルモノニテ、武藏府中ニモ六所明神ト云フ社アリ。和訓栞ニ、式佐賀郷六所ノ社ハ、豊後國海部郡ニアリ。早吸日女神社ニシテ、神代紀ノ六所ヲ祭ルト云フ。○市川ノ内、根本・國分ノ

東鑑卷一 治承四年十月十六日條ニ、「相摸國府六所宮云々」ト。按ニ、常陸六所ノ社ハ、國府ヨリ三里許リ南ノ方、筑

八幡社

八幡村ニアリ。此ノ方ニ古八幡ト云フ村。社領五十二石。天正十九年辛卯十一月。社ノ傳ヘハ、宇多天皇ノ勅願ニテ、

寬平中、石清水八幡ヲ移シ祀ラレ、建久中ニ至リ、源右府修造ヲ加ヘラル。當社傳ハ元亨中ノ鐘銘ニ據ルベシ。正月十五日ニ筒粥ノ

神事、豫メ本年ノ豊凶ヲトスル。八月十五日ニ放生會ノ神事アリ。此ノ日、神輿ヲ出セリ。ツクマイト云フ戲アリ。長

ナ結ビ合セテ足ヲ掛クル代トシ、祈願アル人、件ノ柱ヘ登リ、社ノ方ヲ拜シ、次ニ四方ヲ拜シ、終リテ下ル。此ノ事ナホ所々ニ

アリ。唐山ノ鞆ノ類ナルベシ。勝鹿名所志ニ、ツクマイハ筑波ヨリ傳ヘタル舞ニテ、筑波ヲツメ、ツクマイト云フト。云々。○八幡マチハ本州香取神宮四月五日ノ祭事ニ次ギタル大神事ナリ。十四日ヨリ十八日。銀杏ノ神木アリ。和合木ト云フ。周

マテ前後五日、男女雜沓集ス。此ノ町、多ク生姜ヲ賣グ。故ニ生姜町トモ云ヘリ。天台宗、寬永 祠官ヲ鈴木主馬ト云フ。本社ノ側ニ下馬札アリ。由

圍三丈許。此ノ木ノウロニ白蛇多ク住メリ。別當ハ法漸寺ト云フ。寺末ナリ。祠官ヲ鈴木主馬ト云フ。本社ノ側ニ下馬札アリ。由

來ヲ詳ニセス。或ハ云ク、此ノ社ノ右ノ方ニ駒止石ト云フアリ。是、昔ノ下馬所ニテ、今ノ下馬札ハ、ソレヨリ

ノ古事ナリト云フ。

下總式社考(終)

寒川神社

〔儀式帳〕寒川比女命○信友云、千葉郡寒川村ノ屬邑寒川新田ト云フ處ニ古社アリテ、今ハ神明ト稱スレドモ、式内寒川神社也。村人ノ中ニテ鑑取ト云ヒテ撰定テ神事ニ預ル。神體ハ所謂御幣ニテ、祭日ニ新ニ調ヘテ舊物ハ海ノ沖ヘ持出デ流ス也。此神靈驗著キコト常ニテ、無禮ヲナスコトアレバ其祟ヲ受テ病ミ出テ死ニ至ルモノ多シ。其祟ヲ受タルモノ、眷屬ノ目ニハ龍トモ云ベキ狀ノモノ其家ヲ遠ル如クホノク見ユルコトアリ。其祟ヲ受タル事ヲ早ク悟リテ患テ祈謝スレバ、病治ルコトアレド、其ヲ悟ルコト遅ク病深クナル時ハ治スルコトナシ。丹羽誠軒、寒川ニ久シク客居シテ見聞セル趣ナリトテ語レリ。誠軒ハ吾藩臣也。其病者初發傷寒ノ如クニテアレド、發表シテ汗ヲ發セズ。又、戰栗アリ。脈ハ狐ツキニ似タリ。客居ノ中、サル病人三人ヲ療シテ、二人ハ歿シ、一人ハ治セリト語レリ。又云、寒川ノ本村ニモ神明宮アレド、ソハ新田ナルヲ後ニ勸請シ祭レルナリトゾ。文政十一五ノ廿記ス。

蘇我比咩神社

我印本作賀○能登國菅忍比咩神社○信友云、〔和鈔〕匝瑳郡須加郷。

老尾神社

〔和鈔〕長尾郷○信友云、老ト長ト字ノ草書似タリ。何レカ誤レルナラン歟○大和國長尾神社、近江國興石神社、今日老曾社。○國人向後盈正云、八日市隣邑老尾村ニアリ。神主四十二代連綿スト。

麻賀多神社

〔姓氏〕豐城入彦命六世孫下毛君奈良弟眞名君。按、麻賀多者眞若田歟○國人云、佐倉ニアリ。非ナリ。〔伴信友の「神名帳考證」卷二十東海道第十四より〕

上總國神社志料

〔解説〕本書は、邯岡良弼が上總の玉前・橘・鳥穴・姉崎・飯富（以上式社）高瀧・前廣・神代・常世・建市・田原（以上式外宮社）坂戸・菊間・八坂・八幡・磯谷八幡・木更津八幡・笠森八幡・縣・白鳥・吾妻・鐵尊の各神社につき、「延喜式」・「古事記」・「日本書紀」を初め「房總志料」以下房總關係の文獻を以て考證せるものである。良弼の傳は第七卷の卷頭言に詳しい。（稻葉）

いや高き神の秀倉に梯たて、古しのぶ足代にはせむ 男道なかれ朝

○玉前神社

今、長柄郡一宮町に在し、國幣中社たり。▲延喜式帳神名上總國埴生郡玉前神社大神▲同臨時玉前神社上總（幣物は安房神社と同じ。）▲三代實錄十貞觀十年七月廿七日戊午、授上總國從五位上勳五等玉埼神從四位下。○按に、本書に誤る。今、類聚國史三十元慶元年五月十七日丁巳、授上總國從四位上勳五等玉埼神正四位下。○按に、從四位上に誤る。また正四位下、本書正四位上に作る。▲同四十元慶八年七月十五日癸酉、授上總國正四位下勳五等玉埼神社正四位上。▲大日本一宮記。玉前神社高皇產靈弟生高皇產靈弟生。上總埴生郡。▲神名帳頭註。上總埴生郡玉前神社、高皇產靈孫前玉命也云、不審也。今按、高皇產靈弟生產靈子也。號前玉命、掃部連等祖也。▲神社叢錄廿四埴生郡玉前神社大神玉前は多麻佐岐と訓むべし。祭神前玉命神名帳一宮本郷村に在す。今、長柄郡に屬す。地名當國一宮也。記。▲舊事紀本紀神代振魂尊兒前玉命、掃部連等祖也。▲國華萬葉記十上總國玉前大明神、埴生郡に在す。當國一宮。祭神高

上總國神社志料

三代實錄の第十卷以下にあり

叢書第七卷の房總志料參照
叢書第十卷の吾妻鏡抄參照

皇產靈尊の弟生産靈尊の一男に振魂命とあり。前玉命也。一宮貞觀九年七月廿七日、從五位上勳五等玉埼神社從四位下。國史○按に、九同。上之宮、上總國瀧山に立つ。社領十五石。神雅樂。○按に、上之宮は一之宮の訛。瀧山は分限帳の流山を誤寫せるなり。雅樂は即ち田中氏なり。▲古今著聞集。延久二年八月三日、上總國一宮の御託宣に、「懷妊の後、既に三年に及ぶ。今、明王の國を治むる時に臨みて若宮を誕生す」と、仰せられけり。これによりて海濱を見れば明珠一顆ありけり。御正體に違ふ事なかりけり。房總志料にも此の事を引きたり。▲房總志料三。延喜式神明帳を考ふるに、上總國埴生郡玉前神社と有り。然れども、今は長柄郡の地となる。思ふに、古は一宮川を隔て、北の方宮原一松邊より長柄郡の地と見えたり。▲東鑑三。壽永三年正月八日戊戌、上總國一宮神主等申云、故介廣常存日之時、有宿願奉納甲一領於當宮寶殿。云云。武衛被仰下曰、定有子細事歟。被下御使、可召覽之。云云。仍今日被遣藤判官代並一品房等、進御甲二領。彼奉納甲者、已爲神寶、無左右難給出之故、以兩物取替一領之條、神慮不可有其崇歟之旨、被仰。云云。十七日丁未、藤判官代邦通、一品房並神主兼重等、相具廣常之甲、自上總國一宮歸參鎌倉。即召御前、覽被甲。皮威結付一封狀於高紐。武衛自令披之給。其趣所奉祈武衛御運之願書也。不存謀曲之條、已以露顯之間、被加誅罰事、雖及御後悔、於今無益。須被廻沒後之追福、兼又廣常之弟天羽莊司直胤。相馬九郎常清等者、依緣坐爲囚人也。優亡者之忠、可被厚免之由、被定仰。云云。

願書云、

敬白、上總國一宮寶前、

立申所願事。

- 一、三箇年中、可寄進神田二十町事。
 - 一、三箇年中、可致如式造營事。
 - 一、三箇年中、可射萬度流鏑馬事。
- 右志者、爲前兵衛佐殿下心中祈願成就、東國泰平也。如レ此願望、令一々圓滿者、彌可奉崇神威光者也。仍立願如レ右。

治承六年七月 日 上總權介平朝臣廣常

(○此の事、また扶桑見聞集にも出づ。今、略して引かず。)

▲同二 同六年八月十一日己酉、御臺所有御産氣。武衛渡御。云爲御祈禱被立奉幣御使於近國宮社。上總一宮小權介良常。○俱に十社なり。全文は安房國洲崎の條に引きた。▲同廿七 寬喜元年十一月十日、依去四日雷電、爲世上御祈、近國一宮被立奉幣御使。相模國駿河守。略上總國足利五郎長氏等也。各被進神馬御劍等。又於社壇可轉讀大般若經之由、被仰別當等。▲寺社分限帳 高拾五石 流山邊郡一宮領。▲御朱印寺領帳 總高拾五石 山邊郡流山田中遠江。○按に、幕府の御朱印文には郡村名の違へるもの其の例少からず。以上二書に山邊郡流山郷とあるは、▲南總郡郷考 下 高拾五石、長柄郡一宮玉埼神社。▲大日本史 神祇 上總埴生郡玉前神社。○前或作玉埼。今在長柄郡一宮本郷村、已貴命。是蓋以玉前爲前玉、遂傳會幸魂。不可信也。神名帳頭註、一宮記、爲高皇産靈命孫玉前命。然、玉前命古書無所見。或云、祀海神玉依姬。亦無確據。古今著聞集載延久二年、本國一宮ノ神憑人云、懷孕三年産明珠云々。似是女神。然、其事怪。貞觀十年、自從五位上勳五等、進從四位下。元慶元年、自從四位上、加正四位下。○下、原作異不足信也。下文訂 光孝帝踐祚、進正四位上。三代 實錄 延喜制列名神大社。延喜 後、稱爲本國一宮。一宮 壽永初、上總權介平廣

日本地理志料は叢書第七卷下安房上總參照

常、奉_二甲一領_一、爲_二源賴朝_一祈請。且、誓_レ獻_二神田二十町_一、及、萬度流_二鎬馬_一。▲房總志料_四 壽永三年、上總國一宮神主、廣常が納むる所の鎬、并に一封の書を鎌倉に獻す。公是を披くに、鎌倉の武運を祈る所の文書なり。廣常反謀なき旨、公頗る失誤を悔ゆと。按に、公創業の始より廣常を知る。然れども舊族を鋤くに意あり。獨廣常のみに非ず。常の佐竹、奥の秀衡等見つべし。▲同。一宮玉埼神社へ、里見氏より把祭料として、水田幾町寄附すと云ふ書、今に傳ふと。按に、萬葉集に、筑波山_カ燿歌會といふこと見ゆ。其の歌猥褻、思ふに、上世宣淫の餘風、小原のさこねなどといふ俗に等し。かゝる俗の頃までは本州などにも存せりと見ゆ。▲日本地理志料_{十八} 一宮驛、有_二玉前神社_一。祀_二玉依姬命_一。貞觀・仁和際、自_二從五位上_一、進_二正四位上_一。後稱_二本州一宮_一。今班_二國幣中社_一。按_二東鑑_一、壽永初、上總權介平廣常奉_二甲一領_一、爲_二源賴朝_一祈請、且誓_レ獻_二神田二十町_一、及、萬度流_二鎬馬_一、兼修_二神殿_一、以報賽_上焉。後、賴朝以_二猜忌_一殺_二廣常_一。使_二人探_二本社_一、得_二其禱辭_一、大悔恨云。抑、廣常以_二大兵_一、首助_二賴朝_一於_二敗馭之餘_一、功大過小。而不_レ免_レ禍。賴朝之寡恩亦甚矣。宜其再世而亡也。▲上總町村誌_七 長柄郡一宮本郷村、往古埴生郡ニ屬ス。氏神玉前神社、字宮ノ臺ニ在リ。祭神玉依比賣命。境内末社、愛宕・八幡・三島・白山・日吉・山神・淺間・飯綱・道祖・神藏王・安房洲・熊野ノ十二神ヲ祀ル。創建年月詳ナラズ。貞觀叙位の事、東鑑廣常のに本文を引きたれば、今省きつ。社傳云、天正十年六月、里見義頼書ヲ寄セテ宮地ヲ附ス。十九年十一月、徳川家康更ニ神田十五石ヲ寄附ス。維新ノ初收メラル。又云、里見氏一宮城ヲ攻メシ時、社家三百人許、城ニ籠ル。社宇因テ燒カル。神寶古文書等灰燼ス。故ニ書類ノ徵スベキ物ナシト。天保年中、一宮藩主加納久徵、廣常寄附ノ甲冑存在セザルヲ歎息シ、代フルニ楠正成・武田左典厩、及ビ古英雄ノ用ヒシ物ヲ集メテ、甲冑一領ヲ製シ、寄進セリ。今ナホ

神庫ニ藏セリ。モト觀明寺別當タリ。維新ノ後、廢ス。明治四年六月、國幣中社ニ列セラル。四月九日ヲ祭日トス。近隣十二村ノ鎮守タリ。

○橋神社

延喜式の叢書第十卷抄參照

長柄郡_二一宮莊本納村_一に在し、今、縣社たり。▲延喜式_{神名} 長柄郡橋神社_小 ▲三代實錄_{三十} 元慶元年五月十七日丁巳、授_二上總國從五位上勳五等橋樹神正五位下_一。▲同_{四十} 同八年七月十五日癸酉、授_二上總國正五位下勳五等橋神正五位上_一。按に、本書橋を福に誤る。今一本に従ふ。▲神社叢錄_{廿四} 橋神社、橋は太知波奈と訓むべし。和名抄部_{葉藏} 橋太知日本武尊・忍山宿禰。一宮莊本納村に在す。地名記_{〇玉璣}に、當社は橋比賣命の御櫛を納めし處と、櫛に語り傳ふと云へり。▲房總志料_三 長柄郡帆丘橋神社は、延喜式に載する所、上總五社の其の一にて、倭武尊の愛妾橋姫を祭れるなり。此の地、古より鷹を臂にする者至らず。若し誤りて其の地を過ぐる時は、故なくして鷹死す。神の鷹を忌みたまふとて、飼鷹師甚だ恐るゝ事也と。▲古事記_{倭武命東征段} 自_二其入幸_一、渡_二走水海_一之時、其渡神興_レ波廻_レ船、不_レ得_二進渡_一。爾、其后名弟橋比賣命白之、妾易_二御子_一而入_二海中_一。御子者所遣之政遂、應_二覆奏_一。將_レ入_二海時_一、以_二菅疊八重・皮疊八重・純疊八重_一、敷_二于波上_一而、下_二坐其上_一。於是、其暴浪自伏、御船得_レ進。爾、其后歌曰、佐泥佐斯、佐賀牟能哀怒邇、毛由流肥能、本那迦邇多知豆、斗比斯岐美波母。故、七日之後、其后御櫛依_二于海邊_一。乃取_二其櫛_一、作_二御陵_一而治置也。古事記傳_{〇走相模國御浦郡の海邊に走水と云ふ邑ありて、上總國に向へる地なり。} 日本武尊、亦進_二相模_一、欲_レ往_二上總_一。式に上總國長柄郡橋神社あり。若くは此の比賣命を祭るには非るか。▲日本書紀_景 日本武尊、亦進_二相模_一、欲_レ往_二上總_一。望_レ海高言曰、是小海耳。可_レ立_二跳渡_一。乃至_二于海中_一。暴風忽起、王船漂蕩而不_レ可_レ渡。時有_二從_レ王之妾_一。曰_二弟橋

叢書第十卷抄參照

叢書第十卷抄參照

媛。穗積氏忍山宿禰之女也。啓王曰、今風波泌、王船欲沒。是、必海神之心也。願以妾之身、贖王之命、而入海。言訖乃披瀾入之。暴風即止、船得着岸。故時人號其海、曰馳水也。▲南總郡郷考 下 御朱印高六石 長柄納橋神社。▲日本總國風土記 九十 上總國長柄郡栢原郷 略 橋神社、圭田三十五束七畝田、所祭住吉大神也。舒明天

皇四年壬辰九月、始奉圭田、加神禮、有神家巫戸。○按に、本書は偽書なる由、先輩の定論あり。姑くこゝに附す。轉呼なるべし。鈴鹿連胤日、風土記に住吉神を祭るの説は、橋小戸に顯。栢原郷は和名抄に載す。今、本納村に鄰りて、萱場村あり。其のれま由緒に依れるか。されば取捨し難き所ありと。猶よく考ふべし。▲大日本史 神祇 長柄郡橋神社、又曰橋樹神。三代實錄○今在二宮莊本 祀弟橋媛命、合祀日本武尊、及、忍山宿禰。日本武尊東征、渡相模海、遇風濤之難。納村、稱橋明神。祀弟橋媛命、合祀日本武尊、及、忍山宿禰。日本武尊東征、渡相模海、遇風濤之難。

妃弟橋媛曰、是必海神之意。妾請以身贖王之命。遂自投海。風乃止。日本書紀後得其遺骸、噲之築墓。即、本社所在也。記 橋社 元慶元年、自從五位上勳五等、進正五位下。光孝帝立、加正五位上。三代實錄○本書作福神、延喜制列小社。式 延喜 神祇志料三橋神社。○按に、三代實錄元慶元年、橋を橋樹に作る。共に異なる事なし。八年に福神とあ

今、二宮庄本納村帆丘にあり。吾妻大明神と云ふ。○南留別志、巡拜舊祠記、蓋、日本武尊の後弟橋比賣命を祭る。日本書紀、古事記、初、日本武尊東國に幸して、相武國走水海を渡坐時、渡神浪を興して御船漂蕩て、得進み渡り坐さず。爾、其後白し給はく、妾御子に易て海に入なむ。御子は所遣の政遂げて復命奏し給ふべしと曰て、海に下坐時に、其暴浪自伏て、御船得進みき。故、七日ありて後に、其後の御櫛海邊に依しを取て、御陵を造て治置

き。古事記 今社地即是也。○按に、神社の地、土人傳云ふ、橋媛の櫛を。陽成天皇元慶元年五月丁巳、從五位上勳五等橋樹神に正五位下を授け、八年七月癸酉正五位上を賜ふ。三代實錄 凡正月十七日・三月七日・七月十三日祭を行ふ。葉縣神社。▲房總游乘。本納驛謁橋神社。延喜式○三代實 祀弟橋媛命。本社傳記、神 金瑠銅瓦、煥然可觀。日本武尊調書。

叢書第八 卷上總國 乘房總游

叢書第七 卷上總國 誌參照

東征、渡相模海、遇風濤之難。媛啓曰、是必海神所祟。請以身贖之。遂自投海。風乃止。日本書紀後得遺骸、噲之築墓。古事記 即本社所在。社傳、房 法目村隣此。徂徠氏曰、本納、帆丘也。法目、帆埋也。取之武尊故事。南留別志 徂翁生長于此。其言或然。國誌 ▲南留別志。上總國に本納と云ふ所あり。其の側に法目と云ふ村あり。本納に橋の祠あり。橋媛を祭れる也。森の形、船に似たり。中に高き木ありて橋にかたどる。今は折れ失せたりと聞く。橋媛の乘りたまへる船、この浦に寄せたりと、故老の言ひ傳ふるなり。本納は帆丘なるべし。法目は帆埋なるべし。▲上總國誌 長柄郡本納驛、古之帆丘也。鎮座橋神社、小 爲本國五社之一。其叙位事、載在三代實錄。祭神弟橋媛命。乃日本武尊妃也。尊平鹿野山賊、東抵長柄郡。收媛之遺物、築陵、植橋爲標。以其陵擬船形、名地曰帆丘。本納。其埋船具之地、曰帆埋。法目。社貌巍然、陵樹蒼蒼。有石華表。銘曰二宮莊。父老曰、在昔有神田七十五町、神職一戸、社家十二戸。官許自葬祭。又傳、神太忌鷹。雖德川幕府鷹獵巡村之時、鷹人不致通本村。誤犯則其鷹暴死、或翫逸不復回。祠官水鳥川民部家記曰、寛政十一年冬、當本社再建、鑿社後丘數尺、出大小瓮壺十一個。鐵造、陶製九。祠官恐懼、具狀稟官。官藏之如故。今存。模圖。記又曰、享保九年、隣邑法目疏拓古沼。地中獲櫛船之類。長若干丈、周稱之。遂鋸截以納本社。今視之材似杉而理密、古香可尙。蓋、武尊船材之遺物也。帆丘・帆埋、地名所原、亦可推知。▲上總町村誌 長柄郡本納村、中古二宮莊ト稱ス。○良弼按ニ、玉前社ヲ一宮トシ、橋社ヲ二宮トナスナリ。氏神橋神社字御船形ニ在リ。祭神弟橋媛命。元慶中、正五位下勳五等ニ累進ス。三代實錄 延喜ノ頃、小社タリ。式 社傳云、景行天皇四十一年辛亥正月十七日、日本武尊創建ス。後、兵火ニ罹ル。天正十九年辛卯十一月、將軍德川家康神田六石ヲ寄ス。維新ノ後、官ニ收メラル。寛政十二年十一月再建ス。又、

神代杉ヲ以テ神器殿扉等ヲ作ル。今、ソノ殘木六尺許ヲ本社ニ藏ス。○彌按に、神代杉は國誌に云ふ。法目の古沼より出てたる物か。明治六年五月、縣社ニ列セラル。本納・法目二村ノ鎮守タリ。此ノ神、忌物六種アリ。鹿茸毛馬ノ社内ニ入ル事、藷・菅・茶・麻等ヲ作ル事、及ビ鷹狩ヲ忌ムト云フ。境内ニ橘樹アリ。實ヲ服用シテ癡病ヲ癒スト。神官ソノ實ヲ賽客ニ施用ス。吾妻ガ池アリ。樹木蒼々トシテ、其ノ狀、船ニ似タリ。▲同。橘媛墓、橘神社ノ背後ニ在リ。高三丈一尺、周九十間。樹木蒼鬱ス。媛ハ穗積氏、忍山宿禰ノ女ニシテ、日本武尊ノ妃タリ。景行天皇四十年庚戌十月、日本武尊東征ノ時、之ニ從ヒ、相模國ヨリ本州ニ渡リ、身ヲ海中ニ投ズ。後數日、御櫛海邊ニ漂着ス。日本紀・古事記コレヲ載ス。古事記又云、七日ノ後、御櫛海邊ニ寄ル。乃取リテ、御陵ヲ作りテ之ヲ納ムト。望陀郡吾妻村吾妻神社ノ傳ニ云ク、御櫛翌曉此所ニ着ク。故ニ社ヲ造リテ之ヲ祀ルト。其ノ他、太田村戀森・三黒村丸山等ノ傳、及ビ市原郡神代村七塚ノ傳ニ、武尊、媛ノ遺骸ヲ興送シテ、此ノ地ヲ過グ。時ニ暴雨俄ニ降ル。故ニ此所ニ避ケ給ヒシト。而シテ橘神社傳ニ云ク、尊、本州ノ賊ヲ平ゲ、將ニ進ンデ蝦夷ニ至ラントシテ此ニ來リ、媛ノ喪ヲ發シ、陵ヲ築キ、弔祭ノ禮ヲ舉ゲ、自ら橘樹ヲ栽エテ墓標トシ、社ヲ建テ之ヲ祀ルト。寛政十二年十一月、橘神社々殿改造ノ時、敷地ノ狹隘ニ苦シミ、遂ニ墳ノ南腹ヲ斫リ、土瓶鐵壺類十一個ヲ掘リ出ス。其ノ大ナルモノ一箇アリ。神職等、玉體ヲ納ムル物ト認メ、大ニ恐惧シ、直ニ絨封シテ社殿ニ納メ、狀ヲ幕府ニ報ズ。其ノ文書今尙存ス。幕府之ヲ譴メ、瓶ヲ悉ク墳中ニ埋葬セシメ、神職等蟄居ヲ命ゼラルト。又、社前ニ吾妻池アリ。當時墳ヲ築ク爲ニ掘リ取リシ跡ナリト云フ。按ニ、武尊本州ノ賊ヲ平グ。其ノ事跡ニ就テ考フレバ、媛ノ御骸、望陀郡黒戸濱地方ニ漂着シ、其ノ地ニ於テ棺ニ納メ、三黒・神代・六地藏等ノ諸村ヲ經テ、本村ニ至リ此ニ葬リ給ヒシナラム。

○島穴神社

市原郡島野村に在し、今、縣社たり。▲延喜式帳神名海上郡島穴神社小○按に、三代實錄は島名神に作る。穴名同調。兵部省式に島穴、和名抄に鳴穴とあるは、共に誤字なり。▲三代實錄三十一元慶元年五月十七日丁巳、授上總國從五位上勳五等島名神正五位下。▲倭名類聚抄六上總國海上郡島穴郷。▲延喜式省兵部上總國島穴六驛。馬五▲神社叢錄廿四海上郡島穴神社。島穴は志萬奈と訓むべし。倭名抄郷名島穴。印本鳴穴。祭神級長津彦命、島野村に在す。今、市原郡に屬す。地名▲房總志料三市原郡松ヶ島に隸せる島野村といふ所に島野明神の社有り。森の側の田の中に塚あり。塚上に松一株あり。松下に穴あり。是則延喜式に載する所の島穴神社、所謂上總五社の其の一也と、土人語りしは、彼土に鎮座する所の島野明神は所謂上總五社の其の一なり。國初に官命ありて、明神の來由を尋ぬる時に、同祝所縁を知らず。訛りて、春日明神を祭れりと對へしより、長く封土を不寄と。○按に、國初とは、徳川家康が關東入國の時をいふ。▲上總志料。島穴神社、今ハ市原ニ入ル。五井村ト姉ヶ崎驛ノ間ナル島野村ニ在リ。社後ニ古キ穴アリ。▲大日本史神祇海上郡島穴神社。○今在市原郡島野村島穴地。稱島野明神。相傳、祀ニ級長津彦命。巡禮舊神祠記日本武尊東征日所創祀云。社元慶三年、自ニ從五位上勳五等進ニ正五位下。三代實錄延喜制列一小社式延喜一▲上總町村誌一市原郡島野村、上古海上郡ニ屬ス。兵部省式ニ島穴六驛、和名抄ニ島穴郷トアル地ナリ。氏神島穴神社、字島穴ニ在リ。社傳ニ云ク、景行天皇四十年、日本武尊東征ノ時、始テ志那津比古命ヲ祀ル。五十三年、天皇東巡ノ時、日本武尊・倭姫命ヲ相殿ニ合祀ス。天長三年六月、從五位上勳六等ヲ授ケ、事史に逸す。元慶元年、正五位下ニ晉ム。三代實錄此年七月、祈雨ノ奉幣アリト云フ。延喜ノ

頃、官祭小社タリ。延喜式天慶三年二月、勅シテ朝敵將門降伏ノ祈願ヲ修ス。治承四年八月、源賴朝神領卅六石ヲ寄ス。天正中、北條氏ノ兵火ニ罹リ、社殿寄附狀共ニ灰燼トナル。タメニ神田ヲ失フ。元和七年、更ニ神殿ヲ造營ス。文政六年、松平定信崇敬シテ自筆ノ扁額ヲ捧グ。蓋、定信初テ富津海防ヲ修ム。故ニ祈ル所アリシナリ。明治四年十一月、郷社ニ列セラレ、十二年十月、更ニ縣社ニ列セラル。本村・白塚二村ノ鎮守タリ。神寶ニ假面アリ。上總國誌四 島野村、和名抄載有ニ島穴神社。式内元慶元年授ニ正五位下。祭神級長津彦命。景行天皇四十年、倭武尊所ニ親祭ニ云。社傍有ニ古松一株。松下有ニ穴。將レ風則雲氣起ニ于穴中。今尙然否。日本地理志料上總海上郡島穴郷。按、凡地名曰レ穴曰レ名、如ニ藍穴、浮穴、桑名、濱名皆修ニ野字ニ也。島穴即島野之義。神名式海上郡島穴神社、元慶元年紀作ニ島名神。房總志料、島穴神社在ニ島野村島穴地。稱ニ島野明神。傳言、日本武尊東征日、祀ニ級長津彦命。元慶之亂、奉レ幣禱捷。治承中、源賴朝充ニ神田。有ニ島穴寺。蓋、祠僧也。

○姉崎神社

市原郡姉が崎村の富山に在す。今、縣社タリ。延喜式帳海上郡姉崎神社小▲三代實錄三十元慶元年五月十七日丁巳、授ニ上總國從五位上勳五等姉前神正五位下。按ニ、本書、姉前に作る。今、一本に據りて改む。▲同四十同八年七月十五日癸酉、授ニ上總國正五位下勳五等姉前神正五位上。と。▲神社叢錄廿四海上郡小姉崎神社。姉崎は阿彌佐岐と訓むべし。祭神級長津彦命・級長戸邊命。姉ヶ崎村に在す。今、市原郡に屬す。地名例祭六日五日。房總志料▲房總志料三姉崎明神の祭は、毎年六月初午の日なり。社領三十六石。相傳ふ、元和年間、松平羽州侯この地に於て一萬石御領の頃、

明神へ寄する所、今にかはらず。▲大日本史神祇志海上郡姉崎神社。○崎亦作前。今、在ニ島野村郷。邑姉崎村富山。稱ニ姉崎明神。相傳、祀ニ級長戸邊命。巡禮舊神祠記、土人説。元慶三年、自ニ從五位上勳五等進ニ正五位下。光孝帝立、加ニ正五位上。三代實錄延喜制列ニ小社。延喜式▲日本地理志料十八姉崎神社、在ニ姉崎村富山。稱ニ姉崎明神。日本武尊東征日、祀ニ級長戸邊命ニ云。按、武尊進抵ニ相模、將レ往ニ本州。望レ海揚言曰、是小海耳。可ニ跳而超。中流暴風忽起、舟漂殆危。妃弟橘媛以レ身贖レ之、乃得レ着岸。島穴及本社、並祀ニ風神。蓋賽レ之也。隣邑不入斗、慶長十九年水帳作ニ入山増。古係ニ姉崎神田。不入斗、猶レ謂ニ不輸田ニ也。▲上總國誌四姉崎神社式内社傳曰、景行天皇四十年十一月、日本武尊東夷征伐之時、祭ニ風神級長戸邊命於此地。○此下に松樹を忌む事を載す。今、省略せり。▲上總町村誌二市原郡姉崎村、近古姉崎郷、マタ姉崎庄トモ稱ス。氏神姉崎神社、字富山ニ在リ。社傳ニ云ク、景行天皇四十年十一月、日本武尊初テ志那斗辨命ヲ祀ル。五十三年、景行天皇東巡ノ時、日本武尊ヲ相殿ニ合祀シ、履仲天皇四年九月、大雀命ヲ合祀ス。元慶中、正五位上ニ累進シ、延喜ノ制、官祭小社タリ。社傳又云ク、元慶元年、大旱、勅シテ祈雨ヲ修セラル。是ヨリ勅願所トナス。天慶三年九月、逆賊將門ノ降伏ヲ祈リ、御劍ヲ納メラル。治承四年八月、源賴朝戰勝ヲ祈ラシム。元和年中、松平忠政、社領三十六石ヲ寄ス。明治六年三月、縣社ニ班セラル。里傳ニ、此ノ神ハ、島穴神社ニ祀レル志那都比古命ノ妃ナリ。命、將ニ北征セントシ、妃神ニ謂ヒテ曰ク、遠カラズシテ歸ル可シト。其ノ待ツ久シクシテ、終ニ歸ラズ。神コレヲ怨ム。待、松ト訓通ズ。故ニ松ノ樹ヲ忌ミ給フト云フ。境内老樹鬱蒼タレド、絶エテ松ヲ生ゼズ。又、村俗、歳首門松ヲ飾ラズ。亦、薪トセズ。皆、神ノ忌ミ給フニ因ルナリ。

○飢富神社

望陀郡飯富村に在て、飯富明神と稱し、今、縣社たり。▲延喜式神名帳望陀郡飢富神社小○飢、原本は飯に誤る。今、古本に従ひて改む。▲三代實錄三十元慶元年五月十七日丁巳、授上總國從五位上勳五等飢富神正五位下。▲同四十六同八年七月十五日癸酉、授上總國正五位下勳五等飢富神正五位上。▲倭名抄六上總國望陀郡飯富鄉於布○按に、飯は飢の訛。又、布は吳音保なり。布衣布袋の如き證すべし。▲山槐記。應保二年三月十二日戊申八幡行幸條石清水俗別當兼安申行幸賞事。上總國飯富社、天承鳥羽院御幸之時、父兼孝申請了。隨以兼安補彼社司了。而先年之比兼孝逝去之砌、改定社務、執行了。此事無極訴也。如元賜彼社、可爲今度賞。同月十九日乙卯、八幡別當兼安申社寺、仰無左右。▲神名帳考證八按、此郡輪布。所謂望陀布也。飢富神社者麻殖神、而天富命之祀乎。▲神社叢錄二十四望陀郡小飢富神社。飢富は假字也。和名抄鄉名飯富。於布○按に、飢を飯と書ける例、參河國實飢郡を寶飯と書けるに同じ。祭神倉稻魂命。飯富に在す。地名▲大日本史神祇望陀郡飢富神社諸本作飯誤。今從一本。社今在飯富村。稱飯富明神。蓋祀長狹國造祖神八井耳命。古事記、元慶元年、自從五位上勳五等進正五位下。光孝帝立、加正五位上。實錄延喜制列小社。式。房總志料一望陀郡奈良輪村より神野村を過ぎて一里許東に、飽富村あり。順和名抄に載する所の縣名なり。彼地に飽富明神の社あり。是則延喜式神名帳に載する所の上總五社の其の一なり。別當を神宮寺といふ。眞言派なり。▲上總町村誌二飯富村、和名抄鄉名飢富ヲ載ス。於布ト訓ズ。其ノ地本村タリ。中古飢富莊ト稱ス。土俗今尙オフト稱呼ス。氏神飢富神社、字馬場ニ在リ。祭神倉稻魂命、相殿大己貴・少彥名神ヲ祭ル。元慶元年丁酉五月十七日從五位上勳五等ヨリ正五位下ニ進ミ、八年甲辰七月十五日正五位上ヲ授ケラル。三代實錄延喜ノ時、小社ニ班ス。延喜社傳云、綏靖天皇庚辰四月、始テ之ヲ祀ル。天慶中、平

倭名類聚
抄は濃書
第十卷に
抄出

將門叛亂ノ時、勅使ヲ遣シ、朝敵降伏ノ祈願ヲ修シ、太刀一振ヲ納メラル。太刀今神殿ニ藏ス。明治六年五月、縣社ニ列セラル。本村・下新田・有吉・井尻・曾根・奈良輪・神納・藏波八村ノ鎮守タリ。一位山神宮寺、眞言宗、古ノ社僧ナリ。村ノ東方鏡峰ノ頂ニ古墳ニアリ。共ニ方六間許。傳ヘ言フ、墳中ニ神鏡ヲ納ム。故ニ名アリト。或曰、是、蓋シ馬來田國造ノ墓ナラムト。

○高瀧神社

市原郡高瀧莊加茂村に在て、今、縣社たり。▲三代實錄五貞觀十年九月十七日丁未、上總國正六位上高瀧神授從五位下。▲南總郡鄉考上三代實錄高瀧神、今、市原郡加茂村に在り。▲同下御朱印高拾石市原郡高瀧神社。▲御朱印社領帳上高拾石市原郡加茂村平田丹所外幡祝部▲神社叢錄二十四高瀧神社、祭神詳ならず。市原郡高瀧村に在し、今、加茂明神と稱す。房總志料▲大日本史神祇高瀧神社。○在高瀧莊加茂村。傳言、祀賀茂別雷命。古老傳說今在市原郡。總志料、神名帳考證貞觀十年、自正六位上授從五位下。實錄▲房總志料三市原郡に加茂村といふ有り。五井・能滿のまんといふ地に接せり。彼地に加茂神社あり。土人の語に、同郡高瀧村加茂神社は此地より遷座すと。按に、三代實錄に上總國高瀧神授從五位下。といふ事見ゆ。是則高瀧村の加茂神社の事なり。予、砂石集を閱するに、北條氏の頃、上總國高瀧庄官の物語を載するを見れば、高瀧の地名尤も古なり。かゝれば、高瀧村の加茂神社を後に五井に接せる加茂村へ移せしやう也。▲日本地理志料十八海上郡倉橋郷。略山田郷南爲高瀧郷。領本郷・加茂・宮原等數邑。或倉橋郷域也。本郷即鄉司所治。三代實錄云、貞觀十年、上總國高瀧神授從五位下。今在賀茂村、

稱賀茂明神。祀賀茂別雷神。後世以三社號之行、而倉橋名晦者、近時併賀茂・宮原二村、爲高瀧村。▲上總國誌四 加茂村、有高瀧神社。外祭神□□、每歲以三月中酉日爲例祭。神官平田氏累世掌之。惜夫、古記不傳。今存者、天正十九年徳川氏朱鈴狀、寶曆十七年同氏竹姫所寄葵章錦帳三幅耳。▲上總志料。高瀧神社ハ、五井驛ヨリ五里餘、養老川上ノ上賀茂村ニアリ。神主平田市正ト云フ。マタ瀧ハ粟又村ニアリ。此ノ邊スベテ高瀧郷ナリ。▲上總町村誌。市原郡高瀧村、古ヘ下地村ト稱シ、承安中賀茂村ト改ム。中古高瀧郷ト稱シ、明治七年賀茂・宮原二村ヲ併セテ今ノ村名トス。氏神高瀧神社、賀茂村ニ在リ。瓊々杵尊・玉依姬命・別雷命ヲ合祀ス。社傳云、天武天皇元年初メテ高瀧神號ヲ賜ヒ、貞觀十年、從五位下ニ進ミ、承安年中、山城國賀茂神ノ分鹽ヲ遷祀シ、改メテ賀茂大明神ト稱セリ。天正十九年、徳川家康神領十石ヲ寄ス。維新後コレヲ收メラル。明治十三年、縣社ニ列シ、社名舊ニ復ス。本村外三十五村ノ鎮守タリ。

○前廣神社

市原郡西廣村に在す。▲三代實錄五 貞觀十年九月十七日丁未、上總國正六位前廣神授從五位下。按に、本書に、前廣神代神とありて一神の如くなれど、前廣神、神代神にて、神代の上に、一の神字を脱せしなり。▲南總郡郷考 三代實錄、前廣神、今、市原郡西廣村に在り。▲上總志料。三代實錄ニ、前廣神代神トアレド、固ヨリ一社ニ非ズ。前廣神ハ市原郡五井驛ノ南一里、養老川ノ東ナル西廣村ニ在リ。神代神ハ市原郡神代村ニアリ。○朝按に、神名帳考證誤りて一社トす。神社叢書も亦その誤を襲踏セリ。▲大日本史 神祇 前廣神社、實錄 今在市原郡。房總志料、神名帳考。貞觀十年自正六位上授從五位下。實錄 ▲上總町村誌 市原郡西廣村、中古市西莊ト證。○今在西廣村。

正六位は上字脱か

稱ス。氏神前廣神社、字上ノ原ニ在リ。大山祇命ヲ祀ル。貞觀十年九月十七日、正六位上前廣神ニ從五位下ヲ授ク。三代實錄 ▲千葉縣神社調書 前廣神、市原郡西廣村に在り。九月九日、祭を行ふ。▲日本地理志料 貞觀十年紀、有上總國前廣神。今在市原郡西原村。祠僧曰天神山西廣院。西與前音訓通。

○神代神社

市原郡神代村に在す。▲三代實錄五 貞觀十年九月十七日丁未、上總國正六位上神代神授從五位下。按に、本書、月戊戌條又云、授上總國神代神從五位下。是必ず衍文なり。故に表せず。▲同一 元慶元年五月十七日丁巳、授上總國從五位下神代神從五位上。按に、氏に作る。今、上 大日本史 神祇 神代神社、今在市原郡。○在神代村神代臺地。貞觀十年、自正六位上授從五位下。元慶元年、進從五位上。三代實錄 ○本書、神代誤作神氏。今訂之。又進階在五月、而是年閏。房總志料 市原郡に神代村といふあり。古來かはらいと讀み來れり。又、祝詞に神代の字かみやらいと訓ず。是にて地名の古りたる事知るべし。又、望陀郡に神代村あり。是はかんだいと訓ず。按に、三代實錄に、貞觀十八年授上總國神代神從五位下。といふ事見ゆ。いづれの村なるにや、未考。○按に十八年は十年の誤なり。▲南總郡郷考 三代實錄神代神、今、市原郡神代村ニ在リ。▲上總志料。神代神ハ市原郡今富村ノ東南五丁許神代村ニアリ。但、望陀郡ニモ神代村アリ。混ズ可ラズ。▲上總町村誌 一神代神社、神代村字宮ノ越ニ在リ。大日靈尊、相殿保食神ヲ祀ル。貞觀・元慶ノ際、正六位上ヨリ從五位上ニ進ム。事、三代實錄ニアリ。▲千葉縣神社調書 神代神。今、市原郡神代村ニアリ。祭神詳ナラズ。三月十七日・九月九日、祭ヲ行フ。

○常世神社

周准郡常代村に在す。▲三代實錄^{三十} 元慶元年閏二月廿六日戊戌、授^三上總國正六位上常代神從五位下。▲房總志料一 周准郡常代村に羽黑權現の社あり。三代實錄に、貞觀十八年授^三上總國常世神從五位下。といふ事見ゆ。此の神の事なるにや。○貞觀十八年は元慶元年の誤なり。▲神社叢錄^{二十四} 常世神社、祭神詳ならず。周准郡常代村に在す。今、羽黑權現と稱す。房總志料^{十三} 常世神。今、周准郡常代村にあり。羽黑明神と云ふ。蓋、是也。志料^{房總} 元慶元年閏二月戊戌、正六位上常世神に從五位下を授く。實錄^{三代} 毎年九月廿八日祭を行ふ。千葉縣神社調 ▲大日本史^{神祇} 常世神社、今在^三周准郡。村、稱^三羽黑神社。者蓋是。元慶元年、自^三正六位上授^三從五位下。實錄 ▲上總町村誌^三 周准郡常代村、中古秋元莊ニ隸ス。氏神常代神社、字寺町ニ在リ。倉稻魂命ヲ祀ル。元慶元年、從五位下ヲ授ケラル。

○建市神社

市原郡^{なほし}武士村に在し、今、郷社たり。▲三代實錄^{四十} 元慶八年七月十五日癸酉、授^三上總國正六位上建市神從五位下。▲房總志料^三 市原郡に武士村といふあり。彼土に山高くして舟行の標となる山あり。山上に古神祠あり。按に、武士は建市を誤れるなり。貞觀十八年、上總建市神授^三從五位下。といふ事、三代實錄に見ゆ。○貞觀十八年^{記の失} 往古、班幣之禮に預りし神なる事知るべし。土俗相傳ふ、神誓ありて盜賊を護すと。賊遁れて此の山に匿る、時は見えず。故に盜神の稱有りと。思ふに跡が徒を祀れるにはあらじ。此の地、山深く人居稀にして、亡命

逃竄の徒の巢居となりぬれば、かく汚名を蒙らしめたり。▲南總郡郷考^上 三代實錄、建市神、今、市原郡武士村に在り。▲大日本史^{神祇} 建市神社、今在市原郡。在^三武士村山上。光孝帝立、自^三正六位上進^三從五位下。實錄 ▲神社叢錄^{二十四} 建市神社、祭神詳ならず。房總志料 ▲上總町村誌^一 市原郡武士村、往古建市ト稱ス。又、武子・竹子ノ文字ヲ混用ス。實曆六年水帳ナホ武子ニ作ル。氏神建市神社、字神戶ニ在リ。武甕槌命ヲ祀ル。元慶八年從五位下ニ叙ス。實錄^{三代} 維新ノ後、郷社ニ列セラル。社地高丘ニ位シ、背後曠原ニ亘ル。社殿漸ク衰頽セリ。鶴岡安宅曰ク、中古茂樹祠ヲ繞リ、岑然幽鬱タリ。當時、賊、村家ニ入り財ヲ掠メ去ル。衆人之ヲ捕ヘントス。賊山中ニ投ジ、其ノ遁ル、所ヲ知ラズ。遂ニ神ノ匿ス所トナス。賽客漸ク絶ツニ至レリト。按ニ、里老謂フ、舊社殿本村鹿島山ノ下ニ在リ。後、今ノ地ニ遷セシナリト。▲日本地理志料^{十八} 建市神社、今在市原郡武士村神戶地。祠位^三高邱、背帶^三曠野、茂樹繞^レ祠、岑蔚晝晦。有^レ時草賊棲止。可^レ知^三舊祠也。按^三姓氏錄、高市縣主、出^レ自^三天津彥根命十二世建許侶命。舊事紀云、建許侶命子大布日意彌命爲^三須惠國造。須惠即周准郡也。高市氏居^レ此者、祀^三其祖神也。又按、額田部湯坐連・三枝部連・馬來田國造・茨城國造、皆系^三於天津彥根。馬來田即望陀郡、而州有^三湯坐・額田二郷。下總有^三三枝・茨城二郷。其裔係衍可^レ以槩見。

○田原神社

望陀郡俵田村に在し、今、郷社たり。▲三代實錄^{四十} 元慶八年七月十五日癸酉、授^三上總國正六位上田原神從五位下。▲房總志料^三 望陀郡久留里領に、俵田村と云ふ有り。按に、三代實錄に、元慶八年七月、授^三上總國田原神從

五位下。と云ふこと見ゆ。俵田村のことなるにや。彼土の神社、考ふべし。▲神社叢錄二十四 田原神社、望陀郡俵田村に在す。祭神詳ならず。今、白山權現と稱す。房總志 料續篇▲上總志料。田原神社、望陀郡久留里ノ近邑俵田村ニ在リ。▲大日本史神祇 田原神社、今在望陀郡。郡名據房總志料 光孝帝立、自正六位上授從五位下。三代實錄▲上總町村誌。俵田村、初、田原田ト稱ス。氏神白山神社、字天神臺舊稱館ニ在リ。境内五千二百二十步。祭神弘文天皇。社傳云、天武天皇十三年九月勅使下向アリ。社殿ヲ造營シ、天皇ヲ祀リ、田原神ト稱セラルト。元慶中、正六位上ヨリ從五位下ニ晉ム。三代實錄後ニ社司僧ニ歸シ、白山大權現ト改メ、神宮寺ヲ立ツ。明治ノ初、寺ヲ廢シ、神祭ニ復シ、白山神社ト改稱シ、郷社ニ列セラル。俵田・末吉・長谷川・臺・吉野・大谷・青柳・上新田・箕輪・三田・加惠淵・西原十二村ノ鎮守タリ。神殿壯麗ニシテ、社前田原神社ノ扁額ヲ掲グ。内陣ニ天皇ノ木像軍裝ナル者、及ビ手桶一個ヲ奉安ス。共ニ極メテ舊シ。傳ヘ言フ、畏クモ天皇ノ御頸ヲ手桶ニ納メ奉リテ、社後ニ葬ル。故ニ氏子村民、絶エテ手桶及ビ其ノ詞ヲ使用セズ。形作手桶ニ似ルト雖モ、持ツ所ヲ圓クシテ、引拔ク事ヲ自由ナラシメ、其ノ名ヲ手提ゲト稱ス。其ノ他、石杵一個・鏡一面菊桐ノ模アリ。天皇ノ畫像一軸ヲ以テ神寶ト爲ス。社後ニ古墳アリ。高六間餘、圓形ニシテ中窪シ。樹木生ゼズ。而シテ全墳瓢箪形タリ。故ニ丸山或ハ瓢箪塚ト稱ス。傳ヘテ弘文天皇ノ御陵ト爲ス。里人肅然恐怖シテ登ラズ。殆ド人跡ヲ絶ツガ如シ。○按に、帝陵に非ることハ下の地理志料に辨じたり。▲日本地理志料十八 呼蒜郡新田郷、按互上新田・末吉・俵田・寺澤・青柳・富田諸邑。蓋其地也。元慶八年紀、授上總國田原神從五位下。房總志料云、今在俵田村天神臺。曰白山社、爲十二邑鎮守。上總町村誌、社後有圓丘。高六間許、稱瓢箪塚。土人傳爲大友天皇陵。良弼按、本州稱壬申遺蹤者不壹而足。意、大伴部氏蕃衍房總。

事具正史。其曰大伴館、曰大伴墓。皆其故址已。淺人以下與帝大友語相涉、傳會之。其妄不待辨矣。

○坂戸神社

望陀郡坂戸市場村に在す。今、郷社たり。▲御朱印寫九 上總國望陀郡中島郷市場村坂戸明神社領、同村之内五拾石事、並、山林竹木諸役等免除、任天正十九年十一月 日・慶安元年八月十七日兩先判之旨、永不可有相違者也。寛文二年七月十一日。▲寺社分限帳 高五拾石上總望陀郡中島 坂戸明神領。▲御朱印寺社領帳上高五拾石 望陀郡中島坂戸明神主伊藤出雲。▲南總郡郷考 下御朱印高五拾石 望陀郡坂戸市場村坂戸神社。▲房總志料 望陀郡奈良輪村の東に、坂戸市場といふ處あり。坂戸明神の祠あり。或作逆手 多力雄神を祭ると。宮殿甚だ美麗なり。毎年六月廿七日祭禮あり。氏子と稱する村里十二ありと。牛袋・伊川・坂戸市場・大崎・牛込・中島・萬穀・川尻・葛麻・高柳。一村聞き洩せり。又云、坂戸市場の人語りしは、坂戸明神、古は祭に人の御贄を供す。一村相會し鬮を拈り、贄の鬮を得たる人を、巫祝、俎上に載せて屠刀を揮ひ切割する眞似して神前に供す。其の人、三年を不待して必ず死す。此の俗いつとなく廢せりと。又云く、社前に古鐘一口を懸く。模形、今と異り。銘識に、弘長三年癸亥、武州河崎莊内勝福寺とあり。弘長は龜山帝の年號なり。戰國の比、彼地より奪ひ來れるにて有るべし。鎌倉諸山の古鐘かゝる事最も多し。▲上總町村誌 望陀郡坂戸市場村、傳ヘ云ク、鎌倉頼家公ノ亡アルヤ、其ノ臣片桐・石見・内藤三氏、コノ地ニ隱匿シ、始メテ開墾ス。當坂戸神社ノ神領タリシガ、文祿三年二月墾地ヲ檢シ、始メテ一村ト爲シ、市場ト稱ス。元祿元年、改メテ坂戸市場ト爲ス。氏神坂戸神社、字坂戸山ノ丘上ニアリ。手力雄命・天兒屋根命・天太玉命ヲ祀ル。社傳云、初メ逆手神

ト稱ス。創建詳ナラス。景行天皇四十年、日本武尊東征ノ時、戰勝ヲ祈リ、親ラ奉幣セラレ給フト。天正十九年十一月、徳川家康神田五十石ヲ寄ス。明治ノ初、收メラル。四年、郷社ニ列シ、本村・中野・牛込・中島・瓜倉・畔戸・江川・久津間・萬石・高柳・牛袋・牛袋野十二村ノ鎮守タリ。例祭六月二十七日。又、十一月ニ神事アリ。日本武尊ノ故事ニ因ルト云フ。

○菊間神社

市原郡菊間村に在し、郷社たり。舊、八幡宮と稱す。▲御朱印寫九八幡宮領上總國市原郡菊間郷之内ニ拾石事、任ニ天正十九年十一月日・元和三年五月十一日・寛永十三年十一月九日先判之旨、永不レ可有ニ相違ニ者也。寛文五年七月十一日。▲寺社分限帳一高貳拾石上總國八幡領。▲御朱印寺社領帳上高貳拾石市原郡八幡宮。主根本采女。▲南總郡郷考下御朱印高二十石市原郡菊間村菊間神社。▲國華萬葉記十八幡宮郷社領卅石。神豐後。○按に、卅石は、廿石の誤訛れり。▲舊事本紀十菊間國造、志賀高穴穗朝御代、務以ニ无邪志國造祖兄多毛比命兒大鹿國直、定ニ賜國造。▲倭名抄六上總國市原郡菊間郷久久郷。刻本に菓麻に誤る。▲房總志料三市原郡菊間村に八幡神社あり。社領百石を附す。いづれの頃の鎮座なるにや、來由詳ならず。古き人に問ふべし。○按に、百石とあるは傳聞の誤なり。▲日本地理志料上總國郡菊間郷、按ニ舊事本紀、成務帝時、以ニ无邪志國造兄多毛比命子大鹿國直ニ爲ニ菊麻國造。大鹿豈取ニ秩父郡巨香郷名ニ耶。按ニ高橋氏文、先是景行帝之在ニ安房浮島行宮、无邪志國造祖大多毛比、知々父國造祖天上腹・天下腹等、詣ニ行在ニ奉仕。至レ是録ニ其功、舉ニ族人一以任ニ國造者、大化改新、降爲レ郷、隸ニ本郡。今、菊間村存。村

有ニ菊間八幡社。幕府時寄ニ祭田二十石。蓋、其祖廟也。▲上總町村誌一市原郡妙香村字向田ノ田中ニ、僅一坪ノ古墳アリ。宮塚ト稱ス。成務天皇ノ時ニ菊麻國造タリシ大鹿國直ノ墓ナリ。又、字鹿子臺ニ一墳アリ。石塚ト稱ス。其ノ子小鹿直ノ墓ナリト。又、奉免村苗鹿神社ノ棟札ニ、國造大鹿ノ男小鹿直、初テ芳芽原ニ住シ、開墾シテ一村落トナス。治承四年、源賴朝コノ地ヲ本社ニ寄セテ奉免郷ト改ムト。▲同。市原郡菊間村、上古菊麻國ト稱シ、後、菊間郷ト云フ。氏神八幡神社、字若宮ニ在リ。日本武尊・武甕槌神、相殿大鷦鷯尊ヲ合祀ス。社傳云、菊麻國造大鹿國直ノ裔、白鳳二年三月、初テ之ヲ祀ル。治承四年□月、源賴朝祈願ニ依テ、若宮ト改稱ス。天正十九年十一月、徳川家康神領二十石ヲ寄ス。維新後收メラル。社殿稍壯麗、境内樹木蒼々トシテ風致アリ。

○八坂神社

市原郡椎津村に在し、舊は天王社と稱す。▲南總郡郷考下御朱印高十石二斗餘市原郡椎津村天王社。▲上總町村誌一市原郡椎津村、中古望陀郡飯富庄タリ。後、本郡ニ入ル。氏神八坂神社、字下田ニ在リ。素盞鳴尊ヲ祀ル。慶安二年十月、徳川家光神領十石二斗ヲ寄進ス。維新後、收メラル。

○八幡社

市原郡八幡町に在し、今、縣社たり。▲御朱印寫九八幡宮領、上總國市原郡八幡郷之内百五十石事、任ニ天正十九年十一月日・元和三年五月十一日・寛永十三年十一月九日先判之旨、永不レ可有ニ相違ニ者、可レ抽ニ國家安泰之懇

祈者也。仍如件。寛文五年七月十一日。▲寺社分限帳一高百五十石^{上總}八幡領。▲御朱印寺社領帳^上御朱印高百五十石、^{市原郡}八幡別當若宮寺、^{市川齋宮}▲南總郡郷考^下御朱印高百五十石^{市原郡}八幡村八幡社。▲國華萬葉記^十八幡宮^{上總國}やはた村社領百五十石、^神主伊賀。別當靈應寺。○若宮寺の▲房總志料^三市原郡八幡村の八幡神社は、百五十石の神領を附す。別當を若宮寺といふ。眞言派なり。塔頭十三院。この寺に、小弓御所義明の興廢の事記せし物數多ありと。▲神名帳考證^{土代上總}國人云、當國八幡ノ舊社兩社アリ。○一は望陀郡木更津に在り。其の條に引けり。一ハ市原郡八幡ニアリ。往古、隣村五所村ノ人、都ニ至リ、或神祠ニテ神像ヲ奪ヒ立退キケルガ、追手ノ者ニ窘メラレテ、詮方ナキマ、ニ、五所ノ浦ニ着キ給ヘト祈念シテ像ヲ海中ニ投ゲ入レケリ。サテ、其ノ人、國ニ歸ラヌサキニ五所ノ海中ニ毎夜光ル物アリ。歸國ノ後、ソノ由ヲ聞キテ網ヲオロスニ、果シテ像ヲ得タリ。即チ其ノ地ニ祭ル。此ノ地ヲ幡ト稱。其ノ後、白鳳二年。今ノ地ニ移ス。今ニ至ルマデ、五所ノ人イタラザレバ、神輿ヲ出スコト能ハズ。此ノ地、國分寺ニ近キ故ニ、シバノ官使往來ノ便ニ隨ヒテ、大社トナルト云ヘリ。今、御朱印地ナリ。▲市原郡市東庄八幡郷御宮略緣起^{神名帳考證土代所引}。當社八幡大神は人皇十六代應神天皇を稱し奉る。(略)當宮は、一國一社の八幡宮、中興治承四年、源賴朝公當社へ御願文、速に御開運、當社嚴重の御建立あり。其の後、源義滿公、今の神輿四社御寄進、當御聖代に至て、神君様深く御信仰あらせられ、百五十石の御朱印、難有も御代々様、今に於て御寄附の御宮、美麗を盡し、誠に神威の尊きこと擧げて數へ難く、年々八十餘度の御祭あり。天下泰平・御武運長久の祈願所なり。(略)天保六乙未年三月、神主、市川伊賀。別當、若宮寺。▲上總町村誌一市原郡八幡宿、氏神飯香岡八幡神社、字片町ニ在リ。祭神譽田別尊・息長帶姫尊・玉依姫尊、相殿猿田彦命・日本武尊・足仲彦尊・經津

主命・天穗日命・住吉大神ヲ祀ル。社傳云フ、天武天皇三年三月、勅使本州ニ下リ、清淨ノ地ヲ撰ビ、神殿ヲ創建シ、一國ノ宗社八幡大神宮ト號ス。後、相殿ノ諸神ヲ合祀ス。天平勝寶元年、元慶三年、再ビ神殿ヲ造營ス。爾後、源賴光・賴義・賴朝・千葉常胤・惟康親王・足利義滿・義持・義政・千葉親胤・富胤ノ諸公、相尋テ崇敬シ、諸神殿華表神輿等ヲ寄進ス。天正十九年十一月、徳川家康更ニ神領百五十石ヲ寄ス。文祿以後、領主永井右近大夫・堀飛驒守・大久保伊豆守等、歳ニ米若干苞寄進ス。明治六年三月、郷社ニ班シ、本村及ビ五所・市原二村ノ鎮守タリ。社殿本郡第一ノ壯麗ニシテ、境内樹木鬱蒼、社傍ニ銀杏ノ大樹アリ。所謂神木ナリ。▲同十八幡御所址、五所村ノ地概ネ其ノ趾ナル可シ。足利氏ノ時、上杉氏ト相闘ギ、東國亂ル。里見義實・武田三河守、皆上杉氏ト隙アリ。成氏ヲ佐ケテ之ヲ滅サント欲ス。而テ成氏暗弱助クルニ足ラズ。相謀リテ庶孫義明ヲ奉ジ、寛正六年館ヲ構ヘテ此ニ居ラシメ、社家様、又、八正院^{或ハ八省ニ作ル}ト稱シ、其ノ館ヲ八幡御所ト號ス。後、下總國小弓城ニ移ルト雖モ、ナホ舊館ヲ存ス。天文七年、義明北條氏ト鴻ノ臺ニ戰ヒテ敗死シ、御所遂ニ廢ス。○良弼按に、八幡御所と曰ふ。皆この神を崇敬するに出づるなり。但、御所は至尊居る所の稱、八省院は天子即位及び百官告朔の所なり。何ぞ忌憚なきの甚しきや。

○磯谷八幡社

市原郡磯谷村に在す。▲御朱印寫九八幡宮領、上總國市原郡磯谷村五拾石事、任寛永十三年十一月九日先判之旨、不レ可レ有ニ相違一者也。寛文五年七月十一日。▲寺社分限帳一高五拾石^{上總市西}八幡領。○按に、近古市原郡を分南總郡郷考^下御朱印高五十石^{磯谷村}八幡社。▲國華萬葉記^十八幡宮^{磯谷村}立ッ。社領五十石。主宮五郎。○按に、磯谷

なら。▲房總志料 三市原郡磯谷村に八幡神社あり。社領五十石。社僧を極樂寺といふ。上總五ヶ寺の其の一なり。
 是亦來由土人に問ふべし。▲上總町村誌 一市原郡磯谷村、氏神八幡神社、宇石原ニ在リ。社傳ニ云フ、白鳳元年
 三月、譽田別尊・息長足姫尊・玉依姫命ヲ祀ル。後、天武天皇感ジ給フ所アリ。勅シテ神田千町ヲ附シ、猿田彦
 命ノ假面ヲ寄セ、且、神殿ヲ造營セラルト。寛永十三年徳川家光神領五十石ヲ寄ス。維新ノ後、收メラル。境内
 平坦、樹木森々タリ。舊別當アリ。極樂寺ト云フ。天台宗ナリ。僧空海ノ眞蹟ヲ傳フ。○國華萬葉記十に、磯谷極
 あるもの
 是なり。

○木更津八幡社

望陀郡木更津に在す。▲御朱印寫^九 上總國望陀郡木佐良津郷八幡領、同所之内三石事、並、宮廻竹木諸役等免除、
 任^二天正十九年十一月日・慶安元年八月十七日兩先判之旨、永不可^レ有^二相違^一者也。寛文五年七月十一日。▲寺
 社分限帳 一高三石^{上總望陀郡} 八幡領。▲御朱印寺社領帳^上 高三石^{上總國望陀郡} 八幡宮。主^神 八劍織部。▲南總郡郷考^下
 御朱印高三石二斗^{望陀郡} 八幡社。▲上總町村誌^二望陀郡木更津村、氏神八劍八幡神社、宇八幡町ニ在リ。譽田別
 尊・足仲彦尊・息長帶姫尊、相殿素戔鳴尊・日本武尊ヲ祀ル。社傳云、モト八劍ノ神ト稱シ、單ニ素戔鳴尊ヲ祀
 リ、地ヲ八劍ノ里ト稱ス。景行天皇四十年、日本武尊東征ノ時、相模ヨリ本州ニ航ス。海上暴風ニ遭ヒ、妃橘媛
 海ニ投ズ。尊、本村ニ達シ、橘媛ヲ懷ウテ滯留數日、去リ給ハザリキ。故ニ君不^レ去ト名ヅク。後、尊及ビ譽田別
 尊以下ノ三神ヲ合祀シ、改メテ八劍八幡宮ト號スト。神寶銅馬一隻ヲ藏ス。徳川家康ノ納ムル所ナリ。▲神名帳

考證土代^{十八} 國人云、當國ニ八幡ノ舊社兩社アリ。一ハ望陀郡木更津ノ近處ナリ。是殊ニ古社ナリト云フ。社ハ
 海ニ臨メリ。社門ニ石柱對立ス。^{文字} 毎年競馬トテ、村民馬ニ騎リテ、社前ノ路上ヲ奔走ス。一ハ市原郡八幡ニ
 アリ。○此文は上の八幡八幡社の條に引けり。▲同。黒川春村曰、武藏橘樹郡鶴見村杉山神社祭事^{六月十} 唱歌ニ、「上總の八幡は、おも
 しろや。ばんばにむちゆつて、駒くらべ云々」ト唄フ。此ハ望陀ノ方歟。又、市原郡ノ^{みよす} 糴磨歌ニ、「江戸が見たく
 ば八幡を見やれ。やはた八幡こけら葺」ト謠フハ、市原ノ方ナリ。

○笠森八幡社

長柄郡笠森村に在す。▲國華萬葉集 十八幡宮^{笠森ニ立ツ。或} 社領二十石。▲倭漢三才圖會^{六十二之} 社領廿石、長柄
 郡笠森八幡宮。▲寺社分限帳^一 御朱印貳拾石^{上總} 笠森村^{觀音領}。○按に、本書標して觀音領と云ひ、而して猶これ
 を神社部に收めたるを思へば、もと八幡社領なるを、江戸幕府の初に、社僧笠森寺僞りて觀音と稱し、神領を侵
 牟せしものなるべし。故に、南總郡郷考には、高二十石^{笠森} 天台笠森寺領と記したり。上總國誌^ニ に、大悲山笠森寺、
 天台宗、在^ニ 笠森村。延暦三年、傳教開山、長元元年、延暦寺良源法弟覺超中興。とありて、所謂る坂東札所觀音
 の一なり。紀伊金剛峯寺の丹生都比女の神地を奪ひ、信濃善光寺の水内の社地を掠めたる如き、諸國例多し。豈
 慨歎に堪へんや。^{下條鹿野山の白鳥社} も、亦その一なり。

○縣神社

濃書三卷
土氣古城
再興傳來
記參照

山邊郡土氣町に在す。▲御朱印寫九縣大明神領、上總國殖生郡土氣郷之内五石事、任天正十九年十一月日・元和三年三月十七日・寛永十九年九月十五日先判之旨、永不_レ可有_レ相違_一者也。寛文五年七月十一日と。▲寺社分限帳一御朱印高五石、上總土氣郷縣明神領。▲土氣古城再興記。天正七年、伯耆守殿_{酒井}康治御祈禱ノ事アリ。諸家中御供ニテ、於_レ縣大明神、三日御酒宴被_レ成事アリ。狩野右京亮_{重信}被_レ召寄、牛若・辨慶ヲ繪ニ書キ、若菜豊前賄_レ之、寶殿ニ置ク。云々。▲上總町村誌八山邊郡土氣町、中古土氣領ト云フ。又、土氣莊、或ハ土氣郷ト稱ス。氏神縣神社、字御山ニ在リ。祭神大日靈命、相殿弟橋比賣命・譽田別尊。社傳ニ云フ、創建詳ナラズト。或ハ云ク、仲哀天皇ノ時祀ルト。モト土氣城内善勝寺曲輪ノ地ニ在リ。土氣縣主コノ地ニ居リ、尊ビテ縣大神ト稱シ、橋比賣命ヲ相殿ニ祀ル。長享ノ初、酒井定隆土氣城修築ノ時、今ノ地ニ遷シ、本壽寺ヲ以テ別當トナス。定隆實ハ足利氏ノ孽ナリ。故ニ八幡大神ヲ信ズ。子孫ニ傳ヘテ之ヲ敬セシム。子定治ソノ志ヲ繼ギ、嘗テ里見實堯ニ從ヒテ海ヲ渡リ、北條氏ト戰ヒシ時、鶴岡八幡宮ノ神寶ヲ奉ジテ歸リ、因テ之ヲ相殿ニ祀リ、八幡大菩薩ト號ス。天正十九年十一月、徳川家康社領五石ヲ寄ス。維新ノ後コレヲ收メ、本壽寺ノ別當ヲ罷ム。本町・金谷郷・南玉・池田・餅木五村ノ鎮守タリ。社地廣ク、綠樹鬱蒼トシテ、九十九里ノ沃野ヲ眺望ス。佳景ナリ。社寶ニ繪額二面アリ。其ノ識ニ縣大明神奉_レ捧、判官辨慶之畫像。右所願成就如_レ件。天正七年己卯十二月廿六日、酒井伯耆守康治敬白ト記ス。蓋シ狩野重信ノ描ク所ト云フ。▲日本地理志料_{十八}山邊郡土氣町、屬_ニ土氣莊土氣郷。有_ニ縣神社。土氣城主家傳云、祀_ニ土氣縣主祖神。按、縣主官名、屬_ニ于國造、掌_レ檢_ニ戶口_一督_レ租庸。但、土氣縣主、史無_レ所見。蓋隸_ニ菊麻或武社國造_一也。附待_ニ大雅考定_一。○按に、寺社分限帳_九に、御朱印高三拾石_{山邊郡}土氣郷本壽寺領とあり。是

縣神社の社僧たり。亦、神領を掠めしにはあらざるか。

○白鳥神社

周淮郡鹿野山村に在す。▲上總町村誌_三白鳥神社、周淮郡鹿野山村字白鳥山ノ絶頂ニ在リ。日本武尊ヲ祀ル。一村ノ氏神タリ。社傳云、推古天皇ノ時、聖德太子コノ山ヲ開キ、尊ヲ祀ル。或云、尊山賊ヲ討チテ而テ山頂ニ登リ、亡妃橘媛ヲ追懷ス。後、里人社殿ヲ造立シテ尊ヲ祀ルト。▲房總志料一鹿野山は覺鏝派の新義眞言寺なり。寺領五十石、塔頭九院、軍荼利夜叉明王を安ず。殿堂壯麗にして、房總の靈場なり。按に、今人、軍荼利明王は日本武尊なる事を知らず。初、日本武尊皇詔を奉じて東夷を征す。其の功最も大なるを以て、土人祭りて山鎮となす。後世、佛氏の假託、兩部家の説起り、尊の神武雄略を夜叉神に比して祭れるなり。山中もとより大鳥神社○按に、町村誌に白鳥神社とあるを正しき。有るにて知るべし。今は却て配食の祠と成れり。○按に、武州荏原郡に大鳥神社あり。是又、日本武尊を祭ると。▲寺社分限帳_三高五拾石_{上總}神野寺。▲國華萬葉記_十神野寺_{神野村}眞言寺領五十石。▲南總郡郷考_下御朱印高五十石_{周淮郡鹿野山眞言}神野寺。▲同。日本武尊ノ舊蹟、鹿野山中ニ白鳥神社アリ。所謂東夷ノ首領亞久留王滅亡ノ地ナリ。▲上總町村誌_三阿久留塚、鹿野山村字裏門ニ在リ。面積凡百三十坪、楕圓狀ニシテ高六尺、石櫛等ノ痕迹アリ。日本武尊東征ノ時、東夷ノ首領阿久留ガ頸ヲ刎テ埋メシ所ト云フ。○按に、延暦中、坂上將軍田村麻呂夷酋惡路王を陸奥の達谷窟ニ斬ると。阿久留・惡路同音なり。蓋シ夷酋の通名なるにや。▲同。神野寺、徳川氏ノ時、寺領五十石ヲ有ス。寺ニ藥師・軍荼利ノ二堂アリ。縁起云、推古天皇ノ時、聖德太子、軍荼利及ビ藥師ノ像ヲ安ズト。蓋、軍荼利ヲ以テ日本武尊ニ擬シ、藥師ヲ以テ弟橘姫ニ擬セシナリ。其ノ軍荼利

ノ像、形貌忿怒、人ヲシテ一拜畏敬ノ念ヲ起サシム。

○吾妻神社

望陀郡吾妻村に在す。▲房總志料一望陀郡吾妻村に東森といふ有り。吾孀明神を祭る。倭武尊東夷征伐の後、橘姫を祭れるなり。▲上總町村誌二吾妻村、或ハ我妻ニ作ル。氏神吾妻神社、海濱ニ在リ。弟橘姫命ヲ祀ル。社傳云、景行天皇四十年十月、日本武尊東征ノ時、走水ノ海中ニ於テ暴風ニ遭フ。時ニ、姫、海神ニ祈リ自ラ海ニ投ズ。船遂ニ岸ニ着クヲ得タリ。後、七日ヲ經テ御櫛コノ地ニ漂着ス。尊之ヲ取り、陵ヲ造リテ納ム。後、祠ヲ建テ、吾妻明神ト稱スト。○橘神社及び木更津八幡社條を參考すべし。▲房總游乘。御浦觀音岬、與ニ上總富津ニ相對。有ニ走水神社。祀ニ日本武尊。新編相模風土記、三浦志。尊自ニ東海ニ進抵レ此、將レ往ニ上總。望ニ海揚言曰、是小海耳。可ニ跳而超。中流暴風忽起、舟漂危急。妃橘媛以レ身贖之、乃得レ着岸。因號ニ其海ニ曰ニ走水。日本紀。其著レ岸處曰ニ木更津。屬望陀郡。有ニ吾妻神社。乃祀ニ橘姫ニ云。房總志料。尊已平ニ蝦夷、西速ニ于碓日嶺。顧ニ念橘媛、東南望ニ歎曰、吾孀者耶。故稱ニ山東諸國、曰ニ吾孀國。日本武藏有ニ橘樹郡。延喜式○按、其語口村有ニ橘神社。即祀ニ橘姫ニ云。當時建爲ニ御名代、以錄ニ其功ニ也。史不レ載、蓋闕文也。

○鐵尊社

天羽郡金谷村に在す。鐵鏡を以て神體となす。▲上總町村誌四鐵尊祠、天羽郡金谷村ノ氏神金谷神社ノ背後ニ在リ。巖窟ヲ鑿チ、古圓鏡ヲ安置ス。徑一丈五尺餘、厚四寸餘、中央ヨリ破レテ二片ト爲ル。相傳フ、文明元年六

月、海中五町許ニ光ヲ放ツ。又、颶風起リ砂石ヲ飛散スルコト六晝夜。里人等本社ニ參籠シ、其ノ靜穩ヲ祈ル。風止ム。其ノ光リシ處ニ到レバ、海底ニ大鏡ノ沈没セルヲ見ル。重量ニシテ揚動ス可ラス。復、本社ニ祈ル。其ノ夜、忽チ破斷シテ兩片トナル。遂ニ採揚セリト。初メ、日本武尊東征ノ時、船艦ニ懸ケサセ給ヒシ大鏡ナリト。之ヲ崇メ祀リテ鐵尊權現ト稱シ、日本武尊ヲ配祀ス。今、ソノ址ヲ釜ヶ淵ト云フ。其ノ質極メテ古ク、中代以下ノ物ニ非ルガ如シ。▲南總郡郷考上天羽郡金谷村ニ鐵尊大明神ノ祠アリ。殿内ニ鐵鏡アリテ、厚八寸、圍七尺五寸ト云ヘリ。▲房總志料一天羽郡金谷に、釜神の祠あり。殿内に大なる鐵の蓋あり。厚八寸、圍七尺五寸、海龍王厨下のも也と。▲房總一覽志五金谷に至る。此所に金谷明神の祠あり。祠後に大なる釜の蓋有り。徑六尺許、二つにわれたり。一の方は少し小さく、片方は大きくして厚し。明神の別當に尋ぬるに、周り一丈八尺、厚六寸なり。文明己丑七月朔日、早朝よりして海の氣色常に異り、浪高きこと山の如く、嵐も強くして、人通ふこと絶えたり。廿日程過ぎ、從レ汀ニ二丁許去りて物飛び出づ。廿二日明方に磯に上る。此の時、金谷村家數十六軒と云ふ。且、土民、釜の蓋に向ひて祈念し、何卒二つにわれなば神に祭りて差上げんと云ふ。其のふた一夜の内に二つに成りしといふ。圖を載せられたる、今省きつ。▲下總舊事考二日本紀景行ニ、日本武尊則從ニ上總ニ轉入ニ陸奥。時大鏡懸ニ於王船、從ニ海路ニ至ニ蝦夷境。云々。大鏡ハ、今現ニ上總天羽郡金谷村ニ、釜明神トテ、岩屋ノ内ニ鐵ニテ作レル釜ノ蓋ト云フモノアリ。周圍一丈八尺、厚六寸許。中間裂ケテ兩片ト爲ルト。或云、日本武尊ノ御物ナルベシ。上古ハ船ニ鐵鏡ヲカケ、魚龍ヲオドセシト云フ。猶ヨク考フベシ。▲房總游乘。金谷村有ニ鐵尊權現。穿ニ巖腹ニ擬レ社、以ニ鐵鏡ニ爲レ神。徑一丈五尺、厚六寸。破爲ニ兩片。房總一覽志傳言、文明元年六月、海中有レ光。忽而颶母逞レ威、簸ニ揚砂石。凡六晝夜

而止。村民見其放光處、果有古鐵鏡。乃奉而祀之。上總町村誌、房總一覽志。按、武尊東征、掛大鏡節船。日本龍畏避者。是、或當年物耶。日本武尊東征事蹟考。 藍使魚

上總國神社志料(終)

安房國神社志料

【解説】本書は、前掲「上總國神社志料」と同じく、都岡良弼が安房の安房坐・后神天比理乃咩・天神・莫越山・下立松原・高家(以上式社)那古八幡・手力雄・池田八幡・岡本八幡・山宮・年宮・八坂・天津神明・諏訪・平郡天神の各社につき考證せるもので、安房忌部家系・齋部宿禰本系帳を挿入してある。(稻葉)

千早ぶる神の宮居を技折すとかき集めたるこれの玉藻ぞ 畏かれ杼母

○安房坐神社

叢書第十卷の延喜式抄参照

叢書第十卷古語拾遺抄参照

安房郡大神宮村に在りて、官幣大社たり。▲延喜式帳神名安房國安房郡安房坐神社大神大、月次新嘗。▲同臨時安房神社安房座別座別繩五尺、綿一屯、絲一絢、五色薄繩各一尺、木綿二兩、麻五兩、裏料薦廿枚。若有大禱者、加繩五丈一尺、以布一端代絲一絢。▲同式部安房國安房郡爲神郡。▲新抄格勅符大同元安房神、封九十四戶在安房國。▲續日本後紀五承和三年七月甲申、安房國無位安房大神奉授從五位下。▲同十同九年十月壬戌、奉授安房國從五位下安房大神正五位下。▲同十同十四年七月壬申、加安房國大神并從祭神正稅穀一百斛。本書、大神を火神に誤恐らくは安房の二字を脱せり。▲文德實錄四仁壽二年八月丙辰、安房國安房神特加從三位。▲三代實錄二貞觀元年正月廿七日甲申、奉授安房國從三位勳八等安房神正三位。▲古語拾遺。高皇產神之男、名曰天太玉命。中略神武天皇之時、令其孫天富命遣阿波國、殖穀麻種。天富命更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀。好麻所生、故謂之

之總國、穀木所生、故謂之結城郡。古語麻謂之總也。今爲阿波忌部所居、便名安房郡。是也。今安房國 天富命即於其地、立太玉命社。今謂之安房社。故、其神戶有齋部氏。神代系圖徵 高皇產靈神——天太玉命——天神立命——天富命太玉命之孫、忌部首祖也。 ▲神名帳頭註。安房安房郡安房坐神、舊事紀云、復天富命於安房國、立太玉命社。謂安房社也。▲一宮記。安房神社號洲崎大明神。安房國安房郡。 ○按に、號洲崎大明神。▲安房社由緒書。安房國安房郡吾谷山鎮座。▲安房坐神社所謂吾谷山者、神代以來靈地也。且、當宮本座天太玉者、陪從皇孫瓊々杵尊、而鎮坐神宮。是以山則號大宮山、川則稱宮川、村則呼大神宮村。

上宮 本座天太玉命神像香木座像坐。神鏡一面、裏形口傳。 相殿天比理乃咩命神像女體坐。是則太玉命 同齋部五部神神體未詳。寬永年間、當社神主種義得二傳。曰、所命、櫛磐窓命、以上五神是也。

下宮 本座天忍日命神像金銅座像坐、奉號御弟大明神也。 併祭天富命爲三相殿。蓋以國造之故也。

五神宮或稱客神社。延喜式神名帳、安房國六座合祭者也。所謂六座、安房郡二座、安房坐神社、即上宮也。后神天比理乃咩命神社。朝夷郡四座、天神社、莫越山神社。下立松原神社。高家神社也。右件社神名者神主唯授一人之口傳也。

末社 山王 稻荷 天王 子安大明神 嚴嶋大明神里俗呼辨天。 ▲安房忌部家系下立松原祠官高山出雲所傳 爾由布津主命、調貢彼麻穀而、隨在之審復命給矣。于時天止美命、大賞其勳功給而、吾亦欲將視其國云而、當到給、視行國形而告云、此國者小國也。雖然、國雅美而可憐國也。吾於此國而、祖神之靈將拜祭云而、定安房郡於宮地、經營奉瑞正殿矣。然後、天布止玉神之自天持降

給之、以瑞八坂珠、爲稜威御靈實、令鎮座、奉稱安房大神矣。又、眞澄鏡劍矛楯弓矢、及、雜々神寶凡二十餘品於神座內奉齋鎮給。是同大神之自天持降之靈物也。然後、天止美命御子以飯長姬命爲御手代、令崇敬解祭給、如天上行事也矣。▲金丸家系。金丸川末流巴川南在大神宮。中郷字宮谷鎮座。安房坐大神宮大社、神武天皇勅祭天太玉命。安房大社二座是也。稱字宮谷於本殿、女良崎明神於日前殿。女良崎、則大神宮下郷云。後、女良崎前殿合祭於天富命郷と曰ふ由、上文にあり。▲神社叢書三安房坐神社大神大、月祭神天太玉命宮 記頭 大神宮村に在す。地名 當國一宮也。一宮 當代御朱印高三十石四斗。連胤按ずるに、一宮記號洲崎明神といへり。是に依て古事記傳にも、今、洲崎明神と申すと云へる、共に謬也。洲崎明神とは后神を稱するにて、則、房總志に、洲崎明神は后神天比理乃咩命也と云へるぞ正しき。▲高橋氏文本朝月 大足彦忍代別天皇行五十二年癸亥冬十月、車駕到于上總國安房浮嶋宮。略是時、安房大神乎御食都止坐奉天、爲若湯坐連等始祖意富實布連之子豐日連乎令火鑽天、此乎忌火止爲天伊波比由麻々閉天供御食、並、大八洲爾像天八乎止古・八乎止咩定天、神嘗大嘗等仁供奉始支。但、云安房大神爲御食津神者、今、大膳職祭神。▲高橋氏文考注伴信 安房大神爲御食津神者、今、大膳職祭神也。この安房大神は、天祖天照大神、高皇產靈尊相語曰、夫葦原瑞穗國者、吾子孫可王之地也。皇孫就而治焉。略因敕曰、汝天兒屋命・太玉命二神、共侍殿內、能爲護衛、宜以吾高天原御所齋庭之穗、是稻也亦當御於吾兒上矣。宜太玉命率諸部神、供奉其職一如天上儀。と見えたり。此の古實によりて、安房社大神玉命を御食津神と爲て、件の神勅を信行ひ給へるなり。今、大膳職祭神也と注る、今とは此の氏文を記せる時の言なり。三代實錄に、貞觀元年正月廿七日、大膳職正四位上御食津神授從三位。て上に擧げたるが如し。神

名帳に、大膳職坐神三坐並小の中に、御食津神社いま二神は火雷神とある是なり。大膳式に、御膳神八座二月十一月上酉日祭之と見えたるは、件の帳に載せられたる御食津神を本神として、他に御膳に由ある神七座を合せて、八座祀られたるなるべし。かく思へば、此の氏文に安房大神乎御食津神止坐奉而云々。並大八洲爾像天、八乎止古・八乎止咩定天云々といへるは、當時大八洲に像りて、安房大神を本神として、八神を坐せて、一神に男女一人づつを定めて仕へ奉らせ給へるを、事そきて、語り傳へたりしにもやあらむ。

▲寺社分限帳。高三拾石餘安房郡正一位大神宮領。▲御朱印寺社領帳。高三拾石四斗餘安房郡大神宮村岡嶋大藏。▲房陽郡郷考。高三十石四斗二升神宮村安房郡大神宮領。▲本社古文書現存十二御寄進ノ内、大ねぎ分。

岡嶋大藏は神主か

四田た四田一田とあるは四段一段なり。下澤西ざは、井、御へい田、一田。萩谷、小田、四百五十代、井、五十代、ひわか谷、同島一まい、小塚に一まい。平ぐり谷一まい。

天文四年未拾二月十三日 源義堯 花押

同。九十八ヶ所九十八ヶ所と云へるは、里見氏より領地を附せし神社佛寺の數と見ゆ。之内。房州山下郡大神宮村之内拾九石四斗貳升、同郡瀧口村之内拾壹石、高合三拾石四斗貳升、社領被遺候由、我々所へ、從御奉行所、御書出一冊に候間、右之通、從甲寅歲甲寅は慶長十九年可有有所務者也。仍如件。

元和二年辰九月廿五日 中村彌右衛門尉吉繁 花押

一宮正一位大明神

○按に、嘉吉中、山下定兼その主神餘景貞を弑して篡立し、私に安房郷を改めて山下郡と稱せり。寛永中、舊名に復す。

同。安房國安房郡正一位大神宮領、大神宮村之内拾九石四斗餘、瀧口村之内拾壹石、合三拾石四斗餘事、如先規

吉繁は徳川氏の代官

義堯は里見氏

令寄附之訖。全社納永不可有相違者也。仍如件。

寛永十三年十一月九日。 朱印(徳川家光)

▲里見忠義分限帳慶長十五年五百拾九石四斗貳升、大神宮村。内拾九石四斗貳升、大神宮明神領三拾石九百七拾六石七斗壹升九合、瀧口村。内拾壹石、大神宮明神領。▲大日本史神祇安房坐神社今在大祀天太玉命古語配享天比理乃咩命・天日鷲命安房神社由緒書○金丸家系云、本社古者有二殿。本殿在宮谷。祀天太玉命。太祖即位、太玉孫天富命率阿波忌部、巡行東土、殖穀麻。建社此地、以祀焉。謂之安房社。古語以其女飯長姫命爲齋主、由布津主命爲司。由布津主天日鷲命之孫、娶飯長姫、生堅田主命。是爲本國忌部之祖。子孫世爲本社祝部。安房社景行帝東巡、御本國浮島宮。時、磐鹿六獲命奉御膳。以安房大神爲御食神、即是也。本朝月令引大年、先是以本郡爲神郡。神郡據又充封九十四戶。至此加新抄格十戶。承和三年、叙從五位下。九年、加正五位下。十四年、加充大神及從祀神正稅一百斛。後紀仁壽二年、特加從三位。實錄貞觀元年、以勳八等進正三位。實錄延喜制列名神大社、預四度官幣。置神郡仍舊。式後稱本國一宮。記▲神祇志料三安房坐神社、今、安房郡大神宮村に在り。一宮巡詣記、安房大神と云ふ。續日本後紀、高皇產靈神の子天太玉命を祭る。拾遺安房の一宮也。記上古、太玉命、阿波・讃岐・紀伊・筑紫・伊勢等の忌部祖神、及、諸部神を率ゐて、神幣を造り、天祖に供へ奉りて、大功を著し給ひき。古語拾遺、日本書紀、古事記大要神武天皇の御世、その孫天富命、阿波忌部を分ちて麻穀を播殖せしめ、阿波より此の地に來りて太玉命の社を建つ。後、之を安房社と云ふ。即ち是也。古語景行天皇、上總國安房浮嶋宮に行幸せる時、磐鹿六獲命この神を御食都神と坐奉りて、大御食仕へ奉り

き。本朝平城天皇大同元年、是より先、神封凡九十四戸。是に至りて十戸を加へ奉り、新抄格 仁明天皇承和三年七月甲申、無位安房大神に從五位下を授け、九年十月壬戌、正五位下を賜ひ、十四年七月壬申、安房大神及び從祭神に正税一百斛を加へ奉り、續日本後紀○按に從神詳ならず。一宮巡詣記云、本社に御弟明神あり。其の相殿に洲崎神也と云へり。之に據るに、從祭神、蓋后神已下五座を云ふに似たり。姑く附して考に備ふ。文德天皇仁壽二年八月丙申、特に從三位を加へ、實錄 清和天皇貞觀元年正月甲申、勳八等安房神に正三位を授け、三代實錄○按に、勳八等に叙せし年月考ふる所なし。醍醐天皇延喜の制、名神大社に列り、祈年月次新嘗の案上祭幣に預る。凡、安房郡を以て神郡とするもの、蓋この神を尊ぶなり。延喜式 其の祭、正月十五日朔占、五月廿七日早苗振、六月晦大祓、七月十日濱出、九月廿八日濱下、十一月新嘗、同月廿六日神狩神事と云ふ。安房神社由 ▲大日本國誌安房 安房神社、安房郡大神宮村字宮谷ニ在リ。境内九百六十九坪。神武天皇ノ時、天富命之ヲ建テ、其ノ父太玉命ヲ祀ル所ナリ。延喜ノ頃ハ名神大社タリ。古語拾遺 明治四年五月、官幣大社ニ列セラル。祭日ハ九月十日、氏子ハ三百廿二戸ナリ。按ニ、當社ノ創建ハ古語拾遺ニ詳ナリ。曰ク、天富命至阿波二種穀麻、更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀。好麻所生、故謂之總國。略阿波忌部所居、便名安房郡。天富命即於其地、立太玉命社。安房坐神 社是也。ト。其ノ後、景行天皇、上總國安房浮島宮ニ到リ給ヒシ時、磐鹿六鴈命、堅魚・白蛤ヲ得テ太后ニ獻ズ。是時、當社大神ヲ御食都神ト爲シ給フ。年中行 延喜式ニ、御膳神八座トイヘル其ノ一座ハ必ズ當社大神ナラン。古史 又、延喜式祈年祭神大四百九十二座中、奠幣案上神三百四座ノ内ナル安房國一座トアルモ、亦コノ大神ナラン。其ノ神位、承和三年七月、始テ從五位下ヲ授ケラレ、貞觀元年正月正三位ニ累進シ給フ。正史○寬喜元年己丑十一月十日、源賴經、去四月雷電ニ依リ、近國ノ一宮ニ奉幣使ヲ立テ、駿河前司義村ヲシテ本州一宮ニ參向セシメシコト、東鑑ニ見ユ。其ノ社領ハ、承和十四

叢書八卷
房總游乘
參照

年七月正税穀一百斛ヲ加ヘラル。續日本 里見氏ノ時、社領三十石四斗二升ヲ寄セ、舊幕府ノ時、之ニ仍ル。▲房總游乘。距洲宮半里、得大神宮村。古稱神戶郷。和名 即安房神社在焉。延喜式 古世稱本州一宮。一宮今爲官幣大社。太政官 振董久之。是祀天太玉命、配享天比理乃咩命・天日鷲命也。安房社 神武帝、詔太玉孫天富命、率阿波忌部、來東土殖穀麻。建社此地而祀之、號曰安房社。古語 拾遺以其女飯長姬爲齋主、日鷲孫由布津主命爲司。由布津主娶飯長姬、生堅田主命。是爲本州忌部之祖。子孫世掌祀事。安房社由緒書 安房行帝東巡、御浮島行宮。時以此神爲御食神。高橋氏文 後奉全郡爲神田、稱曰神郡。令義 大同中、更充封一百四戸。新抄格 承和中、加充正税一百斛。續日本 猗歟盛矣。史稱、天富之開疆宇也、厥土宜麻之謂總國、宜穀之謂結城郡。穀、木棉也。阿波忌部所居之謂安房郡。古語 尋置十一國造管之。舊事紀 古事記○所謂阿波、長狹、須惠、下海上、千葉是也。大化改新廢之、置國司、定爲上下一總。日本紀 養老二年割上總四郡、建安房國。天平中并上總、寶字元年仍舊分立。續日本紀 是、三州因革之略也。三州自古稱豐腴。雖土性使之然、微天富命、豈能如レ此哉。予命兒曰美麻字穀城、竊記神德也。

○安房忌部家系 安房神社祠官 岡嶋氏所傳

天富命

於畝火之白檮原宮、所知看初國、天皇之大御世、天富命命之子分、粟忌部於東地、而令作麻穀矣。亦立天太玉命之神籬、而以飯長姬命天富命 爲齋主、以由布津主命爲諸司、命拜祭相副矣。是則、安房大神也。

安房國神社志料

飯長姫命

由布津主命

訶多多主命

伊那佐可雄

天日鷲命之孫。由布津主命亦稱阿八和氣比古。天富命之女名飯長姫命御合而生堅田主命。是即安房忌部之始祖也。

沙喜久和氣

夫由良和氣

比比多佐

正美美大人

伊波毘古

志麻名市

武良比

宇氣意

伊津毘古

久豆美

波志主

多氣毘古

見都万侶

由岐万侶

大佐和氣

名美鷹

久米鷹

勝鷹

勝義

於寧樂宮御宇天皇養老元年春三月、奏朝廷而隨先規神籬磐境悉造營之、鎮座安房大神者、即天太玉命也。更修造天忍日命之社。相傳云、於志賀高穴穗宮御宇天皇之御世、安房國造大伴直大龍之齋所也。仍名稱國造社。今茲合祭天富命矣。又所謂勝義者神祇大副忌部宿禰色淵之子也。從幼稚時被養於勝鷹、依以繼其家而奉齋拜侍矣。天平寶字四年夏五月卒。

道義 天平勝寶六年卒。

義長 弘仁五年卒。

定義 天長八年卒。

恒義

仁明天皇承和三年七月、以勅許无位安房大神奉授從五位下。依之、神領之圭田八町也。同九年十月奉授正五位下、神領加以以前四町而則圭田拾二町也。于時貞觀十八年夏六月卒。

冬鷹

茂義

文德天皇仁壽二年八月奉授從三位。神領以前倍而則圭田三十四町、封戶百戶也。清和天皇貞觀元年正月奉授正三位。神領加以增以前而則圭田四十町、封戶百三十戶也。于時元慶三年秋七月卒。

久義

承平二年 義遠 康保二年

方義

天慶元年 義重

長德四年 義秋

長元元年 義光

長久元年 義廉

義周

康和元年 義正 永久二年

忠陣

義元 承安三年

景義

承安元年 清義

義武

治承四年、源賴朝公于當國下着。九月四日依爲安西三郎景益一族而、共于御旅亭參上而、奉

謁武衛。則以嚴命、源家開運之御祈禱被仰付。仍而、一七日之間、於社頭參籠而、奉抽丹誠矣。依之、本領安堵之御下文給。翌日、武衛御參詣有之。則於寶前擬誠心給旨者、祈禱一々令圓滿者、猶又可奉寄功田輝神威之趣也。其後、於北條鄉奉寄附神田八町於當社。九月十二日、即御寄進狀ヲ給畢。壽永元年八月十一日、三浦三十郎義連爲御使者而被奉御幣於當社之寶前。是則、御臺所安産爲御祈願也云。于時元曆元年夏六月卒。

義當

文治二年五月、倚安房判官代高重而訴社頭大破之由於鎌倉之處、即、造營之旨被仰付。尤守先例之規矩、可爲叮嚀之由、御賢慮也。則、筑後權守俊兼爲御奉行、如舊來、本社廣四尋、狹三尋、瑞垣拜殿其餘悉修造給訖。以來於大破者、爲在廳等之沙汰可奉造營之由有嚴命。依之、神威益昌。然、建久六年五月、當社之神領於上總國千田庄、在廳官人等謾濫妨神稅之間、倚安西太郎景明、訴于鎌倉之處、可早停止之由、以周西次郎助忠、被御下知給訖。于時寶治元年三月卒。

壽義

寬喜元年十一月、以駿河前司義村爲御使者、被奉御幣及御神馬等於當社。是則爲國家安全御祈願也。云々。于時正嘉元年八月卒。

義角

建長四年四月、被舉幣與神馬於當社寶前也。弘安四年爲蒙古退治、依勅願而預官幣矣。亦奉授勳一等於當社之大神矣。于時文保二年春三月卒。

嘉曆三年	延義	康永元年	義佐	應永十年	義安	正長七年	義近	文安五年	義信

康永二年、依神宣而、合祭下之宮於本宮而、齋拜侍矣。文和元年卒。

義樹

文安二年、足利刑部少輔源義實入國之砌、猛威頗光。然而慢蔑如神靈、加之、破滅右大將家先例而至神領封戶恣押領之、震大魔之威力於房總矣。於是、義樹情惟、神武天皇御宇當社草創以降、經世四十九代、未曾如此例聞。嗟呼逢此亂哉。不知天命於我如是耶云、伏地而頰咽淚矣。于時文正元年春三月卒。

案義 明應五年

義里

明應八年六月、天下偏大地震、吾谷此云阿豆智山破裂而、宮殿悉覆倒。又謂古今未曾有之大變也。於是、當國領主里見刑部大輔源義成、天性勇威而方務攻伐、日夜于戰場碎膽肝矣。故、屢雖事由緣於白濱城訴、輒不逮于其沙汰而、虛經星月矣。今茲文龜三年、依于前在廳安西氏之吹舉、而漸雖及造營、減省先例之規矩而、只本殿瑞垣而已。嗟已矣。我社頭示古者只礎石耳。何爲其然也。落淚連綿而不知所止矣。于時永正九年夏六月卒。

實義

大永元年、里見上總介源爲堯、爲御供料米五石奉納、及例年也。天文五年、世上漸靜謐也。於是實義寄事而訴以往古之委細矣。當領主里見左馬頭義弘、大恐神慮給、即、社頭之大破壞、

悉修_二造之_一。且、以前之神領沒收之内、割_二十分一_一而奉_二寄附_一。式日之奉幣、敢無_二怠給_一。尤至_二信敬_一也。熟願_二汝暗也_一。而一旦雖_二神威隱給_一、暗々明君、事以_二誠、崇以_二禮_一。則豈其不_レ歆_二神之爲_レ靈昭々_一乎也。嗚呼宜哉。神者依_二人之敬_一増_レ威、人者依_二神之德_一添_レ運者、當主之繁榮灼然。于_レ時天文七年春正月卒。

義之

天文九年、天下大疫、當國之人民又悉病。或夜夢中白髮老翁。云 天正七年夏四月卒。

義房

天正十三年春三月、朝霧朦朧而、云 天正十八年、太閤秀吉、上總國御檢地之砌、以_二淺野彈正少弼長政_一、令_二御奉行_一也。依_レ之、千田庄者、從_二往古_一安房國一之官爲_二神領_一之由縁、訴雖_レ速_二再三_一、更無_二免許_一、而遂被_二沒收_一。於_レ眼前被_二御繩入_一訖。嗚呼悲哉。此時雖_レ徹_二殘念骨髓_一、流_二于權威_一難_レ敵、徒拱_二手而待_二天命_一耳。于_レ時慶長六年三月卒。

種義

慶長四年、詣_二于京師_一。則依_二神祇管領家之吹舉_一而被_レ免_二許參内_一矣。仍_レ之、賜_二位記宣旨_一、叙_二從五位下_一。云 元和元年九月、里見家源忠義 御斷滅之已後、所_レ殘之神領、奈_二何安否_一難_レ定。仍_レ之、恐怖甚大而、殆如_レ履_二薄氷_一。然所、同二年九月十五日、中村彈右衛門尉吉繁、當國爲_二御改_一入來也。則訴_二以前之由縁_一。仍_レ之、神領安堵之御墨附給。種義開_二喜悅眉_一、再拜而受_二領之_一。寛永十一年春三月二日卒。

直之神餘村娶伊介六右衛門女而生三男。

○右家系は本社の沿革を徴するに、いと好き材料なれば、こゝに全文を寫し出しつるなり。

○附考。神名式に、大和高市郡太玉命神社大、月次新嘗。今、その忌部村あり。これ其の本ツ社なるべし。また、式に下野國寒川郡阿房神社あり。今、粟宮村に坐して粟宮大明神と稱へ、天太玉命を祀れりとぞ。其の地、下總結城郡と隣れ、ば、太古安房忌部の結城に居し者、その祖廟を建てられしなるべし。又、程近き武藏埼玉郡太田莊に鷲宮あり。江戸府の時、社領五百石を寄す。寺社分限帳を検するに、下總の結城・猿島二郡の間に、鷲宮凡そ五所を載す。其の他、神領なきものは、數ふるに遑あらず。皆、天日鷲命を祀れるにて、由布都主命の裔孫の此の間に繁衍せしことを知るべし。

▲房總游乘。富山在平群郡高屹然可仰。嶺有_二觀音堂_一。老樹陰森、海船往來、指以爲_レ標。房陽郡郷考、富山古稱_二天富山_一。即天富命龜夢之所。成務帝時、其裔久豆美遷_二神靈於安房社相殿_一。安房齋部 洲宮慶長二年文書帳寫に、此郡平久里村内、高三石、富山觀音免とあり。按に、天富命の墳墓に就て、房總志料に、富山、本州の高山にて、山上に觀音堂ありと。是なり。▲房總志料ニ長狹郡清澄寺號三千は、寺領二百石を有す。神武帝の時、天富命を崇めし靈場なりと、其の寺の縁起に見ゆ。光仁帝寶龜二年草創といへるは、此の頃より虚空藏菩薩を置きしと見えたり。▲大日本國誌中安房 清澄寺、清澄村字妙見山ニ在リ。境内一萬八千三百三十九坪。寺傳云、神武天皇ノ御宇天富命ヲ祀ル。本堂ノ徽章三玉ヲ用フル寶龜二年、不思議法師、虚空藏菩薩ノ像ヲ安ズ。略古來安房・上總二國ノ氏寺ト稱ハ之ガ爲ナリト云フ。

叢書六卷
房總志料
參照

シ、門前民家百戸許、皆神符ヲ二國ニ分賦シテ産業ト爲スト。▲房總游乘。清澄寺、初爲天富命廟。按、北有山名所居。西有富山。即天富之墳。可知。天富館于此。寶龜中、不思議法師配以虚空藏佛、漸成梵刹。本寺緣起、自本迹習合之説起、儼然神蹤、不爲其所讀者幾希。書以寄一慨。

○后神天比理乃咩神社

按に、本社二殿あり。拜殿を一宮と云ひ、安房郡洲崎村御手洗山に在り。奥殿を二宮といひ、同郡洲宮村魚尾山に在り。共に洲神と稱す。二殿にして一社號なり。今、並に縣社に列す。但、洲崎を以て、定めて式内所載の社となすと云ふ。故に今別に洲宮の條を立てたり。

▲延喜式神名 安房郡后神天比理乃咩神社。大、元名 續日本後紀二十承和九年十月壬戌、奉授安房國无位安房大神第一后神天比理乃咩命神從五位下。▲文德實錄 仁壽二年八月丙辰、安房國大比理乃咩命神特加從三位。▲三代實錄 貞觀元年正月廿七日甲申、授安房國從三位勳八等天比乃理乃咩命神正三位。▲安房忌部家系下立松原此

大比理と
天比乃理と
共に誤

時、大刀自天比理乃咩神、著飯長姫命フシ、白波來寄於可ウマシ、可爲吾宮地告之矣。故、天止美命祖神之隨、見立神社而令鎮座、使飯長姫命並奉齋給矣。故、奉稱洲神、亦稱洲宮。所以洲崎坐也。亦、安房大神與此神、每秋並備御舟而、於海原爲神遊給矣。故、其御舟往會地名相濱矣。▲洲崎神社由緒書。洲崎神社、安房郡洲崎村御手洗山鎮座。祭神天比理乃咩命。相殿天太玉命、天富命。▲神社叢書 二十后神天比理乃咩命神社大、元名 后神は岐佐岐賀美と訓むべし。祭神明かなり。安房郡洲之宮村に在す。地名 今、二宮洲崎明神と

叢書十卷
吾妻鏡抄
參照

稱す。當代御朱印高七石。○按に、洲崎神明は、東鑑一治承四年九月五日甲寅、武衛有御參洲崎明神。寶前擬丹祈給。所遣召之健士、悉令歸往者、可奉寄功田、責神威上由、被奉御願書。云 同九月十二日辛酉、令奉寄神田於洲崎宮給。御寄進狀、今日被送進社頭。云 同二治承五年二月十日丁亥、於安房國洲崎神領、在廳等成煩由、有神主等之訴。仍可停止之由、今日所令下知給也。下須宮、神官等、

可早令安房國須宮免除萬雜公事。

右件宮萬雜公事者、先日御奉免畢。重神官等訴申事實者、尤不敵也。早可令免除之狀、如件。仍在廳等、宜承知。勿違失。

治承五年二月 日

▲同二治承六年八月十一日己酉、御臺所有御產氣。武衛渡御。云 爲御祈禱、被立奉幣御使於伊豆菅根兩所權現近國宮社。所謂、伊豆山土肥彌 菅根佐野 相模大山梶原 三浦十二天佐原 武藏六所宮葛西 常陸鹿嶋小栗 上總一宮小權 下總香取社千葉小 安房東條平六 同國洲崎社安西 ▲扶桑見聞私記 五治承四年八月廿九日、武衛令著安房國平群郡獵島。云 其夜、當國洲崎明神ノ御寶前ニテ御念誦有リテ、「源ハ同ジナガレゾ石清水セキアゲテタベ雲ノ上マデ」此ノ明神ハ八幡大菩薩ヲ奉レ祝。鈴鹿連胤曰、當社は八幡宮を祝ひ祭るにみ給へるを思へば、所謂の時勢に従ひて斯くは沙汰し。房總志料 二洲崎明神は、后神天比理乃咩命をまつれり。延喜式に於て、房總志料にも説あり。下に引くべし。▲房總志料 二洲崎明神は、后神天比理乃咩命をまつれり。延喜式に見ゆ。頼朝卿洲崎明神にて詠ませ給ふ歌に、「源は同じ流れぞ岩清水せきあげてたべ雲の上まで」此の歌、源平

盛衰記に見ゆ。然れども、歌の意に據るに洲崎にての歌とは不見。鏡浦の八幡にて詠み給ひし様なり。良弼曰、鏡浦八幡は、國華萬葉記に御朱印二百七十石、那古八幡宮領、別當那古寺とある是なり。其の地今は八幡村と云ふ。義經記には瀧口明神に於ての歌とせり。▲同。義經記に、頼朝安房國洲崎といふ所に、御舟をばせあげ、其の夜は、たきぐちの大明神に御通宵ありて、夜とともに、きせいをぞ申されけるに、明神一首を示し給ふ。「源は同じ流れぞ岩清水たゞせき上げよ雲の上まで」佐殿再三拜し奉り、「源は同じ流れぞ岩清水せきあげてたゞ雲の上まで」とあり。按ずるに、瀧口明神或は小高明神と云ふ。は安房郡瀧口村に建つ。村は七浦に近し。洲崎を距ること三里許、この説恐らくは非なり。▲同。洲崎明神の社領、鎌倉の頃には、まさき正木村といふ所まで十二箇村一千町、寄附の地たりと。今は微に五石の神領を存す。▲寺社分限帳。高五石、安房國洲崎明神領。▲房陽郡郷考。御朱印高五石、安房郡洲崎一宮明神。▲里見忠義分限帳慶長十五年。百三十拾石、山下郡洲崎村。内五石、洲崎明神領。▲洲崎神社文書。九十八ヶ所之内。

房州山下郡洲崎村之内高五石、御社領被遺候由、我等所へ、從御奉行所、御書出一冊に御座候間、從甲寅年、可有御所務者也。仍如件。

元和貳年辰九月十五日

洲崎大明神

中村彌右衛門尉吉繁花押

安房國洲崎大明神領、安房郡洲崎村之内五石如先規令寄附之畢。社納彌不可有相違者也。仍如件。

寛永十三年十一月九日 朱印(徳川家光)

▲永享記。文明年中、太田道灌、江戸城にも河越の如く、仙波の山王を城の鎮守に崇め、三芳野天神を平河へ移し給ふ。文明十年六月五日、日河社に視へ、津久土明神を崇め、又、神田の牛頭天王・洲崎大明神は、安房洲崎明神と一體にて、武州神奈川・品川・江戸、何れも此の神を祝ひ奉る。此の事、寛明事蹟集、新安手簡にも見ゆ。
○附考。千葉日記葛師郡中山寺の條。さて安房洲社に詣づ。鳥居の前に、安房守大明神とありたる石たちて、里見某が合戦にうち負けて、此にて腹きりてけるを祀れりといへるは、信られず。おもふに、安房國洲の崎にたゞせ給ふ天比理乃咩命を遷し祀りしなるべし。神名式にも、元名洲神と注したり。本ツ社の國の名を冠て、安房之洲之神と稱へ奉るべき事ぞ。葛西の青戸につゞきて淡野須村といふあり。此の神のたゞせ給へるよりの名にや。猶考ふべし。また太田道灌が江戸城をきづきし時、安房の洲崎の神を移し祭りて神田明神とたゞへたりと、永享記に見えたり。猶あるべし。

▲大日本史神祇志。后神天比理乃咩命神社、初曰洲神。○按、天一作大、乃作刀。東鑑作須宮、或、洲崎社。按、金丸宮、在洲宮村魚尾山。一殿。祀天太玉命妃天比理乃咩命。古語拾遺、延喜式、配祭天太玉命。按、二書、配享神又有三座。故今不取。承和九年、叙從五位下。續日本紀、仁壽二年、超授從三位。貞觀元年、以勳八等進正三位。實錄延喜制列大社。式、源頼朝尤崇敬斯神、舉事之初、奉神田、以祈武士來屬。尋以社司訴、命在廳官、免神地課役。後復遣人奉幣。鑑、神祇志料三后神天比理乃咩命神社。○按、文德實錄天を大に、三代實錄比理を比乃本後紀に從ひ、元名洲神と云ふ。洲崎神に作る。後世須宮、或は洲崎明神とも申す。鑑、今、洲崎村二宮即是也。名帳考證、房總志。蓋、天太玉命第一后神天比理乃咩命を祀る。續日本後紀、延喜式。○按、一説に本郡洲宮村に后神天比理乃咩命神社あり。之を式社とす。洲崎村は即ち其の分社な

り。洲宮村の神社に建長三年以來の文書三通を藏む。文中洲ノ宮の語あるもの證とすべきに似たり。然れども、謄書また洲ノ宮村の神社を式社と云へるものを見ず。姑く附して後考に備ふ。仁明天皇承和九年十月無位より從五位下を授け、續日本後紀 文德天皇仁壽二年八月從三位を加へ、文德實錄 清和天皇貞觀元年五月勳八等より正三位に至り、三代實錄 醍醐天皇延喜の制、大社に列る。延喜式 高倉天皇治承四年九月、源賴朝本社に詣でて事を祈り、神田寄附の文を奉り、明年二月、神官等の訴あるを以て、在廳官神領の妨をなす事を停めしむ。東鑑 後村上天皇正平元年六月、使を遣して社司に中祓を科す。神崇あるを以てなり。宮主秘事口傳 ▲大日本國誌中安房 洲崎神社、安房郡洲崎村ノ海岸、字御手洗山ニ在リ。境内四百四坪。社傳云、神武天皇ノ時、天富命ノ母太玉命ノ妃天比理乃咩命ヲ祭ルト。延喜ノ頃、大社タリ。明治六年五月、縣社ニ列セラル。祭日八月廿一日、氏子六十一戸ナリ。中古以來、別當吉祥院ノ所轄タリ。今縁起二部ヲ舊里正縮鍋氏ニ傳フ。今按ニ、天比理乃咩命神社延喜式注シテテト稱スル者ニアリ。一ハ當社ニシテ、一ハ洲宮村ニ在リ。明治六年四月、當社ヲ以テ延喜式ノ大社ト定ム。教部省達 神階ハに詳なれば省く。源賴朝深ク洲崎社ヲ信ジ、治承四年九月、當社ニ參拜シテ、丹誠ヲ凝シ、願書ヲ納メテ曰ク、召ニ遣スノ健士悉ク歸往セシメバ、功田ヲ寄セ神威ヲ賁ルベシト。遂ニ神田ヲ當社ニ寄ス。同五年二月、在廳官人當社神領ノ煩ヲ成ス。賴朝下知シテ之ヲ停止ス。壽永元年八月、賴朝ノ室政子平產ヲ祈リ、近國ノ宮社ニ奉幣使ヲ立テ、安西三郎ヲシテ當社ニ參向セシム。東鑑 其ノ後、太田道灌江戸城ヲ築キ、當社ヲ江戸ニ勸請ス。今ノ神田明神是ナリ。永享記、寛明事蹟集 里見氏ノ時、社領高五石ヲ寄セ、舊幕府之ニ仍ル。文化九年、松平定信越中 社額ヲ書シテ奉納セリ。今、神庫ニ藏ス。▲房總志料ニ洲崎明神の社僧は、養老寺といふ眞言派なり。相傳ふ、養老年間の開基也と。今、寺領五石あり。甚だ衰へたり。(按に、房陽郡郷考に、御朱印高二石五斗安房郡洲崎 養老寺とあり。志料に五石とあるは、社領と誤混せしなり) ▲太政官日

誌。先般其管内安房國安房郡洲宮村洲宮神社ヲ、延喜式内后神社ト相定指令候處、猶詮議之筋有之、右者取消、更ニ同郡洲崎村鎮座洲崎社ヲ以テ、延喜式内后神天比理乃咩命神社ト相定候條、此段相達候事。明治六年四月十四日。教部省。○按に、是歲五月三十日、洲宮神社と俱に、縣社に列し給ふ。

○洲ノ宮神社

安房郡洲宮村に在り。即、式内天比理乃咩命神社の奥殿にして、今、縣社たり。▲洲宮社記。安房郡洲宮村鎮座洲宮大明神。祭神天比理刀咩命。相殿高皇產靈神・天富命・別宮豐玉姬命。▲金丸家系。安房郡洲宮村字魚尾山鎮座。洲宮后神社、後稱洲宮明神。使其奥殿曰ニ一之宮。亦洲崎村字手洗山在洲崎明神。使其拜殿曰ニ一之宮。故稱ニ地名手洗山。此兩社天比理乃咩命、延喜式内大社也。○按に、稱して奥殿と曰ふ。即、神位の在す所、而て式内社たるを知るべし。今拜殿たる洲崎宮を以て定めて式社となす。恐らくは本末を誤れるに非るか。▲里見忠義分限帳慶長十一年 百拾三石五斗六升壹合、山下 洲宮村。内三石、洲宮明神領。百三拾石、洲崎村。内四石、洲宮明神領。五石、洲崎明神領。

▲洲宮神社文書 數通ノ内

九拾八ヶ所之内

安房國山下郡洲宮村之内三石・同郡洲崎村之内四石、合七石、御社領被レ遺候由、我等所へ、從御奉行所、御書出一冊ニ御座候間、右之通、從甲寅年、可有御所務者也。仍如件。

元和貳年辰九月十五日。

中村彌右衛門吉繁花押

洲宮明神。

▲寺社分限帳。高七石、安房郡 洲崎村洲宮明神領。▲御朱印寺社領帳。高七石、安房郡 洲宮明神洲宮明神。主小野信濃。▲房陽郡郷考。御朱印高七石、安房郡 洲宮洲宮明神。▲大日本國誌中安房洲宮神社、安房郡洲宮村ノ中央ニ在リ。境内五百七十坪。社傳云、神武天皇元年辛酉四月中卯日、天富命社ヲ村ノ南方字魚尾山ノ上ニ建テ、后神天比理乃咩命ヲ祭ル。山ハ海邊ニ在リ。故ニ洲神、或ハ洲宮ト稱ス。山上今猶洲宮ノ字アリ。慶長元和ノ水帳モ亦之ヲ記ス。後、海面漸ク干瀉トナリ、海ヲ距ル七町餘ニ至ル。文永十年癸酉十二月十五日火災ニ罹リ今ノ地ニ移スト。祭日八月十一日、洲宮・藤原二村ノ氏神タリ。明治十八年四月十七日、縣社ニ列セラル。▲房總游乘。洲宮村、有洲宮神社。祀天太玉命妃天比理乃咩命。延喜式傳言、本祠有二殿。拜殿曰一宮、在洲崎御手洗山。奥殿曰二宮、在洲宮魚尾山。一殿而一社也。金丸家系故稱洲宮又洲崎社。東鑑今、俱列縣社。而以在洲崎者定爲式社。太政官日誌承和申、叙從五位下、貞觀初、累進正三位。續日本後紀、代實錄。源賴朝崇敬尤篤、舉事之初、奉神田、以祈武士來屬。後、歲時遣使奉幣帛。東鑑太田道灌之築江戶城、延三祀斯神、以爲城鎮。今之神田神社是也。永享記、寬明事跡集、新安手簡。▲教部省達。壬申年明治五月九月中、洲宮神社ヲ以テ、式社ト相定候儀ハ、同社ハ舊記等現在シ、且、安房神社へ神幸之祭式モ有レ之。洲崎神社ハ舊記一切無レ之、偶、延喜式一本ニ后神天比乃理乃咩命神社大、元名ト見エ候得共、印行一本ニハ、洲神ニ作レリ。旁、確證無レ之候條、洲宮之方、式社ニ判定、及指令候處、爾後、地勢ヲ探索シ、古書ヲ考究ニ及ビ候ニ、洲宮神社ハ海岸ニ隔リテ、洲神或ハ洲崎神ト可稱地ニアラス。且、東鑑治承五年二月十日條下知狀ニ、須宮神官トアルハ、即、今ノ洲崎神社ナレバ、所謂洲神タルコト明白也。然レバ、今ノ洲宮神社ハ、舊記等ヲ存スト雖モ、元洲崎神

社ヲ移シ祀レル者ニシテ、洲崎神社ハ多年佛徒ノ奉祀トナリ、且、中古既ニ八幡トサヘ誤リ來リ、舊記舊說并ニ祭典故事等、皆亡失シ、今ニ存スル者ナシト雖モ、其式社タル義、明白ニ候。本年四月中此の達書は洲崎神社の條に引きたり。更ニ改正、洲崎神社ヲ以テ延喜式内后神天比乃理乃咩命神社ト相定候儀ニ付、此旨可相心得事。明治六年五月十九日。教部省。○按に、是月三十日、洲崎日。教部省。神と俱に縣社に列し給ふ。▲房總志料ニ洲宮明神の別當を吉祥院と云ふ。眞言派なり。寺寶に、賴朝明神に通夜ありて詠ませ給ふ歌の親筆を傳ふ。

○按に、國華萬葉記安房に、吉祥院山伏寺領十石。或云十石房陽郡郷考に、御朱印高十四石、安房郡眞吉祥院とあり。按に、社領本廿一石なるを別當の分領せしなるべし。

○齋部宿禰本系帳洲宮祠官小野氏所傳

掛卷長岐神倭伊波禮毘古天皇、畝火樞原大宮御宇志給布大御世、上祖天富命、阿波忌部乎東土爾分且麻敷乎令作、又、天富命祖神天太玉命、天比理乃咩命乃神籬爾已命眞名子飯長姬命乎御杖代止爲且令奉齋、天日鷲命孫由布津主命乎以且諸相副令掌支。

高皇產靈神——天太玉命

亦名天神玉命、亦名玉櫛比古命。后神天比理乃咩命。

天櫛耳命 米麻敷令植。

天富命

掛卷毛恐_支 畝火極原大官所_レ知_二初國_一之伊波禮天皇御世_爾 阿波忌部_乎率_二東土爾良地_乎覓。

彌麻爾支命

和訶富奴命

佐久耳命

阿加佐古命

飯長媛命

由布津主命妻也。

玉久志古命

瑞籬大宮御宇廿五年、倭昆賣命_乎御杖代_與爲_二且_一、天照坐大神_乎、佐久久志呂五十鈴川上_爾奉_レ齋時、太幣執持_且供奉_支。

古佐麻豆知命

此者泉之穴師神主祖也。

葉耳命

此者日置部祖也。

多良斯富命

卷向日代大宮御宇天皇五十三年八月、行_二幸伊勢_一、轉入_二東海_一。冬十月、至_二上總國安房浮島_一宮。時供奉。安房大神_乎御食都神止坐奉、忌火_乎伊波_比由麻々_閉天、神嘗供奉利始_支。

意保熊命

此者白堤首等祖也。○彌接、姓氏錄云、白堤首、天櫛玉命八世孫大熊命之後也。

麻豆奴美足尼

息長帶姬皇后新羅_乎征給布時、伊伎島_爾天神國神_乎奉_レ齋、己命乃弱肩_爾太極取懸_且、太幣持_忌波利、持淨_麻岐利、造仕奉_支。

佐岐大人足尼

自_二輕島明朝_一、至_二難波高津朝_一供奉。

多比古足尼

磐余稚櫻宮供奉。

那美古

長谷朝食宮朝廷供奉。

達奈古

或云_二達撫古_一。

古止禰

此者小山連祖也。

○彌接、姓氏錄云、小山連、高御魂命子櫛玉命之後也。

豐止美

磯城金刺宮御宇朝廷賜_二忌部首姓_一。

宇都庭鷹

小治田大宮_爾供奉、大禮冠_乎授賜布。

佐賀斯

難波長柄豐前大宮御宇白雉四年、拜_二任神祇頭_一。

右麻呂

子孫在_二阿波國麻績郡_一。

加米古

子孫在_二名方郡_一。

子鷹

或云子人。出雲守、從四位上、氏上。養老三年閏七月卒。子孫在_レ京奉_レ仕_三神祇官。淨御原朝白鳳九年正月甲申、改_レ首賜_レ連、同十三年十二月己卯、改_レ連賜_三宿禰姓。色弗 正五位上、神祇大副。大刀自天比理刀咩大神奉_レ齋、與_レ兄同姓。大寶元年六月癸卯卒。以_三壬申年功_二贈_三從四位上。

名代 正八位上。

夫岐鷹

正八位上。文武天皇四年二月、補_三安房郡大領司、安房大神奉_レ齋。天平神護二年春二月死。

榮鷹 岡本正喜院祖。洲崎宮祝部。隨_三役小角、爲_レ僧號_三榮滿。

加奈萬呂 元正天皇養老元年春三月、奏_{シテ}神殿ヲ改造。同二年夏五月、班田師下向ノ時、勝ヶ崎洲宮

ヲ神戸ト定メラル。五月廿日、蠻國降伏ノタメ、官幣ヲ被_レ奉キ。同四年秋七月廿一日、勝崎

浦ニ神奉ノ假宮ヲ造リ齋ヒ祭り、洲崎社ト申シ、榮滿ヲ祝部トシタリ。後、榮滿、役ノ小角

ニ隨ヒテ僧トナル。武藏ノ洲ヶ崎ノ岡ニ比理乃咩命ヲ齋ヒ祭ル。

衣屋咩

忍島

從七位下、安房郡擬大領。妻、忌部久米鷹女弟、名美咩。

船人

麻呂

三田次

淨萬呂

井鷹

當岑

牛養

宅足

池雄

勳十一等、正七位上、安房郡少領。

外從六位下、擬大領。安房坐大神奉_レ齋。

常雄

冬鷹

茂義

布人

久 安房坐神社主家。

滿足

從七位下、郡司主政。元長五年秋九月死。

得積

正六位下、郡司擬大領。天安二年秋八月死。百二歲。仁明天皇承和九年壬申冬十月二十日奉_レ授_三從五位下位階。

淨人

安房國神社志料

從六位上、大領司。文德天皇仁壽二年八月、奉_レ授_二從三位。清和天皇貞觀元年春正月、奉_レ授_二正三位。神戸三十七町、封戸四十戸ヲ賜フ。

宗繼

良資

從六位上、郡司大領。應和元酉年冬十月死。外從六位下、郡司大領。昌泰三年四月死。八十九歲。

景知

外從六位上、郡司大領。延長元年九月、相馬太郎當社ニ參籠ノ上、自ラ神馬ヲ刻ミ納ム。其後、承平三年春三月、武藏國ニ於テ功田ヲ寄附セラレ、其地ニ社ヲ立テ、太玉命・比理乃咩命ヲ合祭ス。

副義

外從五位下。妻、安房守公維女。天元五年夏四月卒。七十八歲。

女子

景光

郡司大領。神餘家ノ祖。住_二神餘郷。

統光

妻、當國住人和田權守正忠女。長徳二年冬十二月二日死。

義宗

義種

長元九年四月廿日死。

易義

義範

康平六年十二月四日死。

義唯

義類

外從五位下。永長元年十一月二日卒。

從五位下。元永二年春三月十四日卒。歳八十二。

義維

從五位下。妻、神餘三郎義遠女。仁平二年秋八月廿四日卒。

貞峰

安元元年八月十八日死。

貞郷

妻、松原神社祝部義輝女。文治二年正月十二日卒。
治承四年秋九月四日、前右兵衛佐源賴朝公、當國へ來給ヒ、三社ノ神主ヲ旅館ニ召シ、源家開運ノ祈禱、丹誠ヲ抽ンズベキ旨、嚴命ヲ承リ、翌日、安西景益案内ヲナシ參詣シ給フ。太刀一口、願書ヲ納ム。此ヨリ月々大被卷數ヲ鎌倉ニ獻ズ。同年十一月十二日、安房郡佐野庄七町、同東ノ郡山名庄ニ於テ平郡本領凡テ五十七町寄附セラル。壽永二年夏五月十一日、御臺所平政子安産ノ御祈有_レ之。

使者、安西三郎。建久元年春三月、上總介義兼ヲ奉行トシテ、本社廣三尋・狹二尋、拜殿桁行六間・梁行三間半、其外、神樂殿・隨神門等、社頭悉ク造營セラル。同五年二月十四日、赤銅ノ神馬ヲ納メ給フ。使者、榛谷四郎重朝。

光成

寛喜三年六月廿二日卒。

義師

光信

妻、三浦駿河前司義村女。弘長二年春正月十八日卒。建仁三年十一月、奉幣并ニ神馬・御劍ヲ奉ラ
ル。使者、周西次郎助忠。

義俊

正應五辰年正月廿日死。

諸幾

正和三年冬十月二日死。文永十年、神宣ニ依テ社頭ヲ明鏡山豊榮地□□ニ遷シ建テ、此由鎌倉ニ
奏上ス。當國郡司安西彌七郎奉行トシテ、魚尾山ノ嶺ニ鎮座シ奉ル。黍田ヶ浦海上、大島ヨリ遠江
灘ヲ遠見ス。弘安四年、蒙古退治ノタメ官幣ヲ奉ラレ、神階勳二等ヲ授ケラル。

義角

安房坐大神祝部。岡島ノ祖。

義資

相承義俊跡、嘉元三年
春正月死。六十三。

義信

元徳二年秋九月十一日、八十九。

義借

貞和四年春二月二日死。建武二年鎌倉滅亡ノ後、安西彌七郎・丸五郎、當國ノ郡司領ト稱シ、専ラ
縦ニ押領、曆應四年ニ佐野庄・山名庄ヲ沒收ス。

保義

貞治四年正月廿九日死。

義要

永徳二。妻、郡司神餘左京亮景義女。

正義

繼ニ兄職。應永十四。

義胤

應永卅。文安二年、足利刑部少輔義實入國ノ時、神戸不レ殘沒收。同三年、社頭大破。所レ訴レ之、漸
ク一郡ノ農民ニ仰セテ、本社ノミ造ニ營之。米十五石・永廿貫文寄附スルコト、年々不レ絶。

義春

寶徳三。

義信

文明十五。

義近

義安養子トシテ、安房坐大神ノ家繼トナル。

義臣

永正二、八十八。明應八年六月、大地震ニテ社頭破損、訴ニ里見義成ノ處、文龜三年ニ至リ、安房社・當社共造營ス。兩社トモ里見代々ノ祈願所トス。

義俊

享祿二、九十九。永正十七年四月十五日、里見上總介實堯參詣シテ、海上安全ノ祈トシテ長刀一振奉納ス。洲宮村ノ内三石・洲崎村ノ内四石、除地トシテ御供料トス。天文五年、里見左馬頭義弘ノ時、本社拜殿不殘造營ス。云々。同九月十一日、義弘、洲宮村ノ内六十九石・南條村ノ内十五石、凡テ七十五石寄附之。同七年四月十四日、武運長久ノタメ秘藏ノ劍ヲ納ム。同日遷宮、代表須田將監・天羽藤左衛門・正木久太郎。九社ノ神家一同出張ス。

庶義

宗春 義右ノ跡相承。慶長九、八十八。

庶扶

義右 文祿二、七十八。

義仙

永祿十、八十四。庶義ノ跡相承。妻、元龜元、八十二。

義郡

從五位下、式部少輔。天正五、七十九。

義州

從五位下、對馬守。慶長十八、八十。慶長四年上京、吉田殿ヲ以テ叙爵。

義安

從五位下、宮内少輔。妻、神餘村伊介六右衛門女。承應三年十二月死。九十一。慶長十八年八月七日、印藤采女正、眞田瀨兵衛ヲ遣シテ神寶ノ劍ヲ奪取シ、別ノ太刀ヲ納ム。里見嫡子誕生ノ時、參詣有之。又、代々昇進之時、祈禱ノ被ヲ進ズ。元和元年九月九日、里見家斷絶故、寺社領皆沒收。依テ當國本織村延命寺へ、一國一圓寺社集會シテ官ニ訴フ。同二年九月、中村彌右衛門代官トシテ巡見ノ時、神領ノコト雖ニ歎訴、無ニ承引、除地ノ分、洲崎村ノ内四石・洲宮村ノ内三石、凡テ七石ノ券狀ヲ給フ。天正年中、大地震ニテ、本社以下破損。寛永元年、本社再興功成。同十三年十一月九日、神領七石永々不レ可有ニ相違ノ旨、大猷院殿將軍 御朱印ヲ賜フ。(以下略)

○此の本系帳も亦本社の來由沿革を徴すべきものなれば、茲に附載せるなり。

○天神社

今、安房郡瀧口村に在し、天神宮と曰ふ。舊地は朝夷郡白濱村の片倉に在り。▲延喜式神名帳安房國朝夷郡天神社小▲金丸家系。長尾莊瀧口村字犬澤之東、跨ニ於長尾川瀧口、亦鎮ニ座天神社。其祭神天富命是也。▲神社叢錄安房天神社小天は阿女

と訓むべし。祭神大己貴命・少彦名命、瀧之口村に在す。小鷹大明神と稱す。今、安房郡に屬す。地名 當代御朱印高十四石の說偶誤れり。神祇志料も之を襲踏せり。▲里見忠義分限帳。九百七拾六石七斗壹升九合、瀧口村内六石、天神領。▲寺社分限帳中、高六石、安房郡瀧口村天神領。▲房陽郡郷考。御朱印高六石、瀧ノ口天神社。▲大日本史神祇志料。安房郡瀧口村、曰天神宮。傳言、祀天富命。家系延喜制列ニ小社。▲神祇志料三天神社。今、安房郡瀧口村に在り。小鷹大明神と云ふ。房陽郡郷考、神祇志料

▲大日本國誌中安房 式内天神社、朝夷郡ニ天神ト稱スル社四所アリ。其一ハ大貫村ニアリ。一ハ平館村ニ在リ。一ハ岩絲村ニアリ。一ハ宮下村ニアリ。式ノ所謂天神ハ孰レノ社ナルヤ、斷定ス可ラズ。姑ク後考ヲ待ツ。或ハ平郡平久里中村ノ天神ナルベシト云ヒ、○彌按に、これ別社なり。下に標出す。或ハ安房郡瀧口村ノ天神ナルベシト云ヒ、○彌按に、これの本式なるべし。長狹郡賀茂神社ナルベシト云ヘレド、是等ハ皆郡ヲ異ニスルガ故ニ採ルベカラズ。○彌按に、あまざる書方なり。

○莫越山神社

朝夷郡杵見村の莫越山に在し、今、郷社たり。▲延喜式帳 朝夷郡莫越山神社小▲房陽郡郷考。式内名越山神社ハ、杵見村ニアリ。▲神祇要録廿三 安房莫越山神社。莫越山は奈古志夜萬と訓むべし。祭神手置帆負命・彦狹知命。朝夷郡杵見村に在す。▲神代系圖古史 高皇產靈神——天御食持命亦名手置帆負命彦狹知命本國忌部・讚岐天道根命紀伊紀直・高家○按に、高家神社は天道根命を祀れりと云首等祖也。ふ。此の系圖に徴して其の緣由を知る可し。▲大日本史神祇 莫越山神社○今、在杵見村神梅莫越山。曰小屋安

居。故有小屋安之號。蓋傳太古神造瑞殿之事也。今、相傳、祀手置帆負命。一宮巡詣記。延喜制列ニ小社。▲神祇志料三 莫越山神社、今、杵見村小屋安大神と云ふ。安房郡郷考、巡拜舊祠。蓋、讚岐國忌部祖手置帆負神を祭る。○古語拾遺。▲房總游乘。朝夷村北爲杵見村。有莫越山神社。延喜。祀手置帆負・彦狹知二神。傳蓋、二神始造。安房社傳説。▲房總游乘。朝夷村北爲杵見村。有莫越山神社。式内莫越山神社。中樞原大宮。古語拾遺世因稱工匠祖神。遠邇來賽。而工人居多云。房陽郡郷考、安房國誌▲大日本國誌中安房 式内莫越山神社。中村國香曰、莫越山神社詳ナラズ。或云、朝夷郡松田村ノ古神祠是ナリト。秦檜丸曰、朝夷郡杵見村ニ坐ス神社是ナリト。然ルニ、今、朝夷郡中ニ莫越山神社ト稱スル者ニアリ。一ハ杵見村ニ在リ。社一ハ同郡宮下村ニ在リ。村姑ク諸説ヲ記シテ、他日ノ考定ヲ待ツ。▲同。郷社、莫越山神社。朝夷郡杵見村字神梅ニ在リ。境内九百坪。社傳云、神武天皇元年、手置帆負命・彦狹知命ヲ祭り、養老二年五月、彦火火出見尊・豐玉比咩命・鸕鷀草葺不合尊ヲ合祀ス。モト數郷ノ鎮守タリ。中世亂離ヲ經テ、遂ニ杵見一村ノ氏神トナルト。明治六年八月、郷社ニ定メラル。社傳又云、治承中、源賴朝祈願ノ事アリ。神鏡及ビ神田貳拾町ヲ寄附シ、社殿ヲ造營ス。其ノ後、兵亂ノタメ衰頽スト雖モ、天正年間マデハ神領三十石餘ヲ領セシテ、増田長盛右衛門尉檢地ノ際、之ヲ沒收セラレ、其ノ後、僅ニ三石ヲ領スト。此ノ神稱シテ工匠ノ祖神トス。故ニ東京ノ工匠輩、深ク之ヲ信ジ、來賽スル者少カラズ。○良弼曰、是又、村社莫越山神社、朝夷郡宮下村字石神畑ニ在リ。境内三百貳拾三坪。創建詳ナラズ。手置帆負命ヲ祭り、彦狹知命ヲ合祀ス。

○附考。▲房總游乘。植野郷南小半里、得名木村。屬上總夷瀨郡。舊名御木、又稱細殿。有二細殿神社。祀太玉・天富二神。初、天富之來本州、使忌部造館。此、其御木忌部所居。其南曰鹿香。今訛呼。即鹿香忌部所居也。

細殿社傳記、參取古語拾遺。○又、勝浦亦屬三夷。按、鹿香在所也。謂三館舍也。○又、勝浦亦屬三夷。小馬頭也。有遠見岬神社。邑鎮也。房總傳言、祀天富命、令天日鷲命裔勝占忌部須志氏祭之。子孫相繼居此、因名。本社傳記、千葉縣神社調書。○按、占浦同訓。阿波有勝浦郡。和名是勝占忌部本居。後從天富而東行者。古語拾遺、安房齋部本原帳。

○下立松原神社

安房郡瀧口村の犬澤に在し、今、村社たり。▲延喜式神名帳 朝夷郡下立松原神社小▲金丸家系。長尾莊長尾川末流西方瀧口村字犬澤鎮座、下立松原神社小鷹明神。其祭神天日鷲命。亦一座、則字犬澤、東跨於長尾川瀧口、亦鎮座天神社。祭天富命是也。▲安房忌部家系。天日鷲命誨之曰、吾於此國欲鎮座。略故由布津主命、祖神之畏御稜威而隨。請造瑞新宮、令鎮座、拜祭而、奉稱松原神社矣。其稱呼者、此神山之松樹、大茂生而、所以蒼々綠々凌々大空也。亦此神、從寶殿正面戶者、高貴大神、並、天布刀玉命之令出入給者、其畏而、於常從妻戶出入給矣。▲房總志料五 瀧口明神は、安房郡瀧口村に建つ。或は小高明神ともいふ。社領七石。神寶に天國の刀一口ありと。七浦の内、砂取・川下など云ふ處、凡そ八百石の村、産土神として崇敬すと。○按に、七の誤也。▲里見忠義分限帳慶長十年 九百七十六石七斗一升九合瀧口村内拾石、明神領即小鷹。▲國華萬葉記 小鷹明神安房口村大己貴命也。社領十石、天台圓臺寺といへるは誤也。▲寺社分限帳安房郡 瀧口村小鷹明神領。▲房陽郡郷考。御朱印高十石安房郡瀧口小鷹社。▲御朱印寺社領帳。高拾石安房郡瀧口村小鷹明神。▲高山大和。▲大日本史神祇 下立松原神社。稱瀧口明神者、蓋此。但、郡界與式傳言、祀天日鷲命。金丸家系一宮巡詣記爲彦狹知命。神裔忌部氏世爲神主。元和中棟札 延喜制列小社。延喜不合。一説在牧田村。

高山大和は神主か

▲神祇志料十 下立松原神社。今、朝夷郡牧田村下田にあり。房陽郡郷考、蓋、紀伊國忌部祖彦狹知神を祀る。古語

安房社傳説。按、古天祖岩屋戸に隠り坐時、手置帆負・彦狹知二神、天太玉命に従ひて、天御量以て、大峽・小峽の材を伐りて、瑞殿を造り、又、御笠矛盾を作りて仕へ奉りき。古語拾遺○按に、本書、天富命この國に至りて安房社を建つ。故に其の神戸に齋部氏あり。是に據るに、當時忌部の從ひ來りし者、又その祖神を祭る事、天富命の太玉命社を立つるが如くなりしなるべし。姑く附して後考に備ふ。凡そ其の祭十一月七日・八日を用ふ。千葉縣神社調▲房陽郡郷考。式内

下立松原神ハ、牧田村ニ在リ。社ニ、元曆ノ昔、鎌府ヨリ納メラレタル書寫ノ大船若經全部アリ。今、石函ニ納メテ、不朽ニ備フ。▲神社要録廿三 下立松原神社小 下立松原は志毛多知末都波良と訓むべし。祭神天日鷲命。朝夷郡牧田村に在す。地名▲房總游乘。杳見村北爲牧田村。有下立松原神社。式神武帝時、美努射持命祀其祖

天日鷲命。金丸家系 神裔齋部氏世爲神主。齋部氏▲大日本國誌中 式内下立松原神社。清宮秀堅曰、安房郡瀧田村小鷹明神ナリト。秦檜丸曰、朝夷郡牧田村ニ座スト。今、牧田村天日鷲社ヲ稱シテ下立松原神社ト云フ。然レドモ確乎タル證據ハ則チ無シ。▲同。下立松原神社、安房郡瀧口村字犬澤ニ在リ。境内六千八百八十四坪。創建詳ナラズ。天日鷲命ヲ祭ル。又、下立松原神社、朝夷郡牧田村ノ中央ニ在リ。境内五百四十坪。社傳云、神武天皇ノ時、美努射持命ノ祖天日鷲命ヲ祭ルト。

○高家神社

朝夷郡南朝夷村に在り。今、郷社たり。▲延喜式神名帳 朝夷郡高家神社小▲房總志料五 延喜式を考ふるに、朝夷郡高家神社あり。安房郡に高屋村あり。彼の地に古神祠ありや。未知。▲房陽郡郷考。式内高家神ハ南朝夷村ニ在

リ。▲神社要録廿三安房 高家神社小 高家は多加伊倍と讀めり。祭神大御食津神磐鹿六獲命。今、朝夷郡朝夷村に在し、地名神明と稱す。▲大日本史神祇 高家神社。○今在南 蓋與大膳職所祀高倍神同神也。政事要略年中行事抄、並引高橋氏文。○按、高家高倍、音 延喜制列小社。延喜訓相通。延喜制列小社。▲神祇志料三 高家神社、今、南朝夷村にあり。房陽郡郷考、蓋、御食津神磐鹿六獲命を祀る。高倍高橋氏文・土人傳記。○按に、高家は房總游乘。忽戸岬北爲朝夷村。古郡司所治。抄、有高家神社延喜。祀高家首祖天道根命。本社緣起、姓氏錄○按に、天道根命は彦狹知命の子なる。▲大日本國誌中 安房 高家神社。平田篤胤曰ク、朝夷郡白子村三島神社ノ末社高家稻荷ナルベシト。其ノ説古史ニ曰ク、清和天皇紀、貞觀九年五月、授讚岐國正六位下高家神從五位下。ト見ユ。姓氏錄、和泉國天神部ニ、高家首ハ、神魂命五世孫天道根命之後ト見ユ。即チ同神ナルベシ。如何トナレバ、古語拾遺ニ、神武ノ御世、天富命、阿波國ノ忌部ヲ率キテ、安房ニ往キシコトヲ載スレバナリト。然ルニ、文政中、本郡北朝夷村神職某、京師ニ上リ、吉田家ニ請ヒ、其ノ社ヲ稱シテ高家ト稱セシト云フ。然レドモ、他ニ證ト爲スベキノ古書古跡ナキノミナラズ。位置形勢モ亦十分ナラズ。確認シテ古ノ高家神社ト爲ス可ラザルニ似タリ。由テ按ズルニ、高家ハ高家ノ誤ニシテ、高家神社ハ即チ本郡大川村ノ高家山上ナル不動堂ナランカ。然レドモ、是亦確證アルニ非ズ。要スルニ他日ノ考定ヲ待ツノミ。▲同。郷社高家神社、朝夷郡南朝夷村字上塚ニ在リ。境内三百四十五坪。創建詳ナラズ。社傳云、天照大神・御氣津神・天道根命ヲ合祀ス。明治六年八月、郷社ニ列セラル。本村三百四戸ノ鎮守タリ。境内末社五座、境外末社四座。

○那古八幡神社

安房郡八幡村に在し、今、郷社たり。▲寺社分限帳。高貳百七十壹石餘。安房郡 那古八幡領。○按に、社領と那古寺と合算せるなり。▲御朱印寺社領帳。高百七十一石五斗、安房郡 八幡村 八幡宮。別那古寺社領なり。▲國華萬葉記 十八幡宮ニ立ッ社領二百七十石。別那古寺。又、那吳寺。眞言、那古村。本尊千手觀音。坂東卅三番目ノ札所。寺領三百石。▲御朱印寫九 八幡宮領、房州安房郡八幡村之内百七拾壹石五斗事、任寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也。仍如件。寬文五年七月十一日。○安房國平郡那古村内百九石二斗事、任寬永十三年十一月九日先判之旨、那古寺全收納、永不可有相違者也。仍如件。寬文五年七月十一日。▲房陽郡郷考。御朱印高百七十一石五斗、安房郡 八幡宮。▲房總志料 二安房郡八幡村に八幡神社あり。社領百七十石。那古寺三百石 社地廣十町許。うるはしき松林なり。社頭に無銘の破鐘あり。其の製古式、相傳ふ、鎌倉の頃の物なりト。▲大日本國誌中 安房 鶴谷八幡神社、安房郡八幡村字宮谷ニ在リ。境内千二百六十九坪。應神天皇ヲ祭り、仲哀天皇・神功皇后ヲ合祀ス。社傳云、往古豊前國宇佐大神ヲ奉遷シ、社殿ヲ國府ニ建ツ。養老元年丁巳、郡司紀伴人等コノ地ニ勸請スト。平郡府中村、今ナホ故址ヲ存ス。永正五年九月里見義通再建ス。爾後、世々神領ヲ付シ、社傳ヲ修繕シ、且、土地幣帛等ヲ寄附セリ。徳川氏之ニ仍リ朱印高百七十一石餘ヲ寄附ス。明治六年八月、郷社ニ列セラル。祭日九月十四日・十五日。コノ日、本郡ノ安房神社、外八社、朝夷郡莫越山神社ノ神輿ヲ本社ニ會シ、海濱ニ於テ禊事ヲ修ス。本州第一ノ大祭タリ。▲房總游乘。八幡村、謁ニ八幡神社。松林蒼鬱、祠貌肅穆、爲近邑宗社。養老中、郡司紀伴人、遷ニ祀宇佐大神於國府。里見氏特崇ニ敬之。徳川氏寄ニ田百七十石。本社傳記、寺壯麗可レ知。世傳、諸國府趾、必祀ニ斯神。蓋防於源二位任ニ總追捕使、令守護人祀之。回國維 記標注 未レ知信否。按、八幡神即彥火々出見尊也。神祇拾遺、神書 而世以爲ニ應神帝。

實出ニ大神比義假託之言。至ニ僧行教遷ニ祭石清水、公然倡之曰、八幡神即應神帝、吾祖武内宿禰所仕之主也。其說終傳ニ播朝野ニ者。神祇志、八幡祭神考。附以匡ニ千古之謬。

○附考。▲大日本國誌中安房云、那古寺、平郡那古村字寺町ニ在リ。眞言宗ナリ。養老元年、僧行基勸ス。維新前ハ寺領高百九石二斗ヲ有シ、又、安房郡八幡村八幡宮ノ別當ニ充テラレ、其ノ社領高百七十一石五斗ヲ管理セリ。昔時ノ盛、推シテ知ルベシト。按ニ、合計二百七十石七斗ナリ。寺社分限帳・房陽郡郷考、その實を得たり。

○手力雄神社

安房郡大井村に在し、今、村社たり。▲御朱印寺社領帳。高四拾三石三斗、大井村手力雄大明神。主黒川若狹。▲寺社分限帳。高四拾五石餘、大井村大明神領。▲房陽郡郷考。御朱印高四十三石三斗、大井手力雄社。▲國華萬葉記十明神立ッ。社領四十三石、眞言圓行寺。石ト云フ。里見忠義分限帳五年。四百五拾三石二斗三合、山下大井村。内四拾三石三斗三合、明神領。○即、手力雄。▲大日本國誌中安房手力雄神社、安房郡大井村字船田ニ在リ。境内六百坪。手力雄命ヲ祭り、天御中主神・太田命ヲ合祀ス。社傳云、養老二年戊辰七月七日勸建スト。

○池田八幡神社

○長狹郡池田村に在す。▲御朱印寺社領帳。高十二石、池田村八幡宮。主糟谷左近。▲寺社分限帳。高拾貳石、池田村八幡領。▲國華萬葉記十八幡宮村。社領十石。主太郎右衛門。▲房陽郡郷考。御朱印高十二石。長狹郡坂東村八幡宮。按ニ、

池田村を坂東村とす。郡の中央に位せり。

○岡本八幡神社

平群郡岡本村に在す。▲寺社分限帳。高五石、平群岡本村八幡領。▲御朱印寺社領帳。高五石、平群岡本村八幡宮。別當善瀧院。○按ニ、里見九代記云、里見義頼、その弟淳泰、岡本城に居ると。蓋、その城鎮なるべし。

○山宮神社

○安房郡東長田村に在す。▲御朱印寺社領帳。高拾石、安房郡長田村山宮大明神。主秋山民部。▲寺社分限帳。高拾石、安房郡長田村山宮明神領。▲國華萬葉記十山宮神社。長田村立ッ。社領十石、眞言行願寺。▲房陽郡郷考。御朱印高十石、東長田山宮明神。▲安房志顯忠齋藤山宮神社、安房郡東長田村ニ鎮座ス。境内千二百三十二坪。祭神事代主命、大山津見命ヲ配祀ス。元、山宮大明神、マタ長田大明神ト稱ス。明治元年、今ノ名ニ定ム。社記曰、朱鳥元年、中臣幸彦、攝津國三島ヨリ來リ、此ニ本社ヲ勸建ス。養老二年班田使下向ノ時、神田七町八段ヲ給セラレ、貞觀十二年、藤原豐宗幣帛ヲ奉ル。治承四年、源賴朝使者ヲ遣シテ武運長久ヲ祈ラセラル。文治二年、先規ニ從ヒ、神田ヲ寄附ス。其ノ後、兵亂ニテ神領没倒セシテ、明應二年、里見氏ヨリ田十石ノ寄附アリ。寛永十一年、幕府朱印ヲ賜ハル。祭日ハ、一月七日ヲ山鎮祭ト稱シ、九月十五日、北條八幡社ニ神輿渡御アリ。鏡浦ニ於テ禊事ヲ修ス。此ノ禮ハ、延久三年八月ヨリ今日ニ至ル迄、缺クコトナシ。末社ニ八雲・熊野兩社アリ。

○年宮神社

安房郡山荻村に在す。▲御朱印寺社領帳。高八石、安房年宮。主石井伊織。▲寺社分限帳。高八石、安房年宮領。▲房陽郡郷考。御朱印高八石、山荻、歲宮明神。▲安房志。山荻神社、安房郡山荻村宮原ニ在シ、舊、歲宮ト稱ス。祭神稚産靈命・少彦名命・猿田彦命・大己貴命ナリ。本殿・拜殿・御供所等相並ビ、境内二百八十五坪。祭日八月十七日トス。社傳曰、景行天皇五十三年、本社ヲ荆建シテ、五穀豐穰ヲ祈リ、和銅元年、年穀ノ守護神ト崇メ奉ル。故ニ歲宮大神ト號ス。里見氏ノ時、神領八石ヲ寄進ス。徳川氏ソノ先例ニ倣ヒ墾地ヲ賜フ。每歲九月十五日、北條八幡宮例祭ノ日、神輿渡御アリ。

○八坂神社

平群郡不入斗村に在す。舊、天王社と稱す。▲御朱印寺社領帳。高四石、平群不入斗村牛頭天王。主川崎美濃。▲寺社分限帳。高四石、不入斗村天神領。按に、天神は天王の誤字なり。近古。▲房陽郡郷考。御朱印高四石、平群不入斗天王社。○附考。▲日本地理志料武藏荏原郡土岐系圖引。貞治五年文書、武州大井郷不入讀村。邑之鹿島祠寛正四年金鼓識同。今作不入斗、讀云伊利夜未受。斗、即計字之訛。祀典所。秩磐井神社在。此。稱曰鈴森八幡。當時爲其神邑。故不輪租調。不入計猶後世云守護不入也。遠江・駿河・安房・上總、又有不入斗村。皆同義。古へ全村その社領たりしなるべし。

○天津神明社附丸御廚

長狹郡天津村に在す。今、郷社たり。▲神鳳抄。安房國宮東條御廚。上分四丈布五段、長日御幣紙。白濱御廚。東條御廚。阿摩津。○按に、阿摩津は即ち今の天津村なり。白濱は其の古名と聞ゆ。東條村は、天津の西一里許に在り。延喜。御廚。式に白濱馬牧とあるは、和名抄なる安房郡白濱郷にて、今の朝夷郡白濱村を云ふ。此と混すべからず。▲東鑑。二壽永元年八月十一日、御臺所政子有御産氣。武衛朝源頼渡御、爲御祈禱。被立奉幣御使於伊豆箱根兩所權現、並、近國宮社。安房東條寺。平六。▲同。二壽永三年五月三日、武衛被奉寄附兩村於二所大神宮。略謂二件兩所者、内宮御分、武藏國飯倉御廚。今の東京芝神。被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主。外宮御分、安房國東條御廚。被仰付會賀次郎大夫生倫一訖。

寄進伊勢大神宮御廚一處、

在安房國東條。四至如舊。

右志者、奉爲朝家安穩、爲成就私願、殊抽忠丹、寄進上狀如件。

壽永三年五月三日 正四位下前右兵衛佐源朝臣

▲同。五文治元年十二月四日、生倫神主申云、捧去月御願書、令參籠于安房國東條御廚時、抽懇祈之處、今日二日有靈夢之告。云。一品朝則被奉御厩馬龍。於件時。○按に、大神宮儀式帳に、度會山田原造御廚、且、改神座。るべし。さて序をカムタチマフ。▲房總志料。五東條は、長狹郡花房邊より天津小湊までの地を云ふ。天津に齋宮の跡、クと傍訓せるは杜撰なるべし。今に微に残れり。此の地に古より獅子舞の徒あり。所由ありて他の徒を入るゝ事を禁すと。思ふに、祭祀を司り

し巫祝の、祀典廢して後衰へし人の子孫なるべし。▲大日本國誌中^{安房} 神明神社、長狹郡天津村字宮前岡ニ在リ。境内三百六十坪。天照大神ヲ祭り、事代主命・豐受姬命ヲ合祀ス。社傳云、往古事代主命ヲ專祀シ、^大大明神ト號ス。康平五年源賴義・寛治元年源義家、東夷征伐ノ時、本社ニ祈誓ス。源賴朝本州ニ渡リシ時、亦先例ニ依リ參拜祈誓ス。壽永三年五月、賴朝更ニ伊勢大神宮ニ請ヒ、神璽ヲ此ニ移シ、^大寺宮ニ合祀シ、東條御廚ト稱シ、社殿ヲ稱立ス。鳥居ノ造營ハ、伊勢神宮ノ造營式ニ倣ヒ、二十一年毎ニ改メ建ツルヲ例トス。明治十四年九月、郷社ニ列セラル。▲房總游乘。發小湊、小半里穿^三隧道、則天津村。人戸稠密、魚介甚富。所謂阿摩津御廚也。東鑑、神有^三神明社。影^三祀皇大神云。房總志料○按、御廚弘長中、工藤吉隆領^レ此。日蓮後、里見家臣糟谷石見成焉。正木系圖。入^三東條村、亦御廚趾。神鳳抄○東鑑作^三東條寺、^大元曆中源賴朝所^レ獻。東條氏世居^レ之。日蓮注。治承中、賴朝之敗^三石橋也、遁至^三本州。東條秋則^稱七郎。與^三安西・神餘・麻呂三氏、先^レ衆來屬。賴朝割^三與本州於四人、子孫傳領。東鑑

○附丸御廚

▲東鑑一治承四年九月十一日、武衛朝^親巡見安房國丸御廚給。丸五郎信俊爲^三案内者、候^三御共。當所者、御彙祖豫州禪門^義平^三東夷給之昔、最初朝恩也。左典^義朝令^レ請^三廷尉禪門^義爲^レ御讓給時、又、最初之地也。而爲^レ被^レ祈申武衛御昇進事、以^三御敷地、去平治元年六月一日、奉^レ寄^三伊勢大神宮給。果而同廿八日補^三藏人給。而今懷舊之餘、令^レ莅^三其所給之處、廿餘年往事、更催^三數行哀淚。云々爲^三御廚之所、必、尊神之及^三惠光給歟。仍無^レ障碍于宿望者、當國中^立新御廚、重以可^レ寄^三附彼神之由、有^三御願書。所^レ被^レ染^三御自筆也。▲房總志料五 東鑑に、

麻呂御廚といふ事見ゆ。麻呂は朝夷郡にあり。上世方物を奉りし官廚也。延喜式に東鯨魚とあるも、此の地の産なり。又、朝夷郡相の濱より四町許陸に大神宮村といふあり。此の地に古へより勢大廟鎮座まします。麻呂御廚は此の地の事なりと。又、大神宮村勢大廟の宮料、瀧口村にて十二石の御朱印有りしが、其の地、今、烏有となれりと。然れども、彼の村より、毎年八苞づつ神供料を出す。▲大日本國誌中^{安房} 丸御廚。東鑑治承四年九月十日。略今ソノ遺址ヲ詳ニセズ。朝夷郡丸本郷村ニ、本藏前・本藏屋敷ト唱フル古字アリ。蓋、ソノ遺跡ナラン。▲日本地理志料^安房 朝夷郡滿祿郷^萬呂東鑑云、源賴朝詣^三丸御廚。丸信俊從^レ之。是彙祖賴義以^三征夷功^レ所^レ賜、傳至^三父義朝。義朝祈^三賴朝顯達、平治元年獻^三之大神宮。即此。遺趾未^レ考。

○諏訪神社

平群郡正木村に在し、今、郷社たり。▲房陽郡郷考。御朱印高三石^{平郡}正木諏訪社。▲大日本國誌中^{安房} 諏訪神社、平郡正木村字諏訪山ニ在り。境内七百六十坪。建御名方命ヲ祭ル。明治六年癸酉八月、郷社ニ列セラル。

○天神社

平群郡平久里中村に在し、今、郷社たり。▲里見忠義分限帳。貳千三百三拾石一斗七升八合^{北之郡}平久里村。内拾八石、寶珠院領^{本は}天神宮領。七石、天神宮領新寄進。高二百三石九斗有^不恐らくは神地を侵奪せしならん。▲房陽郡郷考。御朱印高七石^{平郡}平久里天神宮。▲大日本國誌中^{安房} 天神社、平郡平久里中村字溜原ニ在り。境内千三百六十

四坪。菅原道眞ヲ祭ル。創建詳ナラズ。明治六年癸酉八月、郷社ニ列セラル。▲房總志料二平郡平群村に、天神の神社あり。神領五石。府中寶珠院三百。社僧の語りしは、室町の頃、細川氏大檀那となりて、此の地に菅神の社を建つ。社寶に細川の祈願書一軸あり。又、里見氏の白旗一竿、古假面三箇あり。細川は數世室町の執權たれば、誰なるや詳ならず。○按に、菅公を祀ると云へるは、天神の社號より誤れるにて、式内朝夷郡天神社を影祀せしには非るか。後の考定を待つ。

安房國神社志料(終)

香取私記抄

【解説】「香取私記」は、香取郡津宮の久保木清淵(叢書第八卷二三四頁・同五〇一頁参照)が、博く古典を涉獵して祭神經津主神の事蹟を顯揚し、目錄に示す如く、香取に鎮座以來の同神宮沿革祭典から配神古蹟等を詳述したもので、香取神宮史として完璧に近いと稱せられる。特に、本居宣長が「古事記傳」で述べた鹿島・香取兩宮同一祭神説(叢書第十卷一九二頁参照)に對し、「日本書紀」を援いて香取祭神の經津主命たることを主張したのは、注意さるべき點と思はれるから、こゝに其の個所だけ抄出した。「香取私記」寫本一部千葉縣圖書館所藏。(稻葉)

香取私記目錄

- 明祀原徴(經津主神香取鎮座の事蹟を明かにす)
- 神系本由(經津主神の出で給ふ本原を明かにす)
- 神功明徴(經津主神の神功を明かにし、末に經津主・武甕槌同體異名なるべからざる説を附す)
- 宮場甄名(香取の名義、又、宮林の古名を明かにす)
- 靈時運會(鎮座の時代を明かにす)
- 馮位闕値(内神相殿等の事を明かにす)
- 春日遷座(大和の春日に遷座せし事、并に、氏祖神の義を論ず)

征服翼成（神功皇后三韓征伐の時、皇軍を輔翼せし事を明かにす）

斷虔舊蹤（往古よりの造營の事を明かにす）

神地考覈（神領の事を明かにす）

崇明禮秩（朝廷勅使、并に、官幣等の事を明かにす）

祠氏舊職（神職の事を記す）

歲時典秩（年中の祭事を記す）

從祀紀事（末社の事を明かにす）

舊名標述（宮林近地の古蹟を記す）

神功明徴

日本書紀神代云、（以下省略）

經津主・武甕槌同體異名之辨

古事記傳に、「鹿嶋は正三位、香取は正四位上なり。光仁天皇寶龜八年の神階、下に委し。是もと一神なるを、鹿嶋には其の總ての御靈を祭る故に位も高く、香取には別に彼の齋主たる御靈を祭る故に位もや、降れるなるべし。然るを、若し是別神なる時は、書紀の趣、經津主は大將軍、武甕槌は副將軍の如くなるは、彼の神位の尊卑に當らざるものをや」といへり。是は、古事記通篇に經津主といふ名見えず。武甕槌の一名に豊布都・建布都の號あり。又、神武紀高

第十卷一
九二頁參照

倉下が夢の條に、武甕槌神平國劍を授く。其の劍に布都御靈また甕布都神などの名あるに取合せ考へたる説にて、「經津主てふ神は、外にはあらず。故に、續後紀祝辭の詞などにも、『香取坐伊波比主命』と稱して、經津主命とは言はず」と、自定せしなるべし。由ある考證に似たれど、本宮の傳へは書紀を主とする故に、同體異名の説を立てず。もとより經津主の宗もとより祠とつしなれば、神續の事、正説旁説種々の傳へある中に、同體異名とさだかにはいへぬど、これらに似寄れるも見ゆ。されど、正説とはせざるなり。今、豊布都・建布都の別名にて一神と定めたらんには、其の名の相似たる例は、伊弉諾尊飢時生兒に倉稻魂あり。素盞鳴尊の子に亦倉稻魂あり。或は大國主神・大國御魂神・大年神・御年神・庭高津日神、又、事代主神の曾孫健甕尻命の又の名健甕槌命など、其の名の近く相似たるも多し。和漢ともに同名異人あるは常の事なるに、まして其の名の如此ければとて、一神に定むべきにあらじ。わきて經津主・武甕槌二神は武徳の尊神なれば、此を經津主と稱し、彼の別名を豊布都・建布都と奉レ稱るも、共に武徳を祝し奉るの名なるべし。神位の次第は然る事なれど、正しく書紀の本文を捨て、神位について一神と定むるも如何あらん。古事記に其の名の見えざるは異説もあるべし。今、その説を詳にするに、書紀本章の言に、「命經津主神。而武甕槌神進曰、云々」或は意氣慷慨、又は配經津主神遺などあれば、決して一神なるべき事にあらじ。若し其の名の隠れたるに一説あらば、一書と稱せるが中に其の説を著すべし。凡て書紀の此の章、本章の外に一書十章あり。それが中に邪神平定の條三章ありて、二章には正しく經津主神・武甕槌神と舉げて、以下には二神と稱し、一章には天孫降臨の初めを舉げて、云々と略したるは、本章に譲りしと見ゆ。本章分注の一説にも二神と記したるは經津主・武甕槌なり。其の外、古語拾遺、或は祝詞の辭、及び舊事紀よりして、

世々の國史を演述せしもの、二神に異説なし。其の言の次叙をさへに、經津主神を先に擧げて、武甕槌神・經津主神とは得いはず。但し出雲國造神賀詞に「天夷鳥命爾布都怒志命乎副天」とあるは、却て武甕槌の名は隠れぬ。同體異名の説を稱する家には、「もとこれ一神なれば、或は布都怒志とも見え、或は健御雷とも稱したり」とも云ふべけれど、太古の事は、此に見れば、彼には隠れ、其の言の種々なる、書紀に一書の異説を擧げたる如くなり。賀詞に正しく布都怒志と云へるは書紀の文にも符合せるを、「これは武甕槌の異名なり」と云はゞ、我より其の説を立つるに近し。古事記に「天鳥船神副健御雷神」とあるは、天鳥船神は諸冊二尊の所生神なり。これ一説なり。賀詞の天夷鳥神は天穗日命の子なり。賀詞の言は又一説なり。或は、出雲國造は天穗日命の裔なれば、其の遠祖の事に忌諱ありていへるかも知るべからず。故に其の詞の中にも「國作之大神乎毛媚鎮天」など云へるは、諱避の詞なるべし。如此、家々の傳へに説々あれば、事を一切に斷すべきにあらず。異邦の載籍詳なるすら、上古の事は異説多きに、まして吾邦太古の前言往行、口舌に傳へたるを定めて、彼を非とし、此を是とすべきにあらず。例せば、龍田天御柱・國御柱社二座、級長津彦・級長津姫の神なるを、書紀に「伊弉諾尊吹撥之氣、化爲神。號曰級長戸邊命、亦曰級長津彦命。是風神也」とあるは、一神のやうにも見えて文意さだかならず。舊事記に「風神號曰級長津彦神。次級長戸邊神」とあるに校すれば二神なり。按に、天神、大戸之邊、大戸之邊、邊は閉聲にして彦神に配しては姫神の稱なるべし。古事記には「生風神。名志那津比古神」とばかりあれば、只一神に定まれど、祝詞には「比古神爾御服々比賣神爾御服々」と奉祝て、古くより大和國龍田に天御柱・國御柱の二座と仰ぎ祀れば、二神に疑なかるべし。これも古事記によりて一神とせば、朝廷の奉幣違へるに似たり。又、弘私記の序、及び三統宿禰理平が延喜六年

閏十二月日本紀竟宴序、橘朝臣直幹が天慶六年十二月日本紀竟宴序に據るに、書紀は舍人親王・太朝臣安麻呂とにも撰録する所なり。日本紀竟宴歌、又、紀清人も撰者に列ること記せしものあり。願に、親王これを總裁し、博く諸説を搜羅して、本章に其の統を正し、一書と稱せしには家々の説までを悉く記載せしなるべし。されば、安麻呂さきに古事記を撰せし時、如此と自定せし説なりせば、本章の統記に異りとも親王これを一書の中に載すべきなり。古事記に、天照大神・月讀尊などは諸尊の洗目に成出給へりとあるを、書紀の本章には、諸冊二尊共に議て生給へる靈異の兒とし、洗目の説は一書に之を載せ、又、白銅鏡に由て化出給へるの説もあり。如此諸説多き中に、經津主の名の隠れたる説を漏すべきにあらず。又、古事記は和銅五年の撰、書紀は養老四年の奏上にて、其の間僅に九年を隔てたるに、同じ撰録の人の言にて、別に一説あるを、不言止むべき理あらじと覺ゆ。おもふに、古事記は稗田阿禮が所誦勅語舊事のまゝを校訂して奏上せしなるべし。これ唯一家の事にて、國造が神賀詞に天夷鳥神あれど、古事記・書紀には見えざる如く、唯その一家の異説なるべし。されば、書紀は文字の修飾も多く、古事記は詞のさまも古く昔ぶりのまゝに記したれば、舊きさまを古事記に索むと云ふは可なり。事の去就を古事記に決すと云ふは一切の言なるべし。特に書紀の書成りて後は、此の書を以て國家の正史とし、歷朝史臣に命じて之を講せしめ、竟宴の日は和歌を獻じ、文を奉り、或は都講に物を賜ひ、種々の儀あり。類聚國史に據るに、嵯峨天皇弘仁三年六月、參議紀朝臣廣瀨・陰陽頭阿部朝臣眞勝等に命じて此の書を講せしめしに始り、代々に絶えず。なほ其の後も打續きて竟宴の文章和歌など諸書に見えたり。かゝる公議の正史なれば、本宮には書紀の説を主張し、殊に、古より一社の相傳に經津主神一名齋主神とし、武甕槌神と同功合體の御神慮なれば、此の神を相殿に齋き奉り、年中の

幣帛を捧げ奉る事、書紀二神の説に違ふ事なし。若夫、彼に按し、此に合せ、別に一説を立つるは、神世のこと
 彷彿杳冥の際なれば、説を成す人の意にあるべし。己が説を主張して、二神に疑ひなき正史の言を斥くるは武斷
 なるべし。本宮の攝社に又見の社あり。經津主・武甕槌・天兒屋三神の子を祭れり。又、延喜式神名帳に香取御子神社・鹿嶋
 御子神社あり。姓氏錄に「矢作造、布都主命之後也」といへるの類、定めて同體異名とせば、これらの事に通じ難
 き所あるべし。

香取私記抄(終)

神名帳考證抄

【解説】「神名帳考證」は、伴信友が延喜式神名帳(叢書第十卷に抄本がある)に諸書を参照して、式に擧
 げられざる國史見在の諸社をも掲げ、其の祭神・社創立の由來・名稱及び沿革等を考證したもので、卷十八
 に安房國六座と式外舊社二座、卷十九に上總國五座と式外舊社七座、卷二十に下總國十一座と式外舊社一座
 が収録されてあるのを抄出したが、本書は國書刊行會の「伴信友全集」第一にあるから割愛した。(稻葉)

本朝諸社一覽抄

【解説】「本朝諸社一覽」は、貞享二年(二三四五)坂内直頼の撰で、卷第六に安房天比理乃咩社・上總玉
 前社・下總香取社の記載がある。本書は國書刊行會の「續々群書類從」第一神祇に收められてあるから抄出
 の掲載も見合せた。(稻葉)

小御門神社御由來記

【解説】本書は小御門神社宮司澤田總右衛門編輯、同社務所藏版で、明治十四年に出版されてゐる。内容は
 大日本史列傳の師賢公傳と、伊能穎則の文貞公事蹟考、清宮秀堅の同墳墓考、邨岡良弼の同年表とを合せて
 一卷としたもの。千葉縣圖書館にも所藏されてある。(稻葉)

坂東觀音靈場記抄

【解説】釋亮盛の「坂東觀音靈場記」から、房總七觀音即ち第二十七番銚子飯沼、第二十八番下總滑河、第
 二十九番下總千葉寺、第三十番上總高倉、第三十一番上總笠森、第三十二番上總清水、第三十三番安房那吳

の觀音由來を抄出して見たのであるが、紙數の都合で割愛した。寫本一部筆者所藏。(稻葉)

上總寺社緣起

【解説】本書は國學者秦穗丸が、望陀郡怒田村金剛寺大日如來、同郡矢那村神佛、同郡請西村神佛、天羽郡岩坂八雲大社、同郡鶴舞八幡宮、夷濠郡法花村妙法山龍藏寺、同郡興津妙覺寺、埴生郡千田村稱念寺齒吹如來、市原郡大悲山笠森寺、同郡八幡村八幡、長柄郡長柄山胎藏寺、周准郡鹿野山神野寺、及び安房國長狹郡千光山清澄寺の由來緣起を集録したもの、妙覺寺以下は其の社寺から板本となつてゐる筈である。寫本一部筆者所藏。(稻葉)

正倉院文書抄

【解説】「正倉院文書」は奈良正倉院製藏のもので、正集四十五卷、續修五十卷、塵芥三十九卷、續修後集五十三卷、續修別集五十卷、續々修四百三十九卷等に分たれ、「大日本古文書」に收められてゐる。今、その中から、養老五年(一三八一)の下總國葛飾郡大島郷・倉麻郡意布郷・鉦托郡少幡郷の戸籍を抄録した。清宮秀堅は大島郷の甲和を加波倭と讀んで河曲郷とし、郷岡良弼は大島を「今、杉戸驛東有大島村。是其遺名」(叢書第七卷一五三頁)としたが、吉田東伍博士の「大日本地名辭書」には、「河曲は千葉郡寒川(千葉市内)の地なるべし」とし、又、「埼玉縣北葛飾郡杉戸の邊に大島郷を求め難し。彼地方は古相馬郡下河邊庄にして葛西の内に非ず。甲和里の郷内にあるにつけて想ふに、後世の小岩は甲和の訛に非ずや」とある。次に、倉麻郡意布郷を郷岡氏は相馬郡意部郷に當て、今の茨城縣北相馬郡稻井戸村戸頭及び山王村配松地方に擬し(叢書第七卷二〇九頁)吉田博士また意部郷に當て、今の東葛飾郡我孫子町・富勢村邊とした。鉦托郡少幡郷を郷岡氏が色陀郷(今の東葛飾郡千代田村篠籠田附近)と推定せるに對し、吉田博士は「今定めて、しか判決するは蓋過誤ならん。全く證據を缺けば也」とされ、要するに三郷とも今いづこの邊なるかは明確でない。しかし、孔王部が穴穂部と同じで下總に甚だ多かつたことは、「續日本紀」の天平勝寶四年七月の條に「下總國穴太部阿古賣、一産二男二女。云々」天應元年十月の條に「下總國葛飾郡人孔王部美努久咩一産三兒。云々」延暦九年十二月の條に「下總國狹嶋郡主帳正八位上孔王部山麻呂云々」等が見え、次の戸籍で見ても、大島郷の甲和里・仲村里・島俣里の三里いづれも里長が孔王部で、全郷この御名代部から成立してゐることが知られる。なほ、書中に散見する「下總國印」を一六二頁に掲げたが、これは「集古十種」に見え、「成田名所圖會」卷一にも引用されてゐる。(稻葉)

(繼目裏書)

下總國葛飭郡大嶋郷養老五年戶籍

主帳无位刑部少倭

大嶋郷ノ字面ニ「下總國印」一アリ。

(正集二十) ○紙面ニ「下總國印」十六アリ。

下總國葛飭郡大嶋郷戶籍

養老五年

甲和里戶主孔王部小山、年肆拾捌歲。 正丁 課戶

妻孔王部阿古賣、年伍拾貳歲。 丁妻

妾孔王部小官賣、年參拾捌歲。 丁妾

男孔王部忍羽、年貳拾貳歲。 正丁 兵士、嫡子。

男孔王部忍秦、年柒歲。 小子

男孔王部廣國、年伍歲。 小子

女孔王部大根賣、年貳拾柒歲。 丁女 嫡女

女孔王部古富根賣、年拾玖歲。 次女

女孔王部若大根賣、年拾伍歲。 小女

女孔王部刀自賣、年參歲。 綠女

女孔王部小刀自賣、年貳歲。 綠女

從父妹孔王部小官賣、年參拾捌歲。 丁女

從父妹孔王部官賣、年肆拾歲。 丁女

姪孔王部手子賣、年參拾貳歲。 丁女

口壹拾貳不課

合口壹拾肆

口貳課

戶鄉長孔王部志己夫、年伍拾捌歲。 正丁 課戶、王部小山兄。

男孔王部麻呂、年貳拾壹歲。 正丁 嫡子

男孔王部若麻呂、年貳拾歲。 少丁 嫡弟

男孔王部廣國、年拾壹歲。 小子

男孔王部眞國、年肆歲。 小子

口二小子
口六丁子
口一次女
口一小女
口二綠女
口一兵士
口一正丁

原本に陸を足してあるに

原本に尼を圧してあるに

女孔王部古伊呂賣、年貳拾柒歲。 丁女

女孔王部若賣、年貳拾貳歲。 丁女

女孔王部廣刀自賣、年貳歲。 綠女

姉孔王部官賣、年貳拾參歲。 丁女

口陸不課

口二小子

○紙面ニ「下總國印」九十六アリ。又、紙裏繼目ニ「去」アルモノニケ所アリ。

口麻呂、年參拾壹歲。 兵士、戶主從子。

母刑部子若賣、年肆拾玖歲。 丁女

女孔王部布与賣、年拾歲。 小女

女孔王部若賣、年肆歲。 小女

弟孔王部眞秦、年參拾歲。 正丁

弟孔王部子秦、年拾捌歲。 少丁

弟孔王部忍人、年拾肆歲。 小子

原本に弟をあるに

正倉院文書抄

妹孔王部古都賣、年貳拾參歲。 丁女

妹孔王部眞都賣、年貳拾壹歲。 丁女

妹孔王部古麻都賣、年拾陸歲。 小女

外孫孔王部大麻呂、年參歲。 綠兒

口捌不課

合口壹拾壹

口參課

戶孔王部尼麻呂、年肆拾肆歲。 正丁 戶主刀良從父兄

妻孔王部刀良賣、年參拾貳歲。 丁妻

男孔王部麻呂、年貳拾歲。 少丁 嫡子

男孔王部古麻呂、年拾五歲。 小子 嫡弟

男孔王部麻呂、年捌歲。 小子

男孔王部小足、年壹歲。 綠兒

男孔王部黑秦、年壹歲。 綠兒

口一小子
口一綠子
口三丁女
口三小女
口一兵士
口一正丁
口一少丁

男孔王部小黑、年壹歲。
 女孔王部久爾賣、年貳拾參歲。
 女孔王部小久爾賣、年拾捌歲。
 女孔王部伊良賣、年拾五歲。
 女孔王部古与理賣、年參歲。
 妹孔王部弟賣、年參拾柒歲。
 妹孔王部子賣、年參拾參歲。
 從父弟孔王部古麻呂、年貳拾壹歲。
 妹孔王部古呂賣、年貳拾捌歲。
 妹孔王部阿耶賣、年捌歲。
 姑孔王部黑賣、年肆拾歲。

合口壹拾捌

口壹拾伍不課

口二小子
 口三綠兒
 口六丁女
 口一次女
 口二小女
 口一綠女

綠兒
 丁女
 次女
 小女
 綠女
 丁女
 丁女
 正丁
 丁女
 小女
 丁女

口參課

口二正丁
 口一少丁

戶主孔王部荒人、年肆拾肆歲。
 弟孔王部荒瀨、年參拾陸歲。
 妹孔王部宇留和賣、年參拾參歲。
 妹孔王部若賣、年參拾貳歲。
 弟孔王部大根賣、年貳拾捌歲。
 母三枝部古与理賣、年肆拾陸歲。
 弟孔王部塩賣、年拾伍歲。

合口柒

口伍不課
 口貳課

口四丁女
 口一小女
 口二正丁

戶孔王部忍、年陸拾肆歲。
 妻孔王部多須伎賣、年肆拾陸歲。
 男孔王部刀良、年參拾陸歲。

老丁 戶主從父兄。
 丁妻
 正丁 嫡子

男孔王部伊良都、年貳拾肆歲。
 男孔王部若麻呂、年貳拾壹歲。
 男孔王部宮麻呂、年貳拾壹歲。
 男孔王部德麻呂、年拾歲。
 男孔王部安麻呂、年柒歲。
 女孔王部小波古賣、年拾陸歲。
 孫孔王部麻呂、年貳歲。
 孫孔王部弟麻呂、年貳歲。
 孫孔王部古麻呂、年貳歲。

合口壹拾貳

口柒不課
 口伍課

正丁 嫡弟
 正丁
 正丁
 正丁
 小子
 小子
 小子
 小子
 小子
 綠兒
 綠兒
 綠兒
 口二小子
 口三綠兒
 口一丁女
 口一丁女
 口一老丁
 口四正丁
 正丁 戶主從父兄忍弟。

妻孔王部伊良賣、年肆拾捌歲。
 男孔王部黑秦、年參拾歲。
 男孔王部眞秦、年拾參歲。
 男孔王部德麻呂、年玖歲。
 女孔王部乎刀自賣、年貳拾歲。
 孫孔王部刀自賣、年肆歲。

合口捌

口陸不課
 口貳課

口二小子
 口二丁女
 口一次女
 口一小女
 口二正丁

戶主孔王部長、年貳拾貳歲。
 姉孔王部古伎賣、年肆拾貳歲。
 姉孔王部小伎賣、年貳拾參歲。
 從父兄孔王部井代、年參拾陸歲。

正丁 課戶
 丁女
 丁女
 正丁

姉孔王部伊努賣、年伍拾肆歲。
 姉孔王部刀自賣、年肆拾陸歲。
 姉孔王部德刀自賣、年貳拾柒歲。
 姪孔王部加良賣、年伍拾歲。
 女孔王部手子賣、年柒歲。

丁女
 丁女
 丁女
 小女
 上件一
 口、加
 良賣女

妹孔王部刀良賣、年拾柒歲。
 妹孔王部妹賣、年拾陸歲。
 妹孔王部子若賣、年玖歲。
 姑中臣部移乎賣、年陸拾壹歲。
 女孔王部黑賣、年貳拾玖歲。

次女
 小女
 小女
 老女
 丁女

合口玖
 口柒不課
 口貳課

口六丁女
 口一少女
 口二正丁

私原文私

戶孔王部牟湏比、年貳拾柒歲。
 母私部小手子賣、年伍拾捌歲。
 女孔王部宮賣、年柒歲。
 女孔王部小宮賣、年參歲。
 弟孔王部子結、年貳拾壹歲。
 妹孔王部子伊良賣、年拾捌歲。

正丁
 戶主弟
 衣比湏
 男。
 丁女
 小女
 綠女
 正丁
 次女

合口壹拾壹
 口玖不課
 口貳課

口二丁女
 口一老女
 口二次女
 口三少女
 口一綠女
 口二正丁

戶孔王部大麻呂、年參拾捌歲。
 弟孔王部弟麻呂、年貳拾歲。
 弟孔王部麻呂、年拾壹歲。
 弟孔王部弟麻呂、年玖歲。
 妹孔王部大根賣、年拾玖歲。

正丁
 戶主從
 父弟皆
 男。
 少丁
 小子
 小子
 次女

下段の弟
 は妹の意

戶主孔王部長、年伍拾歲。
 妻孔王部宮賣、年肆拾貳歲。
 妾三枝部大賣、年肆拾歲。
 男孔王部荒嶋、年貳拾壹歲。
 女孔王部大根賣、年貳拾柒歲。
 女孔王部結賣、年貳拾歲。
 女孔王部古結賣、年拾伍歲。
 女孔王部若与理賣、年捌歲。
 女孔王部德刀自賣、年柒歲。
 孫孔王部廣麻呂、年肆歲。
 孫女孔王部廣自刀賣、年壹歲。

正丁
 課戶
 丁妻
 丁妾
 正丁
 兵士、
 嫡子。
 丁女
 嫡女
 次女
 小女
 小女
 小女
 小女
 小子
 綠女
 上件二
 口、荒
 嶋男女

妹孔王部眞大根賣、年玖歲。

合口陸
 口肆不課
 口貳課

口二小子
 口一次女
 口一少女
 口一正丁
 口一少丁

妹孔王部宮賣、(年脫力) 貳拾捌歲。

從父弟孔王部黑栖、年肆拾壹歲。
 妹孔王部古都賣、年參拾柒歲。
 從父妹孔王部麻刀自賣、年參拾伍歲。
 弟孔王部乎刀自賣、年貳拾玖歲。
 弟孔王部若刀自賣、年貳拾柒歲。

丁女
 正丁
 丁女
 丁女
 丁女
 丁女

合口壹拾柒
 口壹拾肆不課
 口參課

口一小子
 口八丁女
 口一次女
 口三少女
 口一綠女
 口一兵士
 口二正丁

戶孔王部勝麻呂、年參拾伍歲。
 母孔王部伊良賣、年陸拾陸歲。
 妻孔王部家主賣、年參拾參歲。
 妾孔王部宮賣、年貳拾參歲。
 男孔王部与理麻呂、年拾肆歲。

正丁
 戶主弟
 耆女
 丁妻
 丁妾
 小子
 嫡子

妹孔王部安古賣、年拾伍歲。
從父兄孔王部百足、年參拾壹歲。

正丁 小女

女孔王部手子賣、年拾肆歲。

小女

女孔王部麻須良賣、年貳拾伍歲。

丁女

女孔王部宮賣、年貳拾歲。

次女

女孔王部阿耶賣、年玖歲。

小女

女孔王部嶋刀自賣、年肆歲。

小女

女孔王部若賣、年壹歲。

綠女

女孔王部廣遲賣、年壹歲。

綠女

孫孔王部安麻呂、年壹歲。

綠兒

孫女孔王部飯主賣、年捌歲。

小女

孫女孔王部足自刀賣、年伍歲。

小女

孫女孔王部德依賣、年肆歲。

小女

孫女孔王部小德賣、年貳歲。

綠女

上件五
口、石
麻呂男
女。

弟孔王部身麻呂、年拾柒歲。

少丁

弟孔王部荒人、年拾肆歲。

小子

弟孔王部麻居、年拾貳歲。

小子

妹孔王部古与理賣、年伍拾壹歲。

丁女

女孔王部阿耶賣、年貳拾歲。

次女

女孔王部古麻佐賣、年拾柒歲。

次女

妹孔王部國賣、年肆拾歲。

丁女

妹孔王部伊呂賣、年參拾玖歲。

丁女

妹孔王部若賣、年參拾伍歲。

丁女

妹孔王部官賣、年貳拾柒歲。

丁女

妹孔王部伊麻古賣、年貳拾貳歲。

丁女

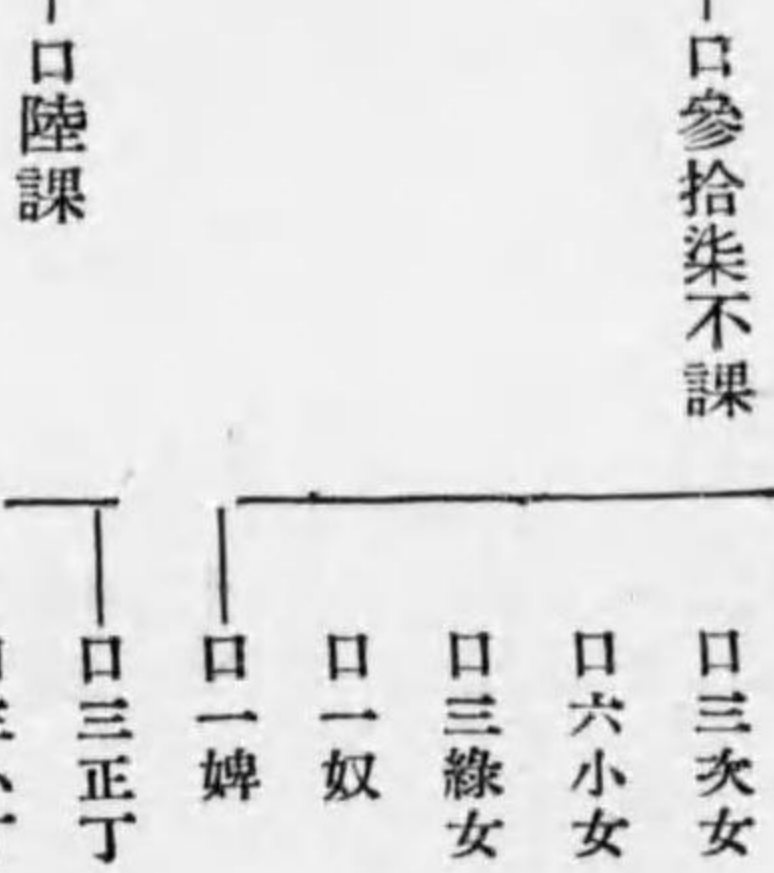
奴麻呂、年參拾參歲。

婢眞物賣、年貳拾陸歲。

丁女

口六小子
口二綠兒
口十三丁女

合口肆拾壹



戶孔王部古麻呂、年拾伍歲。

正丁 課戶、
戶主從
父弟。

○紙面ニ「下總國印」二十ニアリ。

戶孔王部眞秦、年參拾捌歲。

正丁 戶口古
麻呂從
父兄。

母孔王部伊呂賣、年陸拾玖歲。

耆女

弟孔王部大麻呂、參拾參歲。
(年脱カ)

正丁 兵士

弟孔王部德麻呂、年貳拾玖歲。

正丁

弟孔王部麻呂、年貳拾肆歲。

正丁

妹孔王部古阿由賣、年參拾伍歲。

丁女

正倉院文書抄

合口壹拾



戶孔王部熊、年陸拾陸歲。

耆老 戶主加
佐乎甥

妻刑部与伎賣、年陸拾參歲。

老妻

女孔王部佐久良賣、年參拾貳歲。

丁女

女孔王部小佐久良賣、年貳拾玖歲。

丁女

從子孔王部宇多麻呂、年貳拾玖歲。

正丁

從父妹孔王部古都賣、年伍拾陸歲。

丁女

姪孔王部伊良賣、年肆拾貳歲。

丁女

一三五

合口柒

口陸不課
口一耆老
口四丁女
口一老女
口一正丁
老丁 課戶

戶主孔王部已波、年陸拾參歲。
妻孔王部弟賣、年參拾歲。

從子孔王部尼麻呂、年肆拾伍歲。

妻孔王部百賣、年肆拾貳歲。

妻刑部阿佐賣、年參拾伍歲。

妻孔王部小刀自賣、年肆拾貳歲。

男孔王部麻呂、年參歲。

男孔王部小黑、年壹歲。

女孔王部波古賣、年柒歲。

○紙面ニ「下總國印」十四アリ。

男孔王部足梓、年貳歲。

女孔王部刀自賣、年陸歲。

孫孔王部布久理、年參歲。

孫女孔王部直賣、年貳歲。

孔王部古麻古賣、年拾貳歲。

合口玖

口陸不課
口參課

戶孔王部麻佐利、年肆拾歲。

妻三枝部阿尼賣、年參拾貳歲。

女孔王部刀自賣、年拾柒歲。

女孔王部都夫良賣、年拾陸歲。

女孔王部與曾布賣、年捌歲。

女孔王部麻與曾夫賣、年伍歲。

妹孔王部古阿耶賣、年參拾歲。

綠女 上件二
口、優
男女。

小女 上件一
口、阿
耶賣先
夫女。

口二綠兒

口一丁女

口二小女

口一綠女

口一兵士

口二正丁

兵士、
戶主黑
柄從父
弟。

正丁

丁妻

次女

小女

小女

小女

丁女

丁女

妹孔王部若賣、年貳拾壹歲。
婢倭賣、年伍拾壹歲。

○紙面ニ「下總國印」十アリ。

參拾歲。

妻三枝部意比等賣、年參拾參歲。

男孔王部古麻呂、年參歲。

妹孔王部與理賣、年貳拾貳歲。

庶母刑部依賣、年伍拾伍歲。

合口伍

口肆不課
口壹課

戶刑部止手、年伍拾伍歲。

妻三枝部犬賣、年伍拾壹歲。

妻孔王部奈爲賣、年肆拾貳歲。

妻孔王部古良賣、年肆拾貳歲。

男刑部百足、年貳拾歲。

正倉院文書抄

男刑部廣麻呂、年陸歲。

男刑部廣足、年壹歲。

女刑部古伊良賣、年貳拾柒歲。

女刑部若賣、年貳拾肆歲。

○紙面ニ「下總國印」二十一アリ。

孫女孔王部

姪孔王部若賣、年參拾柒歲。

甥孔王部得足、年參拾貳歲。

弟孔王部小足、年貳拾伍歲。

合口壹拾柒

口壹拾壹不課
口陸課

戶孔王部國、年肆拾貳歲。

女孔王部德賣、年拾陸歲。

女孔王部乎德賣、年拾貳歲。

小子 嫡弟

綠兒

丁女

丁女

小女

小女

正丁

正丁

口五小子

口四丁女

口二小女

口一兵士

口三正丁

口二次丁

正丁

小女

小女

○紙面ニ「下總國印」二十一アリ。

合口參
口貳不課
口壹課

口二小女
口一正丁

戶孔王部百、年肆拾貳歲。

廢疾 不課戶

妻孔王部小刀自賣、年肆拾陸歲。

丁妻

妾刑部結賣、年參拾歲。

丁妾

合口參
口參不課

口一廢疾
口二丁女

戶主孔王部刀良、年參拾參歲。

正丁 課戶

妹孔王部志流賣、年貳拾壹歲。

丁女

妹孔王部小白賣、年拾陸歲。

小女

從子孔王部小龍、年貳拾壹歲。

正丁

母孔王部麻豆賣、年伍拾肆歲。

丁女

妹孔王部麻都賣、年拾伍歲。

小女

合口陸
口肆不課

口二丁女
口二小女

戶孔王部志己夫、年伍拾捌歲。

正丁 戶主鳥 伯父

妻孔王部奈爲賣、年柒拾參歲。

著妻

妾三枝部伊良賣、年伍拾伍歲。

丁妾

合口陸

口肆不課
口貳課

口一小子
口一丁女
口二小女
口二正丁

口伍課

口三正丁
口一少丁

戶主孔王部鳥、年肆拾捌歲。

正丁 課戶

男孔王部眞皆、年拾陸歲。

小子

男孔王部多須伎、年貳拾柒歲。

正丁

女孔王部伊良賣、年貳拾壹歲。

丁女

婦孔王部兄賣、年拾壹歲。

小女

弟孔王部弟惠賣、年捌歲。

小女

男孔王部大麻呂、年參拾歲。
男孔王部宮麻呂、年拾陸歲。
女孔王部都夫良賣、年貳拾陸歲。
女孔王部小刀自賣、年貳拾歲。

合口柒
口伍不課
口貳課

戶孔王部惠弥、年陸拾壹歲。
妻刑部小黑賣、年伍拾貳歲。

男孔王部忍山、年拾五歲。

男孔王部五百依、年玖歲。

男孔王部五百麻呂、年陸歲。

女孔王部大根賣、年參拾歲。

女孔王部皆賣、年貳拾柒歲。

女孔王部眞刀自賣、年貳拾歲。

正丁 嫡子
小子 嫡弟
丁女 嫡女
次女

口一小子
口二丁女
口一次女
口一著女
口二正丁

老丁 戶主鳥 從父兄

丁妻

小子 嫡子

小子 嫡弟

小子 嫡女

丁女 嫡女

次女

女孔王部小刀自賣、年拾陸歲。
弟孔王部毛毛、年肆拾貳歲。
弟孔王部古毛毛、年參拾參歲。
女孔王部廣刀自賣、年貳歲。

○紙面ニ「下總國印」二十アリ。

合口壹拾
口柒不課
口參課

戶主孔王部志漏、年伍拾壹歲。

母土師部刀自賣、年柒拾貳歲。

妻大伴部稻依賣、年伍拾伍歲。

男孔王部刀良、年貳拾歲。

女孔王部宮賣、年貳拾參歲。

女孔王部小宮賣、年拾壹歲。

弟孔王部龍麻呂、年肆拾壹歲。

小女
正丁
正丁
綠女

口三丁女
口一小女
口一綠女
口三正丁

正丁 課戶

著女

丁妻

少丁

丁女

小女

正丁

男孔王部弟麻呂、年拾捌歲。

女孔王部塩賣、年壹歲。

女孔王部子塩賣、年壹歲。

合口肆

口貳不課

口貳課

戶主孔王部三村、年柒拾壹歲。

妻刑部伊比賣、年陸拾壹歲。

妾孔王部刀自賣、年參拾玖歲。

男孔王部麻呂、年貳拾捌歲。

男孔王部弟麻呂、年貳拾伍歲。

女孔王部家主賣、年參拾玖歲。

女孔王部廣刀自賣、年壹歲。

合口捌

口陸不課

少丁

綠女

綠女

口二綠女

口一正丁

口一少丁

耆老 課戶

老妻

丁妾

正丁

正丁

丁女

綠女

口一綠兒

口一耆老

口二丁女

口一老女

口一綠女

口貳課

口一兵士

口一正丁

課戶、
兵士、
戶主三
村從子

正丁

丁妻

小子

正丁

口一小子

口一丁女

口一兵士

口一正丁

課戶、
兵士、
廣刀自賣
字の次に
ある一人

正丁

綠兒

小女

正丁

小女

丁女

戶孔王部百足、年肆拾貳歲。

妻孔王部古奈賣、年肆拾壹歲。

男孔王部麻呂、年陸歲。

弟孔王部大麻呂、年參拾壹歲。

合口肆

口貳不課

口貳課

戶主孔王部國麻呂、年參拾貳歲。

男孔王部鳴麻呂、年參歲。

女孔王部弟賣、年捌歲。

弟孔王部安麻呂、年參拾歲。

女孔王部德賣、年捌歲。

妹孔王部德賣、年貳拾捌歲。

男孔王部麻呂、年拾貳歲。

男孔王部勝、年玖歲。

男孔王部小勝、年柒歲。

女孔王部与佐賣、年貳拾貳歲。

女孔王部眞黑賣、年拾貳歲。

女孔王部小黒賣、年柒歲。

弟孔王部德太理、年參拾壹歲。

男孔王部古麻呂、年柒歲。

弟孔王部小足、年貳拾柒歲。

妹孔王部小宮賣、年肆拾肆歲。

弟孔王部与伎賣、年拾陸歲。

合口壹拾五

口壹拾貳不課

口參課

課戶、
王部國
麻呂從
父兄

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

戶主孔王部佐留、年肆拾柒歲。

母孔王部乎豆賣、年柒拾參歲。

妻孔王部若大根賣、年參拾柒歲。

男孔王部古麻呂、年拾伍歲。

合口貳

口貳課

口貳不課

口二正丁

殘疾 課戶

耆女

丁妻

小子 嫡子

妹孔王部眞德賣、年貳拾肆歲。

妹孔王部眞等賣、年拾伍歲。

庶母刑部伎弥賣、年肆拾柒歲。

合口玖

口柒不課

口貳課

口一綠兒

口三丁女

口三小女

口二正丁

口一綠兒

口三丁女

口三小女

口二正丁

口一綠兒

口三丁女

口三小女

口二正丁

口一綠兒

口三丁女

口三小女

口二正丁

戶孔王部子諸、年伍拾伍歲

課戶、
王部孔
留從父
兄。

男孔王部結、年參拾歲。

男孔王部子結、年貳拾歲。

男孔王部刀良、年拾陸歲。

女孔王部与理實、年貳拾壹歲。

合口伍

口貳不課
口參課

戶孔王部小國、年貳拾柒歲。

母長谷部小宮實、年陸拾柒歲。

女孔王部刀自實、年伍歲。

妹孔王部弟阿古實、年參拾玖歲。

妹孔王部麻刀自實、年貳拾參歲。

男孔王部法麻呂、年壹歲。

女孔王部法實、年壹歲。

綠女
口、上
刀、件
自、二
賣、麻
男女。

合口柒

口柒不課

戶孔王部德麻呂、年參拾參歲。

父孔王部金、年陸拾歲。

妻磯部刀良實、年伍拾壹歲。

妻孔王部古都實、年伍拾伍歲。

弟孔王部小德、參拾壹歲。

弟孔王部廣嶋、年拾陸歲。

弟孔王部廣足、年拾肆歲。

弟孔王部古麻呂、年捌歲。

弟孔王部弟麻呂、年拾伍歲。

口一癩疾
口一綠兒
口二丁女
口一綠女
口一綠女
口一耆女

癩疾 課戶

正丁

丁妻

丁妾

正丁

小子

小子

小子

小子

妹孔王部小宮實、年貳拾壹歲。

妹孔王部小廣實、年拾壹歲。

妹孔王部若實、年拾壹歲。

妹孔王部子若實、年玖歲。

從父弟孔王部荒、年貳拾肆歲。

妹孔王部荒實、年貳拾壹歲。

從父妹孔王部黑實、年貳拾柒歲。

合口壹拾陸

口壹拾參不課
口參課

戶孔王部三田次、年參拾貳歲。

母刑部刀自實、年伍拾貳歲。

兄孔王部德麻呂、年參拾參歲。

弟孔王部麻呂、年貳拾歲。

弟孔王部古麻呂、年拾伍歲。

丁女

小女

小女

小女

正丁

丁女

正丁

口四小子

口一癩疾

口五丁女

口三正丁

正丁

課戶

丁女

正丁

少丁

小子

妹孔王部波古實、年拾陸歲。

從父弟孔王部古麻呂、年拾玖歲。

母石寸部比米都實、年伍拾貳歲。

妹孔王部枳美實、年貳拾捌歲。

合口玖

口伍不課
口肆課

戶孔王部尼麻呂、年肆拾貳歲。

女孔王部小刀自實、年拾壹歲。

女孔王部麻刀自實、年拾歲。

弟孔王部色夫、年參拾玖歲。

小女

少丁

丁女

丁女

正丁

口一小子

口三丁女

口一小子

口二正丁

口二正丁

口二少丁

正丁

小女

小女

正丁

口二小女

口二正丁

不課は不課戸か

戸孔王部弟妹賣、年貳拾捌歲。

弟孔王部奈都賣、年貳拾貳歲。

姑孔王部小刀自賣、年陸拾參歲。

合口參

口參不課

戸主私部眞嘗、年肆拾柒歲。

妻孔王部伊呂賣、伍拾捌歲。

妾孔王部奈爾賣、年參拾貳歲。

妾刑部比須良賣、年參拾伍歲。

男私部大海、年貳拾陸歲。

男私部得麻呂、年貳拾壹歲。

男私部小得、年貳拾陸歲。

男私部麻呂、年拾捌歲。

男私部古麻呂、年捌歲。

不課、戸主從父弟麻呂妹。

丁女

丁女

老女

口二丁女
口一老女

正丁 課戸

丁妻

丁妾

正丁 兵士、嫡子。

正丁

少丁

少丁

小子

女私部阿古賣、年貳拾玖歲。

女私部小等賣、年拾參歲。

女私部古安賣、年玖歲。

女私部麻安賣、年捌歲。

女私部古重賣、年參歲。

合口壹拾肆

口玖不課

口伍課

戸私部眞荒、年貳拾柒歲。

姉私部子良賣、年伍拾肆歲。

妹私部荒賣、年貳拾玖歲。

刑部若賣、年貳拾貳歲。

丁女 嫡女

小女

小女

小女

綠女

口一小子

口四丁女

口三小女

口一綠女

口一兵士

口二正丁

口二少丁

課戸、戸主從父弟。

正丁

丁女

丁女

丁女

合口肆

口參不課

口壹課

戸私部伊良賣、年伍拾伍歲。

女私部古阿由賣、年參拾貳歲。

女私部古都賣、年貳拾捌歲。

女私部眞都賣、年貳拾參歲。

女私部弟賣、年貳拾陸歲。

女私部子弟賣、年拾陸歲。

合口陸

口陸不課

戸私部大、年伍拾柒歲。

妻孔王部犬賣、年伍拾壹歲。

正倉院文書抄

口三丁女

口一正丁

不課戸、眞弟古麻呂母。

丁女

丁女

丁女

次女

小女

口四丁女
口一次女
口一小女

正丁

丁妻

課戸、戸主從父弟眞荒伯父。

男私部馬手、年貳拾捌歲。

女私部由良賣、年參拾歲。

女私部弟由良賣、年貳拾玖歲。

口參不課

口玖不課

口伍課

戸主孔王部猪、年肆拾貳歲。

母小長谷部棟賣、年捌拾肆歲。

妻孔王部若賣、年參拾玖歲。

男孔王部乎刀良、年拾玖歲。

男孔王部白麻呂、年柒歲。

男孔王部小白、年肆歲。

男孔王部弟麻呂、年壹歲。

正丁 兵士、嫡子。

丁女

丁女

口三丁女

口四丁女

口三小女

口一著女

口三正丁

口二少丁

正丁 課戸

著女

丁妻

少丁

小子

小子

綠兒

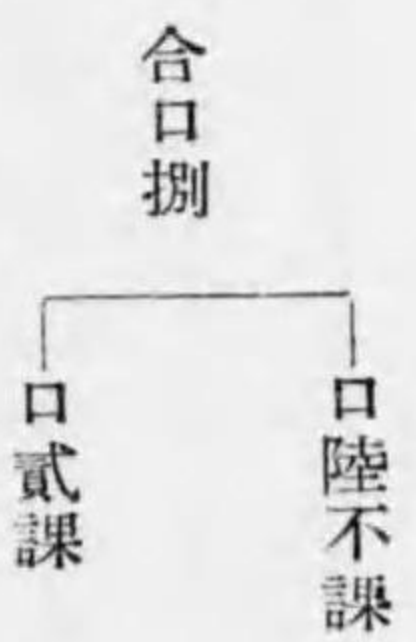
女孔王部若賣、年拾伍歲。
女孔王部妹賣、年捌歲。
弟孔王部子猪、年參拾歲。
私部伊呂賣、年伍拾捌歲。



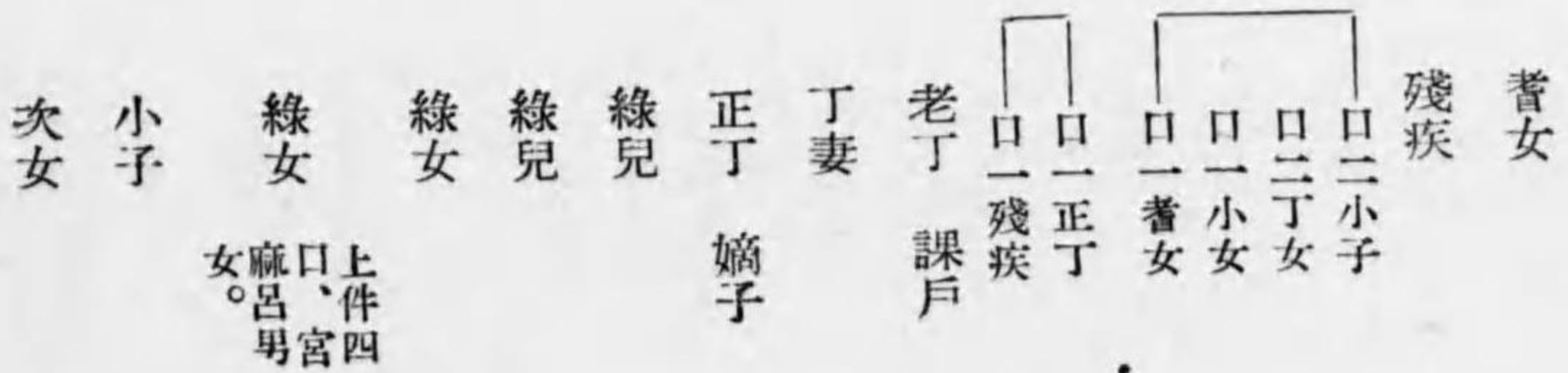
戶孔王部奈爲、年肆拾柒歲。
妻孔王部阿古賣、年肆拾柒歲。
妾孔王部宮賣、年參拾玖歲。
男孔王部麻呂、年拾肆歲。
男孔王部古麻呂、年拾壹歲。
女孔王部子妹賣、年捌歲。



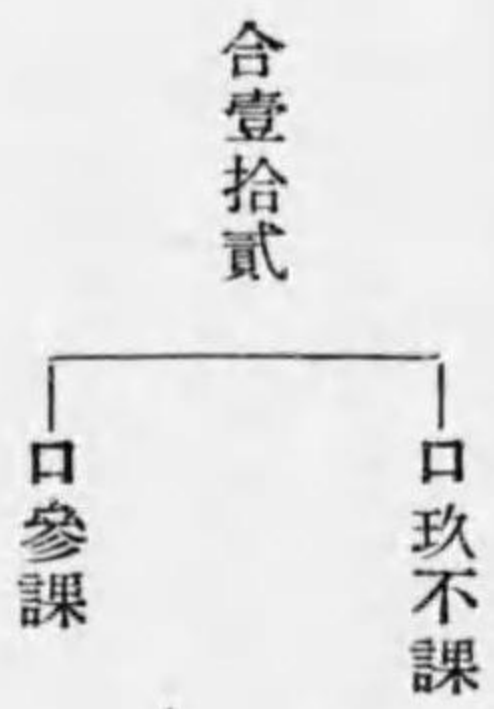
姑孔王部古都賣、年陸拾陸歲。
從父弟孔王部國、年參拾捌歲。



戶主孔王部比都自、年陸拾參歲。
妻藤原部奈爲賣、年陸拾歲。
男孔王部宮麻呂、年貳拾肆歲。
孫孔王部麻志比等、年壹歲。
孫孔王部若麻呂、年壹歲。
孫女孔王部木葉賣、年參歲。
孫女孔王部小刀自賣、年壹歲。
甥孔王部刀良、年拾參歲。
妹孔王部阿古賣、年拾柒歲。



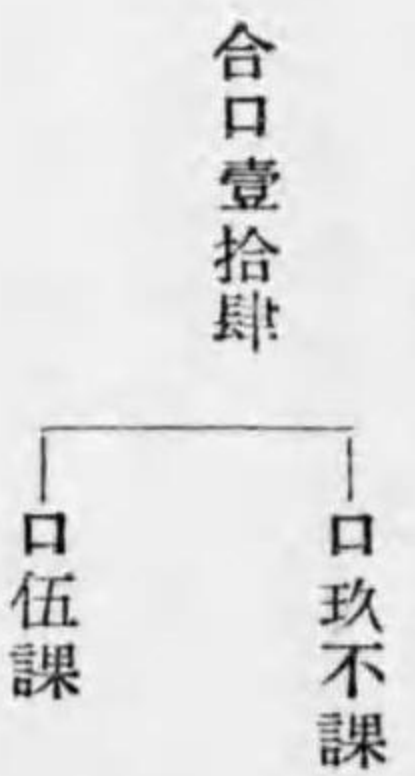
妹孔王部弟阿古賣、年陸歲。
姊孔王部倭賣、年參拾柒歲。
甥孔王部知麻呂、年參拾貳歲。



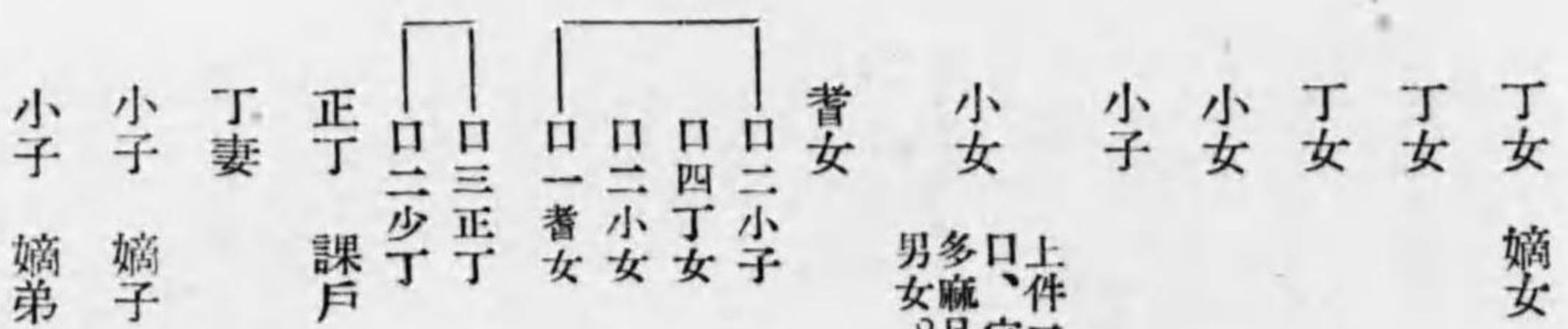
戶孔王部黑人、年伍拾肆歲。
妻孔王部阿古賣、年伍拾參歲。
男孔王部宇多麻呂、年參拾壹歲。
男孔王部古麻呂、年貳拾肆歲。
男孔王部麻呂、年貳拾歲。
男孔王部龍麻呂、年拾柒歲。
男孔王部小勝、年拾壹歲。



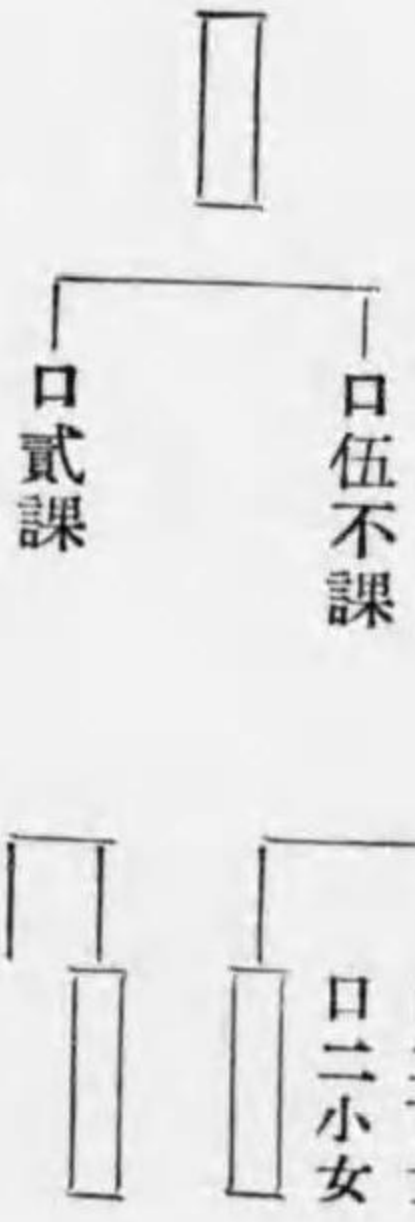
女孔王部比米都賣、年參拾伍歲。
女孔王部古布賣、年貳拾柒歲。
女孔王部麻比伎賣、年貳拾壹歲。
女孔王部古奈麻都賣、年拾歲。
孫孔王部猪麻呂、年拾歲。
孫女孔王部与理賣、拾玖歲。
姑三枝部宮賣、年柒拾伍歲。



戶主孔王部荒馬、年伍拾伍歲。
妻刑部龍賣、年伍拾陸歲。
男孔王部麻呂、年拾陸歲。
男孔王部弟麻呂、年拾伍歲。



妻孔王部小大根賣、年參拾貳歲。
女孔王部阿古賣、年玖歲。
女孔王部諸阿古賣、年陸歲。
女孔王部阿佐賣、年貳歲。
弟孔王部宇多麻呂、年參拾柒歲。
姉孔王部大根賣、年伍拾壹歲。



戶孔王部古尼麻呂、年肆拾壹歲。
男孔王部神、年拾陸歲。
弟孔王部真尼麻呂、年參拾伍歲。
女孔王部大海賣、年拾壹歲。
女孔王部弟賣、年陸歲。

丁妻
小女
小女
綠女
正丁
丁女
口二丁女
口二小女
課戶、
弟。秦從父
正丁
小子
正丁
兵士
小女
小女

孔王部刀良賣、年陸拾壹歲。



戶主孔王部弥等、年陸拾壹歲。
妻孔王部古奈賣、年陸拾陸歲。
男孔王部小倭、年貳拾伍歲。
女孔王部古与理賣、年參拾貳歲。
女孔王部麻与理賣、年貳拾玖歲。
姪孔王部阿古賣、年拾陸歲。
弟孔王部麻古賣、年拾肆歲。
孔王部大、年柒拾玖歲。
從子孔王部古忍、年肆拾陸歲。
姉孔王部倭賣、年肆拾參歲。
弟孔王部犬賣、年參拾五歲。

老女 神母
口一小子
口一老女
口二小女
口一兵士
口一正丁
老丁 課戶
耆妻
正丁 嫡子
丁女 嫡女
小女
小女
耆老 寄口
正丁
丁女
丁女

合口壹拾壹



戶孔王部刀良、年參拾壹歲。
男孔王部古德麻呂、年貳歲。
弟孔王部小刀良、年參拾歲。
姉孔王部若賣、年肆拾柒歲。
妹孔王部古都賣、年參拾玖歲。
從父弟孔王部古秦、年貳拾伍歲。
女孔王部廣刀自賣、年貳歲。
外從父妹孔王部伎弥賣、年伍拾參歲。
弟孔王部官賣、年伍拾壹歲。

口一耆老
口四丁女
口二小女
口一耆女
口一老丁
口二正丁
課戶、
弟。王部三
止從父
正丁
綠兒
正丁
兵士
丁女
丁女
綠女
正丁
丁女
丁女

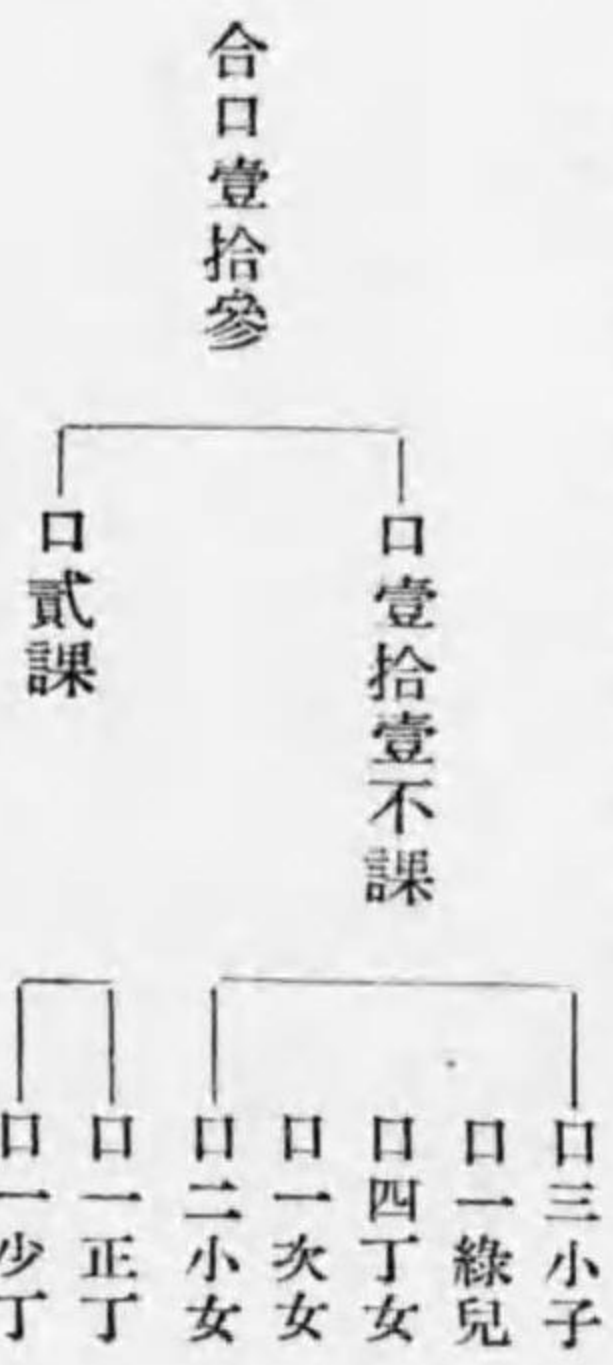
合口玖



戶主動十一等孔王部猪、年肆拾肆歲。
妻孔王部麻刀賣、年肆拾陸歲。
妾儀部尔伎賣、年肆拾玖歲。
男孔王部黑麻呂、年拾捌歲。
男孔王部麻呂、年拾伍歲。
男孔王部宇閉、年拾貳歲。
男孔王部足麻呂、年肆歲。
男孔王部五百足、年貳歲。
女孔王部眞物賣、年貳拾貳歲。
女孔王部家主賣、年拾柒歲。
女孔王部手子賣、年拾伍歲。
女孔王部乎手子賣、年陸歲。

口一綠兒
口四丁女
口一綠女
口三正丁
正丁 課戶
丁妻
丁妾
少丁
小子
小子
小子
綠兒
丁女
次女
小女
小女

從父妹孔王部多須伎賣、年參拾捌歲。



戶孔王部古忍、年參拾伍歲。

男孔王部尾麻呂、年拾柒歲。

男孔王部乎刀良、年捌歲。

男孔王部眞刀良、年陸歲。

女孔王部宮賣、年貳拾歲。

女孔王部小宮賣、年拾壹歲。

姉孔王部古賣、年伍拾壹歲。

姉孔王部乎等賣、年參拾柒歲。

孔王部弟國、年伍拾陸歲。

- 丁女
- 口三小子
- 口一綠兒
- 口四丁女
- 口一次女
- 口二小女
- 口一正丁
- 口一少丁
- 正丁
- 少丁
- 小子
- 小子
- 次女
- 小女
- 丁女
- 正丁
- 寄口

戶主動
十一等
孔王部
猪從父
弟

女孔王部乎德賣、年貳拾壹歲。

從父弟孔王部吉麻呂、年拾肆歲。

妹孔王部弟賣、年拾貳歲。



戶孔王部忍、年參拾柒歲。

妹孔王部若賣、年拾伍歲。

從父弟孔王部小刀良、年貳拾歲。

母孔王部乎子賣、年陸拾壹歲。

妹孔王部古乎奈賣、年參拾伍歲。

妹孔王部眞宿奈賣、年參拾貳歲。

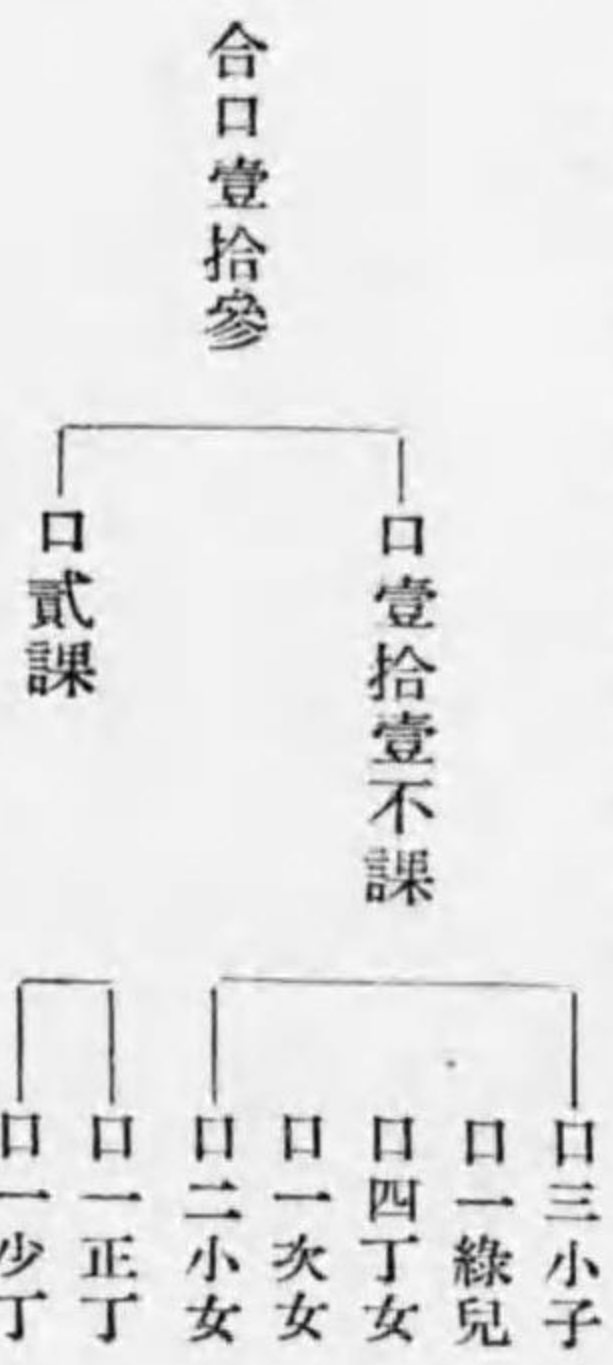
從父弟孔王部宮麻呂、年貳拾捌歲。

庶母孔王部古都賣、年陸拾玖歲。

- 丁女
- 小子
- 小女
- 正丁
- 課戶
- 少丁
- 小女
- 老女
- 丁女
- 正丁
- 寄女

戶孔王部
古忍の行部
に課したか

從父妹孔王部多須伎賣、年參拾捌歲。



戶孔王部古忍、年參拾伍歲。

男孔王部尾麻呂、年拾柒歲。

男孔王部乎刀良、年捌歲。

男孔王部眞刀良、年陸歲。

女孔王部宮賣、年貳拾歲。

女孔王部小宮賣、年拾壹歲。

姉孔王部古賣、年伍拾壹歲。

姉孔王部乎等賣、年參拾柒歲。

孔王部弟國、年伍拾陸歲。

- 丁女
- 口三小子
- 口一綠兒
- 口四丁女
- 口一次女
- 口二小女
- 口一正丁
- 口一少丁
- 正丁
- 少丁
- 小子
- 小子
- 次女
- 小女
- 丁女
- 正丁
- 寄口

戶主動
十一等
孔王部
猪從父
弟

女孔王部乎德賣、年貳拾壹歲。

從父弟孔王部吉麻呂、年拾肆歲。

妹孔王部弟賣、年拾貳歲。



戶孔王部忍、年參拾柒歲。

妹孔王部若賣、年拾伍歲。

從父弟孔王部小刀良、年貳拾歲。

母孔王部乎子賣、年陸拾壹歲。

妹孔王部古乎奈賣、年參拾伍歲。

妹孔王部眞宿奈賣、年參拾貳歲。

從父弟孔王部宮麻呂、年貳拾捌歲。

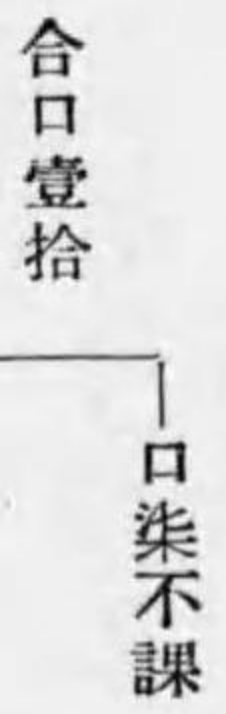
庶母孔王部古都賣、年陸拾玖歲。

- 丁女
- 小子
- 小女
- 正丁
- 課戶
- 少丁
- 小女
- 老女
- 丁女
- 正丁
- 寄女

戶孔王部
古忍の行部
に課したか

姉孔王部阿耶賣、年貳拾參歲。

弟孔王部阿古賣、年貳拾歲。

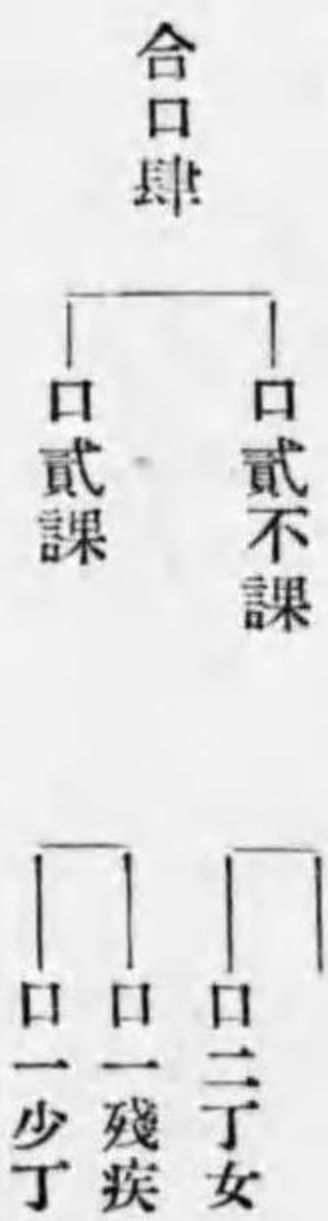


戶主孔王部古富尼、年貳拾玖歲。

弟孔王部荒嶋、年貳拾歲。

從父妹孔王部古与理賣、年貳拾陸歲。

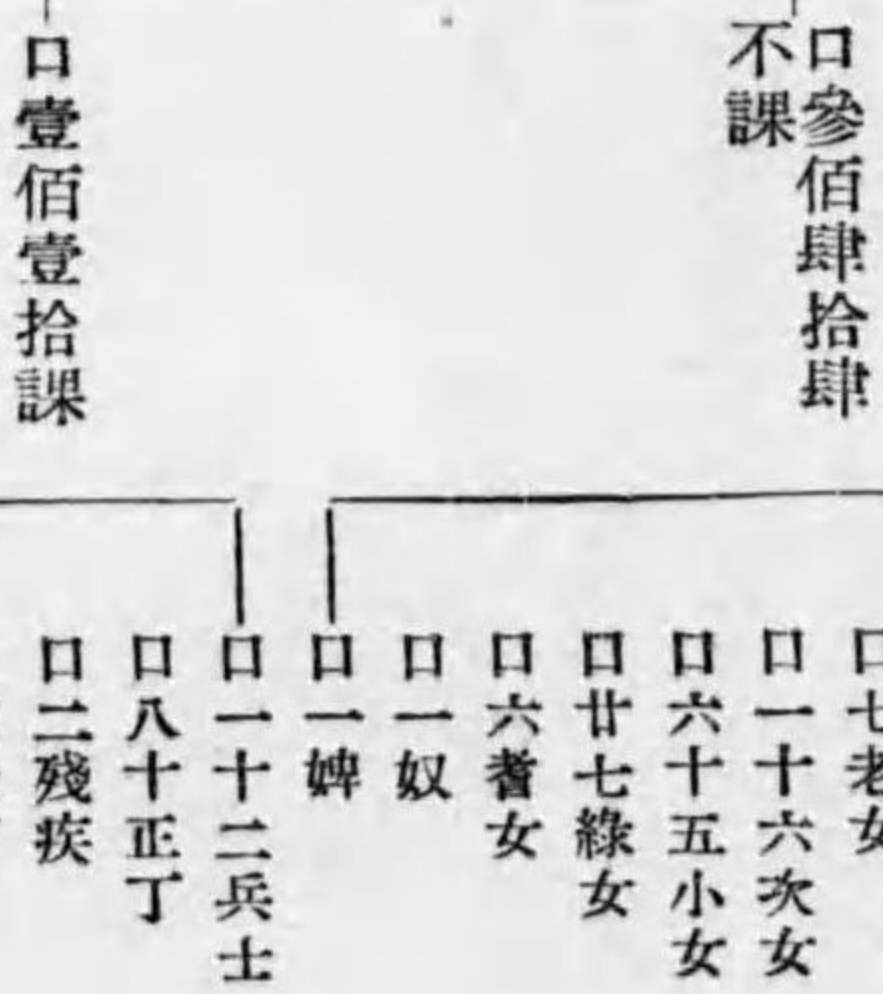
庶母孔王部古都賣、年伍拾玖歲。



甲和里戶肆拾肆

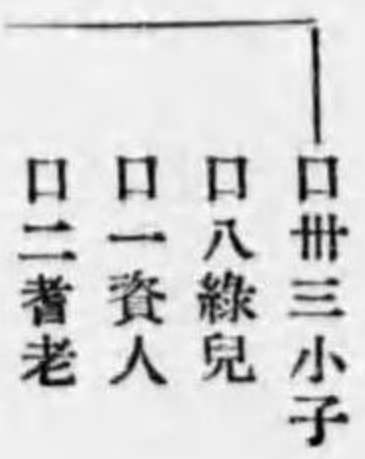
正倉院文書抄

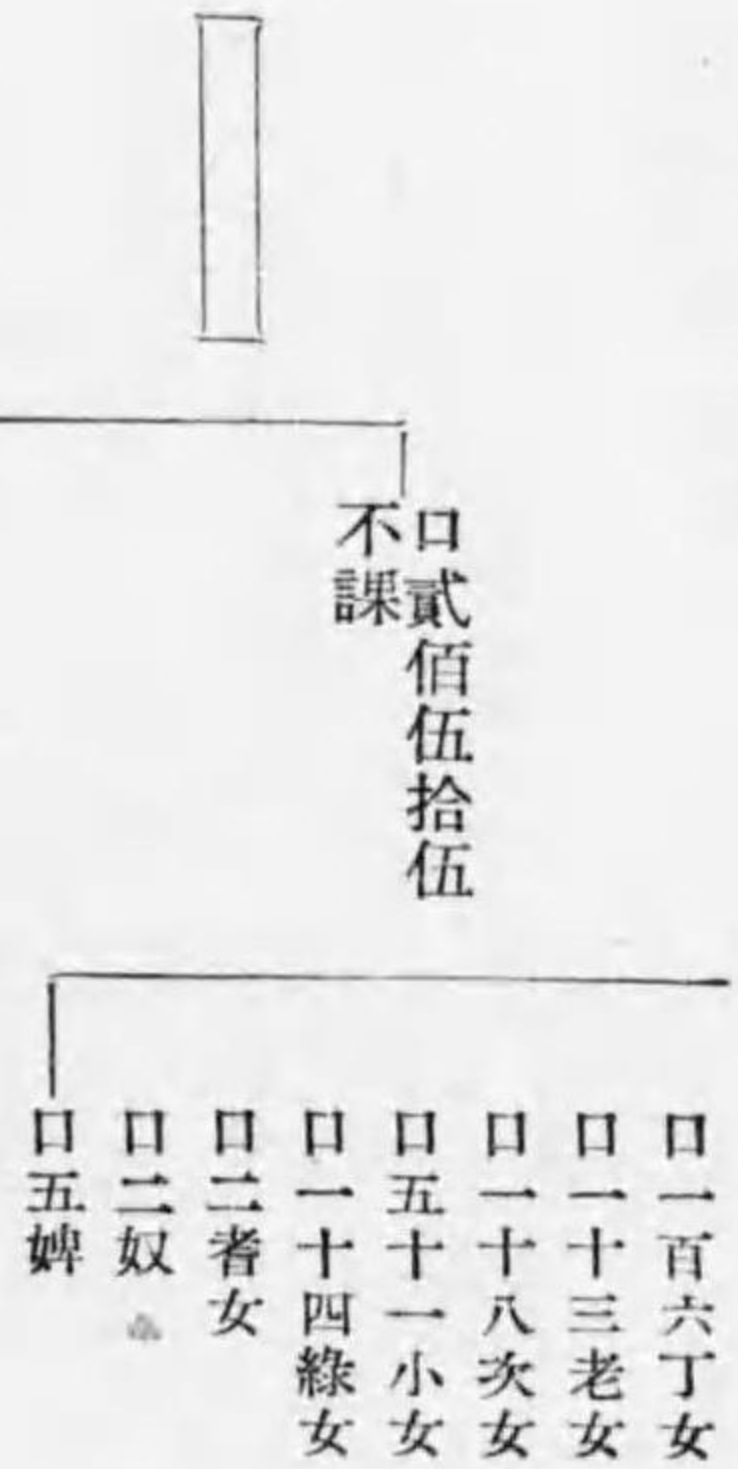
合口肆佰伍拾肆



里正孔王部荒馬

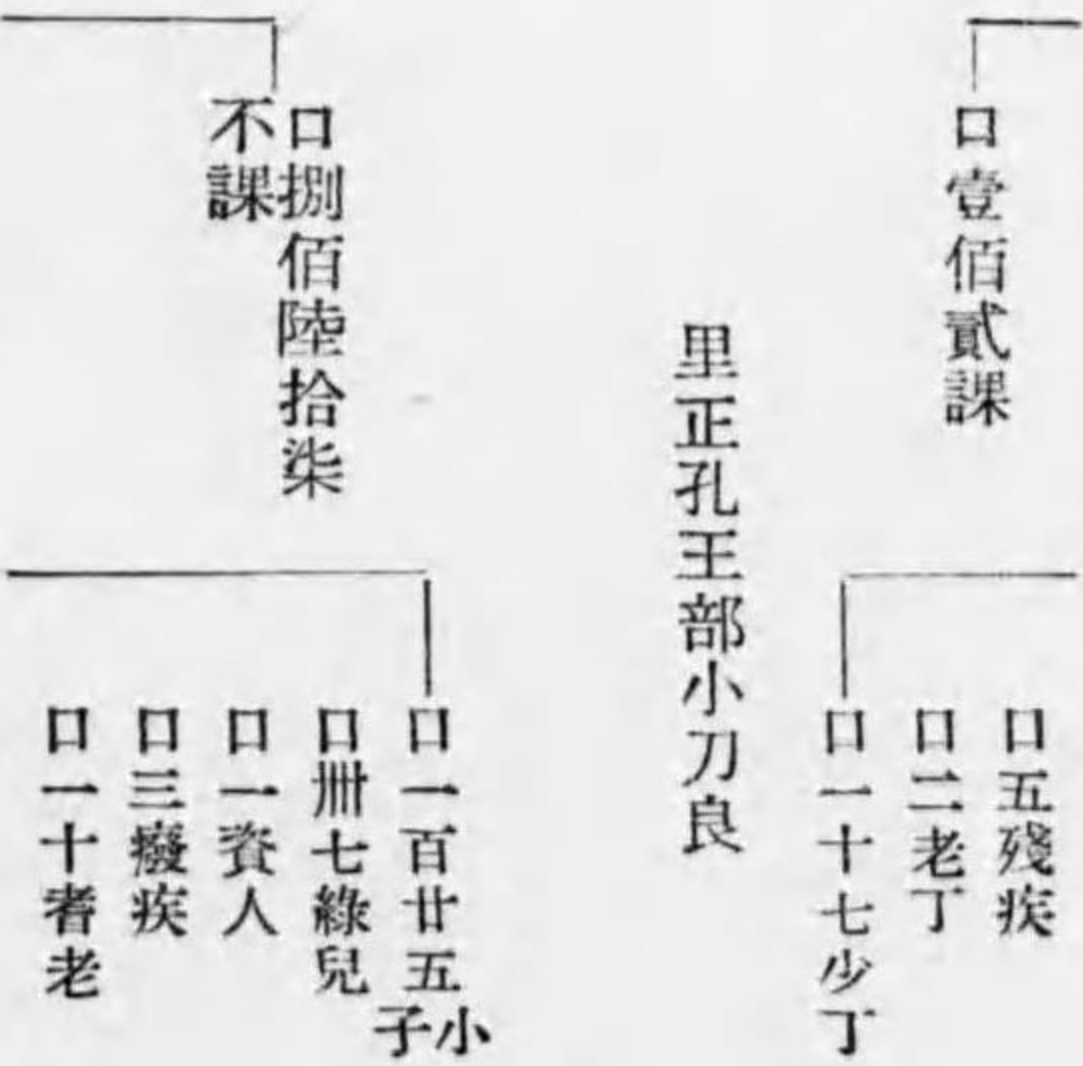
仲村里戶肆拾肆





里正孔王部塩

郷戸合伍拾里三



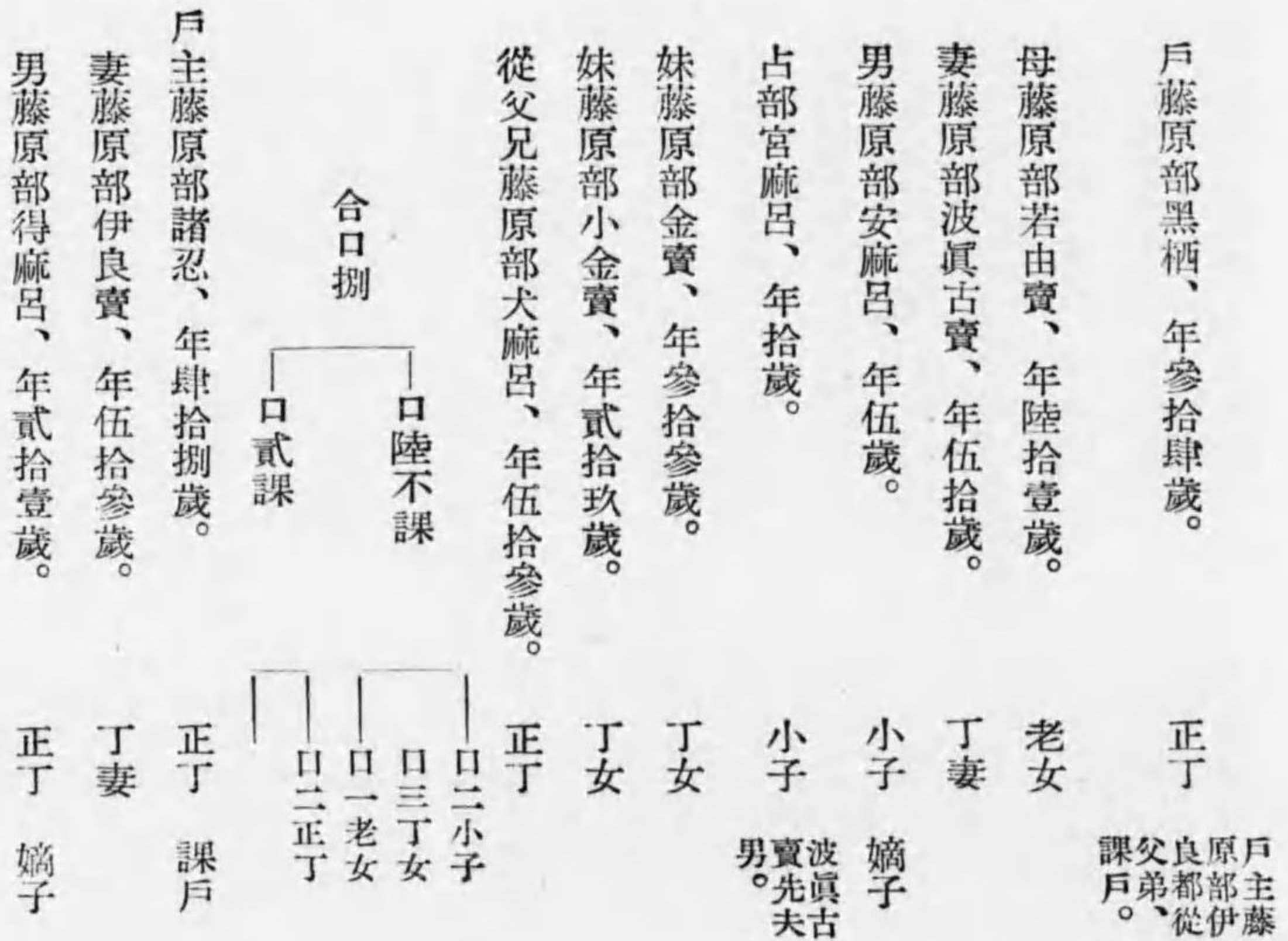
嶋俣里戸肆拾貳



(繼目裏書)
下總國倉麻郡意布郷養老五年戸籍
(相馬)
○意布郷ノ字面ニ「下總國印」一アリ。
○紙面ニ「下總國印」二十九アリ。

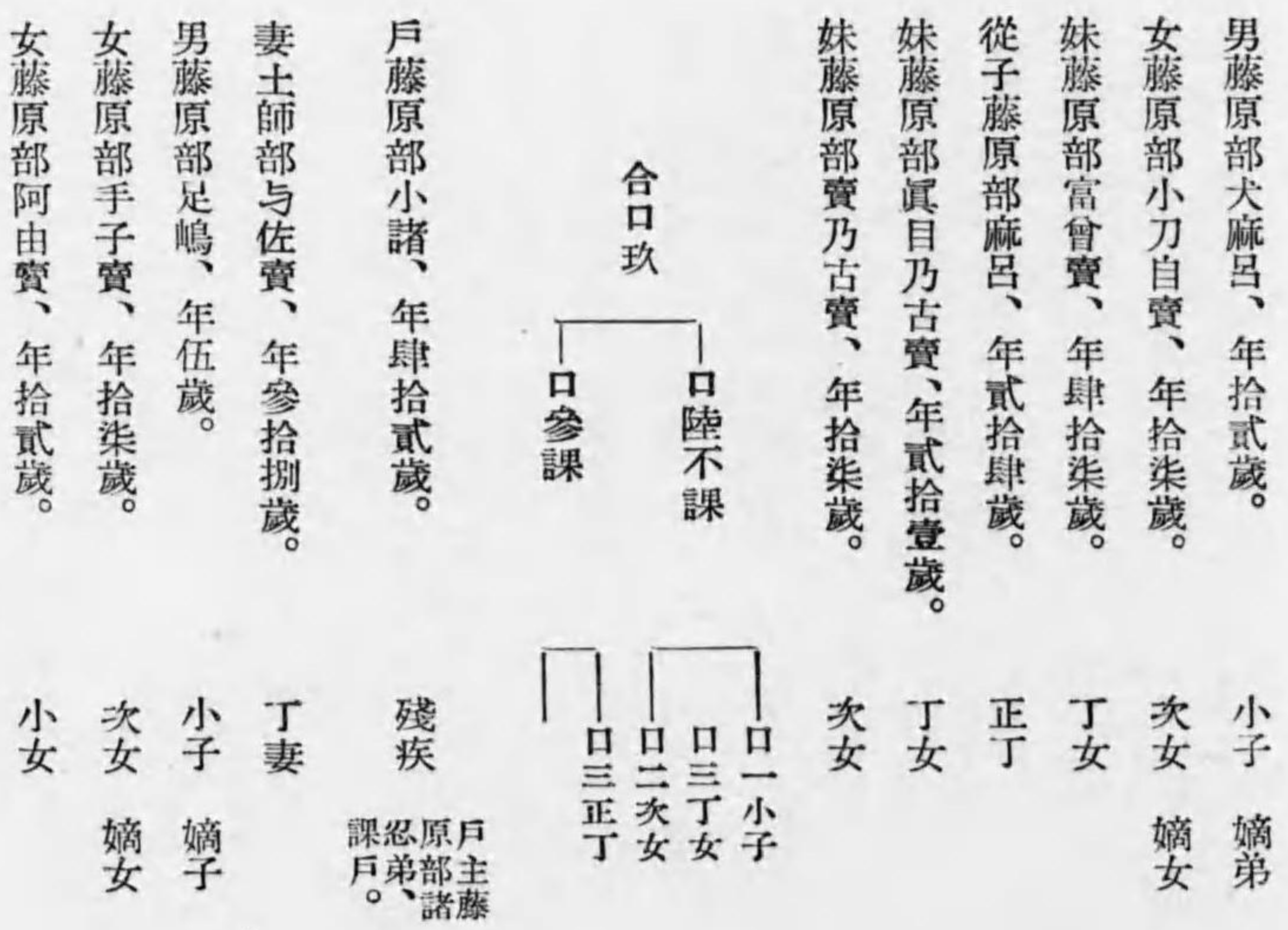


藤原文藤



正倉院文書抄

一五七



妻藤原部直弥居賣、年肆拾伍歲。

丁妻

女藤原部直櫻、年拾貳歲。

小女

男藤原部直五百瀬麻呂、年貳拾

正丁 嫡子

婦藤原部眞櫻賣、年貳拾捌歲。

丁妻 得麻呂

男藤原部直瀬麻呂、年拾捌歲。

少丁 嫡弟

孫藤原部麻呂、年壹歲。

綠兒

男藤原部直眞尔瀬、年拾柒歲。

少丁

〔柒歲。〕

小女

男藤原部直多尔波、年陸歲。

小子

〔貳歲。〕

綠女

男藤原部直枳美麻呂、年貳歲。

綠兒

○紙面ニ「下總國印」一アリ

□女

男藤原部直宜、年拾陸歲。

小子

○紙面ニ「下總國印」一アリ

少丁

男藤原部直高重、年拾壹歲。

小子

○紙面ニ「下總國印」一アリ

丁女 嫡女

(塵芥^{二十}) ○紙面ニ「下總國印」ニアリ。

男藤原部直高重、年拾壹歲。

小子

○紙面ニ「下總國印」一アリ

正丁 嫡弟、兵士。

男藝原部直、年拾伍歲。

少丁

(繼目裏書) (香取カ)

正丁

男藤原部眞足、年拾柒歲。

少丁 妾子

下總國鈺托郡少幡郷養老五年戶藉 (藉)

〔柒歲。〕

少丁

○少幡郷ノ字面ニ「下總國印」一アリ。

○紙面ニ「下總國印」ニアリ。

□女

男壬生部波奈、年拾貳歲。

小子

女壬生部繩賣、年參拾柒歲。

丁女

女壬生部眞繩賣、年參拾歲。

丁女

女壬生部大繩賣、年拾柒歲。

次女

女壬生部花賣、年捌歲。

小女

妹壬生部手子賣、年肆拾玖歲。

丁女

女壬生部飯賣、年捌歲。

小女

妹壬生部宅賣、年肆拾貳歲。

丁女

從父妹壬生部官刀自賣、年參拾

丁女

壬生部乎枳美賣、年伍拾壹歲。

丁女

奴荒嶋、年肆拾壹歲。

丁女

奴長麻呂、年捌歲。

丁女

口肆課

口二正丁
口一殘疾
口一少丁

戶壬生部嶋、年肆拾歲。

正丁 兵士、
戶主弟、
課戶。

男壬生部德麻枳、年貳拾壹歲。

正丁 嫡子

男壬生部麻德、年拾肆歲。

小子 嫡弟

男壬生部德太理、年玖歲。

小子

女壬生部得賣、年陸歲。

小女 嫡女

女壬生部德刀自賣、年參歲。

綠女

合口貳拾玖

口貳拾伍不課

口五小子
口一耆老
口十丁女
口一次女
口六小女
口二奴